

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第149集

交野市

平池遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

平池遺跡は、交野市の東南部、寝屋川市との市境付近に立地しています。一般国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路の建設に伴う埋蔵文化財の確認調査によって、平成16年3月に確認されました。ごく最近、発見された遺跡といえます。

淀川左岸のいわゆる北河内地域では、一般国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路工事に先立つ発掘調査によって、新たに多くの遺跡が見つかり、また地域の歴史を考える上で、欠くことのできないような貴重な発見が報告されています。

発見された遺跡では、必要に応じて本調査をおこない、その成果を報告してまいります。本書もそのひとつであり、これまで知られていなかった平池遺跡の実態について、みなさまにご報告いたします。

平池遺跡が立地する交野台地の近辺では、大阪における縄文時代早期の指標となる土器が出土した神宮寺遺跡、弥生時代の大型建物が検出された上の山遺跡、渡来文化の色彩が濃い茄子作遺跡など、これまでも多くの遺跡が報告されてきました。また、文献史料にも、平安時代から中世にかけて営まれたという星田牧や星田庄などが登場します。早くから記録され、語り継がれてきた歴史豊かな地域であります。

現在、平池の地に立てば、なだらかな緑の稜線が続く生駒山を背景として、実り豊かな果樹園と、棚田状に作られた田園が続く風景をみわたすことができます。一見、静かな日本の原風景のように見えますが、その奥には、水に乏しい段丘を切り開き、耕し続けてきた人々のたゆまぬ努力が秘められています。

大々的な土地への関与は、中世からはじまったと見られていますが、平池遺跡では、まさにその中世の水田跡が確認されました。遺構面に刻まれた溝群は、この地の開墾に力をそそいだ、人々の営為の証でもあります。この地に生きた人々の想いを、今回の報告のなかで、皆様にお伝えできれば幸いに存じます。

最後に、調査にあたってご助力・ご協力をいただきました関係諸機関・地元関係者各位、また埋蔵文化財の調査に対してご理解とご教示をいただきました地域の皆様に、深く謝意を表します。これからも、変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成18年12月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪府交野市星田北9丁目に所在する、平池遺跡の発掘調査報告書である。
2. この発掘調査は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路建設に伴うものである。西日本高速道路株式会社 関西支社（平成17年10月1日付で日本道路公団関西支社より社名変更）から財団法人 大阪府文化財センターが委託を受け、調査をおこなった。
委託期間・および調査期間・整理期間は以下のとおりであり、平成18年度に本書の刊行を以って、すべての業務を完了した。
委託期間 平成16年5月1日～平成17年3月31日
調査期間 平成16年6月9日～平成17年3月18日
整理期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日
3. 発掘調査は以下の体制で実施した。
調査部長 玉井功、京阪調査事務所長 渡邊昌宏、京阪調査事務所調査第五係長 秋山浩三、同技師 長戸満男、同非常勤専門調査員 三浦基行、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、同主査 山上弘、同技師 信田真美世
また、整理作業は以下の体制で実施した。
調査部長 赤木克視、京阪調査事務所長 山本彰、同主査 上野貞子〔遺物写真〕、京阪調査事務所調査第五係長 秋山浩三、同技師 黒須亜希子、同専門調査員 三浦基行、調整課長 田中和弘、同係長 芝野圭之助、同主査 山上弘、同技師 信田真美世
4. 発掘調査および整理作業の実施にあたっては、京阪調査事務所をはじめとする当センター職員の協力を得た。
非常勤職員の参加は下記のとおりである。
相座茉莉子・内海 慎・大木 要・大良賢一・高村真菜・竹原千佳誉・辻 浜代・泊 清治郎・田中正子・楨原美智子・吉住紗也香
5. 発掘調査および整理作業の過程で、地元交野市教育委員会、星田地区自治会、同水利組合をはじめ、下記の方々にご協力、ご指導を賜った。記して謝意を表したい。
奥野和夫・真鍋成史・小川暢子（交野市教育委員会）・濱田延充（寝屋川市教育委員会）・大竹弘之（枚方市教育委員会）・宇治田和生・三宅俊隆・西田敏秀（財団法人枚方市文化財研究調査会）・櫻井敬夫（四條畷市立歴史民俗資料館）・野島稔・村上始（四條畷市教育委員会）
6. 本書の執筆のうち、第4章第1節については、三浦基行と黒須亜希子が共同で執筆した。他に関しては、編集とともに黒須が担当した。
7. 本調査に関わる遺物、写真、図面、データ等は、当センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。なお、これらの資料についてすべて「平池遺跡 04-1」の調査区名称を冠し、分類している。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、各図内にスケールバーを掲げ、縮尺率を明示した。
遺構図および断面図の使用単位尺は、mを基準とする。基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）を使用した。また、遺物図の使用縮尺は、cmを基準とした。
2. 遺構平面図の使用測地系は、「世界測地系（測地成果 2000）」を使用した。単位はすべてmで表記した。
3. 本書で用いた遺構平面図に付す方位針は、座標北を示す。
4. 現地調査や遺物整理の主な手法については、『遺跡調査マニュアル』財団法人大阪府文化財センター 2003.8 に準拠した。遺物の取り上げについては、国土座標軸（世界測地系）を使用した地区割を設定しておこなった。
5. 土層や土器胎土の色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用して識別した。
6. 遺構番号は、種類・検出調査区に関わらず、通し番号を付与した。調査時には「番号-遺構名」の順で登録したが、本書では通用性を鑑みて「遺構名-番号」の順で記述している。また、原則として調査時に付与した遺構番号を踏襲して本書に記載するが、整理作業過程において新たな遺構名を付与したものもある。このため、過去の調査成果資料とは差異が生じた点がある。
7. 調査区断面図の縮尺は1/80、遺構面全体図の縮尺は1/500、遺構断面図の縮尺は1/50とした。また、遺物実測図の縮尺は、土器は1/3、石器は1/2、銭貨は1/1、金属器は1/2を基本としたが、図の配置によってはこの限りではない。図中に付したスケールバーを参照とされたい。また、遺物写真図版に関しては、特に縮尺を統一していない。
8. 遺構平面図における「⊥」マークは、断面観察をおこなった地点を指す。観察方向は、断面図に記載された方位（N=北・S=南・E=東・W=西）によって判断されたい。また、遺構断面図におけるアミカケ部は、地山土（人的関与が認められない土層）を示している。
遺物図（主として土器）におけるアミカケは、陶磁器になされた絵付けや文字の書き込みを示しており、濃淡によって色の差異を表現している。また黒色ベタ塗りは、煤・焦げの付着範囲を示している。その他、釉薬のたまりによってできた器壁色の濃淡は、原則として破線または実線で記入した。詳細は、解説文中において記述している。
9. 挿図中の遺物番号は、連番を付している。この番号は、巻末の遺物一覧表や写真図版中の番号とも一致させている。なお、写真図版中に番号が付されていない遺物は、実測図の作成が困難であるものの、報告が必要であると判断されたため、写真図版において掲載したものである。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と調査方法	6
第2章 調査地周辺の地理と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	9
第3章 基本層序	13
第4章 調査成果	19
第1節 遺構	19
第2節 遺物	30
第5章 総括	46
【参考文献】	48

挿入写真目次

写真1 整理作業風景	7
1. 出土遺物への注記作業	
2. 出土遺物の復元作業	
3. 出土遺物の実測作業	
4. 実測図のトレース作業（ロットリング）	
5. データ編集作業（PC）	
写真2 調査地周辺の調査状況	12
1. 寝屋東遺跡で検出された中世掘立柱建物群	
2. 茄子作・茄子作下浦遺跡で検出された中世水田跡	

挿 図 目 次

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	調査地周辺の既往の調査	3
第 3 図	確認調査検出遺構	4
第 4 図	確認調査出土遺物	5
第 5 図	調査区設定図	6
第 6 図	調査地周辺の地質図	8
第 7 図	調査地周辺の遺跡分布図	11
第 8 図	基本層序模式図	14
第 9 図	調査区断面図 (1)	15・16
第 10 図	調査区断面図 (2)	17・18
第 11 図	第 1 調査区遺構面全体図	20
第 12 図	第 1 調査区遺構断面図	21
第 13 図	第 2・第 3 調査区遺構面全体図	24
第 14 図	第 3 調査区遺構断面図	25
第 15 図	第 4・第 5 調査区遺構面全体図	26
第 16 図	第 5 調査区遺構断面図	27
第 17 図	遺構出土遺物実測図	31
第 18 図	包含層出土遺物実測図 (石器)	32
第 19 図	包含層出土遺物実測図 (サヌカイト剥片)	33
第 20 図	包含層出土遺物実測図 (第 1 調査区 1)	35
第 21 図	包含層出土遺物実測図 (第 1 調査区 2)	37
第 22 図	包含層出土遺物実測図 (第 2 調査区)	39
第 23 図	包含層出土遺物実測図 (第 3 調査区)	41
第 24 図	包含層出土遺物実測図 (第 5 調査区)	42
第 25 図	包含層出土遺物実測図 (金属器・銭貨)	43
第 26 図	井戸 78 出土遺物実測図 (近代以降)	45
第 27 図	平池遺跡検出遺構全体図	47

表 目 次

表 1	掲載遺物一覧表 (土器)	50
表 2	掲載遺物一覧表 (石器・剥片)	58
表 3	掲載遺物一覧表 (金属器)	58

写真図版目次

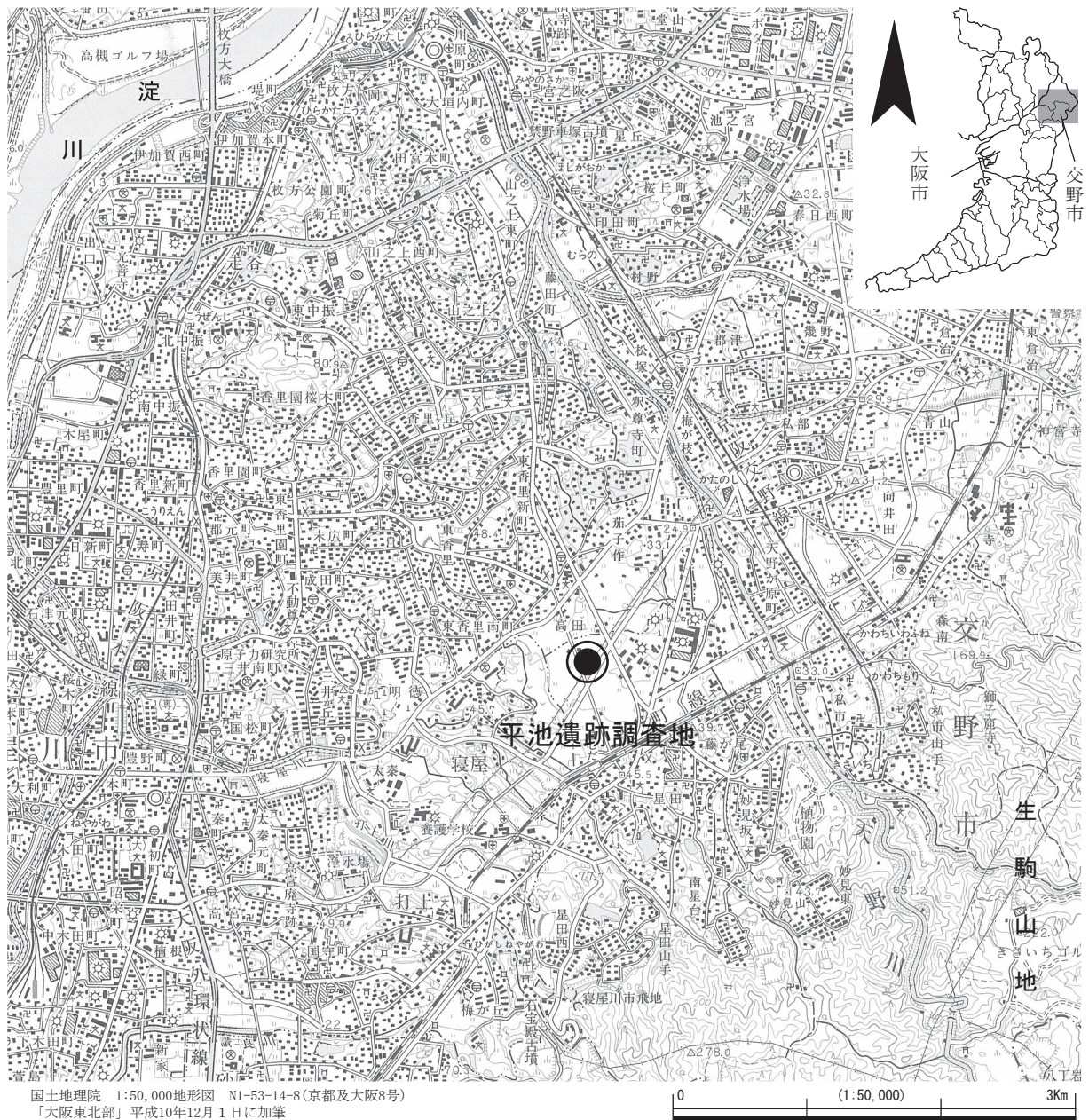
- 写真図版 1 1. 第1調査区遺構面全景（東から）
3. 溝10完掘状況（南から）
5. 石鏃(32)出土状況
- 写真図版 2 1. 第2調査区遺構面全景（北から）
- 写真図版 3 1. 土坑136断割り状況
3. ピット148断割り状況
5. 第3調査区遺構面全景（南東から）
- 写真図版 4 1. 第4調査区遺構面全景（南から）
- 写真図版 5 1. 第5調査区遺構面全景（北から）
- 写真図版 6 1. 遺構内出土遺物（溝6・溝10）
- 写真図版 7 1. 遺構内出土遺物（井戸78）
- 写真図版 8 1. 包含層出土遺物
- 写真図版 9 1. 包含層出土遺物
- 写真図版 10 1. 包含層出土遺物
- 写真図版 11 1. 包含層出土遺物
- 写真図版 12 1. 包含層出土遺物
- 写真図版 13 1. 包含層出土遺物（石器）
- 写真図版 14 1. 出土遺物 錢貨「紹聖元寶」
3. 出土遺物 錢貨「開元通寶」
5. 出土遺物 鉄製品（釘・鋸）
2. 溝6完掘状況（北から）
4. 土坑1完掘状況（北から）
2. 第2調査区遺構面全景（西から）
2. 井戸78編籠出土状況
4. 石鏃(34)出土状況
2. 第5調査区遺構面全景（南から）
2. 第5調査区落込み102完掘状況（北から）
2. 遺構内出土遺物（溝100・土坑77・落込み102）
2. 包含層出土遺物
2. 包含層出土遺物
2. 包含層出土遺物
2. 包含層出土遺物
2. 包含層出土遺物
2. 包含層出土遺物
2. 遺構内出土遺物（石製品）
2. 包含層出土遺物（サヌカイト切片・剥片）
2. 出土遺物 錢貨「元祐通寶」
4. 出土遺物 土製品（土錘）
6. 出土遺物 鉄製品（鋏）

第1章 調査に至る経緯と調査方法

第1節 調査に至る経緯

調査事業の概要 平池遺跡発掘調査は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）と、これに平行して建設される第二京阪道路の当該予定地について、工事に先立ち、埋蔵文化財の調査を実施したものである。

一般国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路とは、京都府久御山町から枚方市を経て交野市・寝屋川市・四條畷市を横断し、近畿自動車道路門真ジャンクションへとつながる区間において建設が予定されている国道および自動車専用道路である。現在、淀川左岸（いわゆる北河内地域）を通過して京都～大阪間を移動するには、片側二～三車線を有する現一般国道1号線を通行するのが一般的なル



第1図 調査地位置図

ートであるが、この車道は交通量の多さから慢性的に渋滞し、早くから当該ルートにおける自動車専用道路の必要性が唱えられてきた。

これに伴い、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所は、道路の建設を計画し、日本道路公団関西支社（当時・平成 17 年 10 月からは西日本高速道路株式会社 関西支社）とともに用地買収と併行して、事業予定地内における埋蔵文化財の確認調査を継続的にこなった。

大阪府内では、財団法人大阪府文化財センター（以下当センター）が、平成 8 年度に一般国道 1 号の一部である府道深野南寺方大阪線～大阪中央環状線間における道路整備に伴う調査（門真市三ツ島地先）を受託したのをはじめとして、十年間の長きにわたり、事業予定地内の確認調査を重ねてきた。確認調査とは、小規模なトレンチを設定して掘削をおこない、遺構面残存の有無と、その深度を探ることを主な目的とする。その結果、特に重要かつ遺構面の遺存が確認された区域については、平面的調査（本調査）が実施されることとなった。今回の平池遺跡発掘調査もそのひとつである。

確認調査の成果 平池遺跡が新規発見された背景には、平成 15 年度におこなわれた確認調査の成果がある（平成 15 年度茄子作遺跡他確認調査）。このときの調査は、枚方市茄子作南町から市境を越え、交野市星田北 5 丁目から 9 丁目を経、さらに寝屋川市との市境線までをふくむ約 1.2km（96,000 m²）の区間を対象としておこなわれた。掘削したトレンチは計 47 本ののぼり、このうち、枚方市茄子作南町区域と、星田北 9 丁目を中心とした区域において、遺物をともなう遺構の残存が認められた（第 2 図参照）。前者が枚方市茄子作遺跡、後者が平池遺跡である。

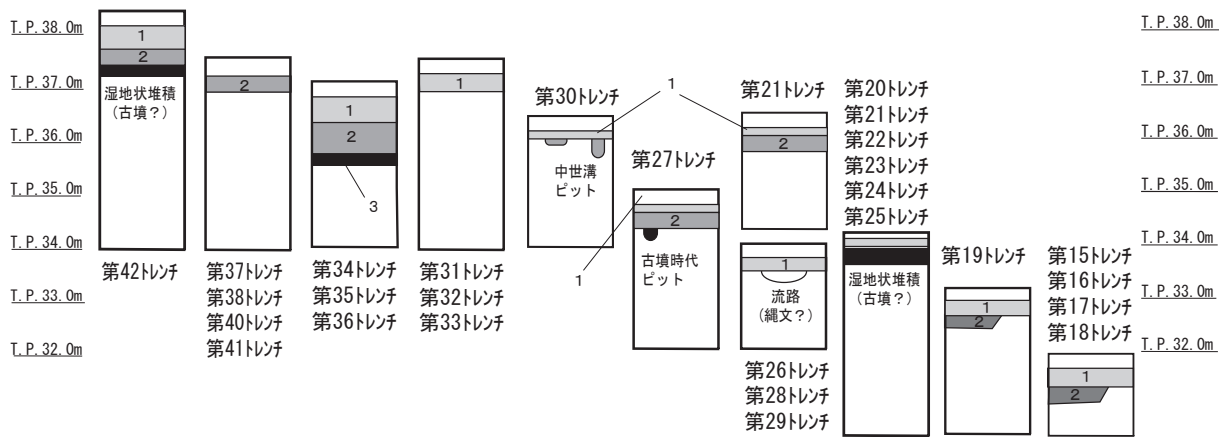
このとき、星田北 9 丁目地内（平池遺跡調査地）では、ピット・溝を有する古墳時代中期から中世と推定される遺構面と、後期旧石器から中世の遺物が発見されている（第 3・4 図参照）。調査地内は、南からはりだした枚方丘陵の西側縁辺にあたるため、南西から北東にかけてゆるやかに下がる景観を呈しているが、高台にあたる南西部では、中世耕作土直下の遺構面で、小型ながらも明確な掘形を有するピットが検出された。また、ピットに隣接する落込みからは 13 世紀に所産時期をもつ須恵器鉢や瓦器碗、土師器羽釜などが出土した。

一方、低地である北東部では、中世耕作土層の下に湿地状堆積である黒色粘土質シルト層があり、その直下において地山を確認した。この地山上面では、弧状にめぐむ溝群とピットが検出されたほか、後期旧石器と推測されるサヌカイト製縦長剥片が、地山土にはりつくような状態で発見された。

溝群およびピットの埋土は、上面を覆う湿地状堆積土であったが、遺構内からは明確に埋没時期を示す遺物の出土がなかった。ただし、この層に連続すると考えられる土壌についておこなった自然科学分析（加速器質量分析法による放射性炭素年代測定）では、AD. 670 - 695 という値を得ることができた。自然科学分析結果に対して追従することの是非は問われるところであるが、古墳時代後期を示すこの年代数値は、上位の中世耕作土に一定量の割合で古墳時代後期所産の遺物がまじって出土した事実と照らし合わせても、矛盾の生じる結果ではない。

これらの成果を鑑みた結果、検出された遺構群の掘削時期が、古墳時代後期以前にさかのぼる可能性が示されることとなった。この報告をうけて、大阪府教育委員会は、当該地域における平面調査の必要性を認め、当センターが確認調査に引き続き本調査をおこなうこととなった。なお遺跡名称は、交野市教育委員会によって、当地に残る小字名から平池遺跡と名付けられた。

調査着手までの経過と調査区の設定 今回の調査を着手するにあたり、地元自治会および道路建設事業者からの要望により、留意すべき点が示された。まず、地元自治会からは、調査期間が農繁期にあたる



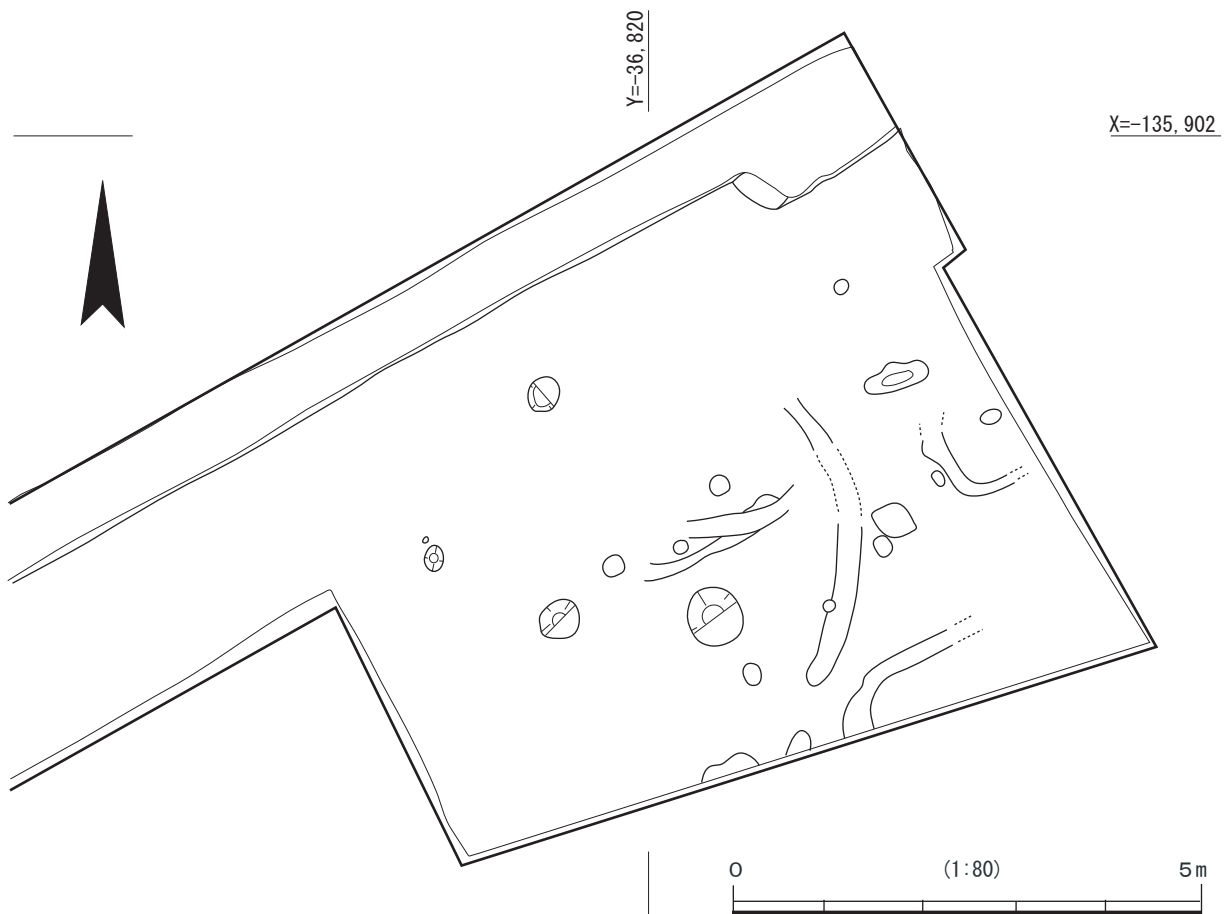
第2図 調査地周辺の既往の調査

ため、水田用水（取排水）や農業機器の搬入経路を断つことがないよう、求められた。また、本体工事事業者からは、工事中搬入路確保のため、調査地北西辺に沿う 20 m 程度の部分について先行して調査し、引渡しを希望する旨の依頼があった。

これらを考慮して今回の調査では、まず調査地を南西側の高台部分と北東側の低地部分に分割した上で、低地部の北西辺端より 23～28 m の幅をもつ面積を先行して調査をおこなった（第 1 調査区・第 4 調査区）。続いて残地のうち、低地部分を分割し（第 2 調査区・第 3 調査区）、排出土の仮置き場を確保した上で調査に着手した。したがって、調査は、第 1 調査区・第 4 調査区→第 2 調査区・第 5 調査区→第 3 調査区の順におこなった。

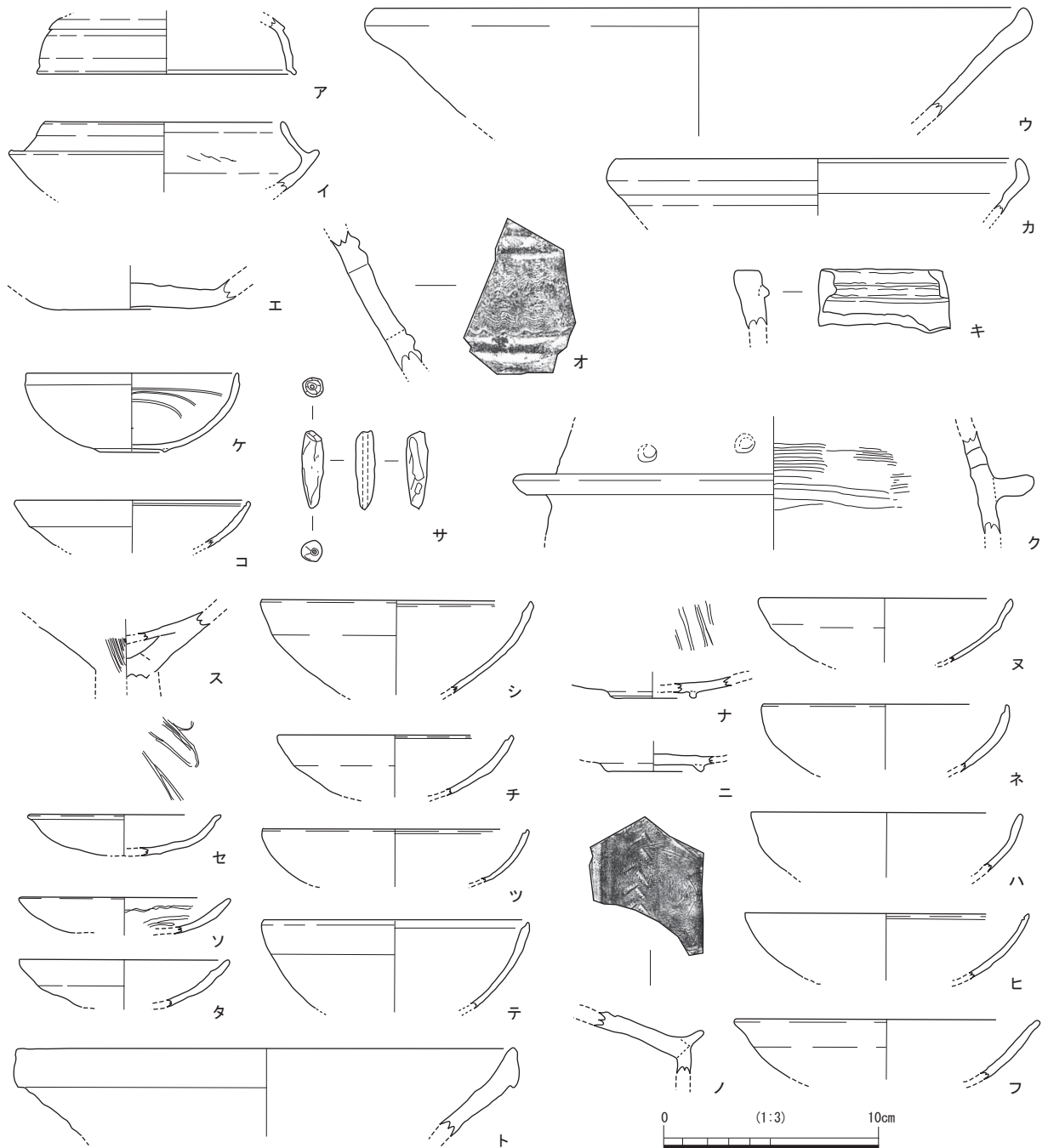
調査を終了した区画に関しては埋め戻した後、事業者立会いの下で順次引渡しをおこなった。引渡ししなされた調査区では、時をおかずして道路建設用重機が搬入され、工事が着手された。このことは、発掘調査担当者と本体工事事業者が肩を並べて作業するという事態を招いたが、それぞれの担当者が現地において綿密な打ち合わせを重ねることができるという利点をも生み出した。結果として、時間的な短縮のほか、現地における実態に即した引継ぎがなされたものと考えている。

このほか、調査区の周囲には、ネットフェンスによる仮囲いを施し、地域住民の通行に配慮した。特に、調査地東辺に接する農道は、近年アスファルト敷きの道路が整備されるまで、北方に位置する高田地区と JR 学研都市線星田駅とをつなぐ主要な経路であったことから、予想以上の通行量があり、安全面についての配慮を必要とした。このため、農道部分に足場板を敷設し、ロープを張って、通路を明示した。



第 3 図 確認調査検出遺構

また、調査は初夏から年度末までおこなったため、田植えや草刈り、稲刈りなど周辺耕作地での農作業のつづがない進行についても常に注意を払った。調査地の北東端部に設けられていた井戸は、今日でも隣接する水田の給水源となっていたため、井戸の周辺については掘削範囲を控えた。また、南西部高台と北東部低地の間に設けられた主要用水路は、決壊の危険性があると判断し、掘削をおこなわなかった。



遺物の出土地点 ア～ウ) 第22トレンチ エ) 第26トレンチ オ～ク) 第27トレンチ ケ～サ) 第29トレンチ シ) 第31トレンチ
 ス～ト) 第34トレンチ ナ～ネ) 第39トレンチ ノ～フ) 第42トレンチ ※トレンチ番号は、第2図参照

第4図 確認調査出土遺物

第2節 調査の経過と調査方法

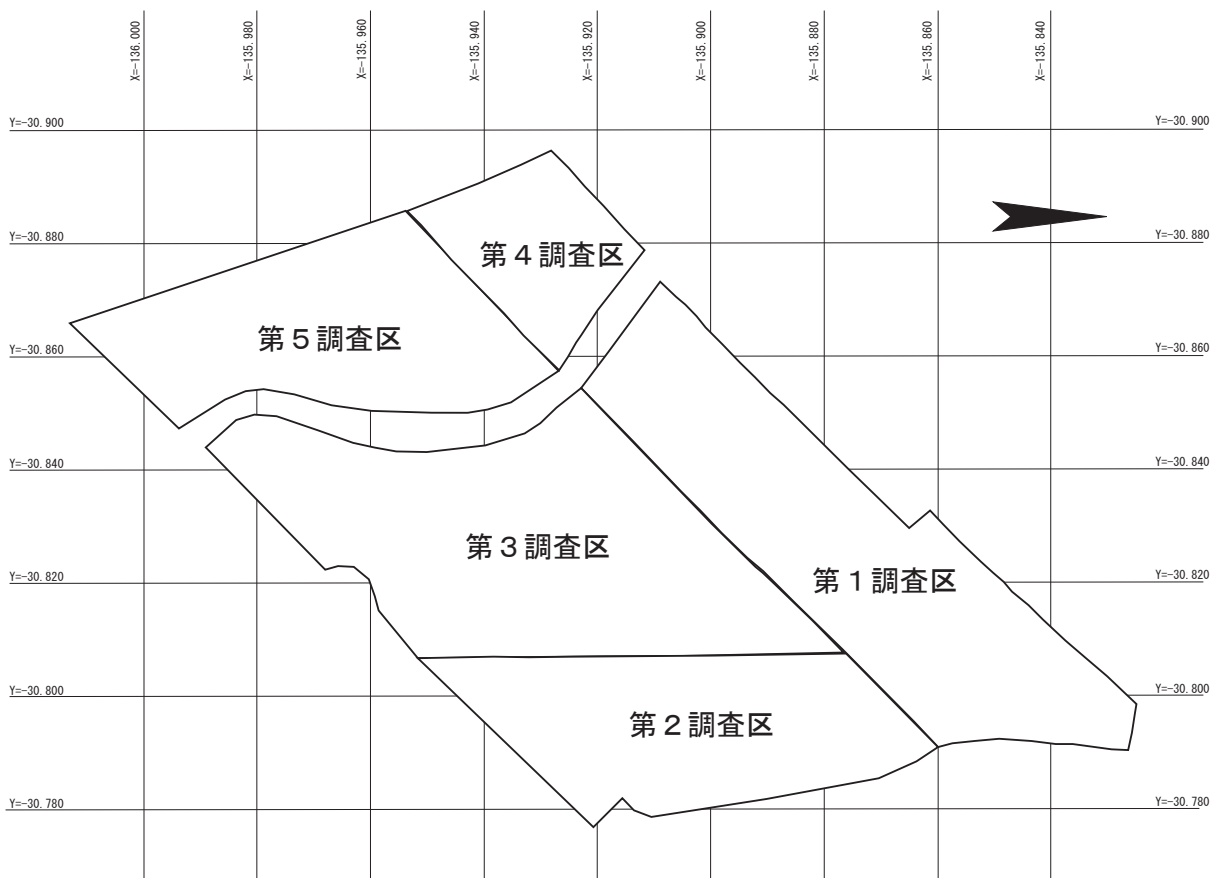
調査の方法 発掘調査の手順は以下のとおりである。まず草木の伐採をおこない、調査地脇にXY座標点および水準点を設置し、測量基準点とした。次に近現代の耕作土や盛土、攪乱土などの調査不要土について、重機を用いた掘削をおこなった。中世耕作土以下の土層については、人力掘削をおこない、主要遺構面の検出に努めた。土層の掘削は、シャベルやツルハシ、鋤簾を用い、土砂の運搬にはベルトコンベアを使用した。掘削中に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げ、分別して整理作業をおこなった(後述)。

地表に溜まった湧水や雨水は、ポンプを用いて汲み取り、沈砂槽を介して場外へと排出した。遺構面に溜まった水に関しては、遺構を損なわないよう柄杓やバケツ、スポンジを用いた人力排水を旨とした。なお、ベルトコンベア・ポンプの動力については、発電機を現地に据え置いて使用した。

今回の調査では、調査区により、1面ないし2面の遺構面を検出した。このうち、主要な遺構面(古墳時代～中世)については、ヘリコプターを用いた航空測量を委託によっておこなった。測量図は、50分の1スケールの平面図として納品されている。その他の遺構面については、平板測量をおこない、平面図を作成した。また、遺構は半裁して断面図を作成し、記録写真を撮影した。各調査区の周囲壁は、連続した土層断面図を作成した。

その後、地山上面まで掘削し、埋め戻しを終えた後、事業者への引渡しをおこなった。

出土遺物の取り上げ 出土遺物は、国土座標軸(第IV座標系)を基盤とし、一辺10mのグリッドを目安として取り上げた。このグリッドは、世界測地系の国土座標軸に則した基準線を用いて設定している。



第5図 調査区設定図

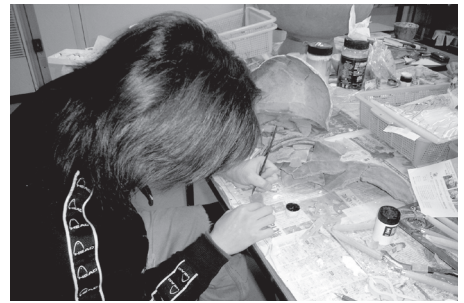
国土座標軸に則したグリッドでは、第Ⅰ区画から徐々に細分された第Ⅴ区画までを定めている。第Ⅰ区画とは、大阪府の南西端 $X=-192,000$ m、 $Y=-88,000$ m の交点を始めとして、南北 6 km、東西 8 km の面積で府域を 62 分割した区画をいう。このうちの 1 区画をさらに南北 1.5 km、東西 2.0 km の範囲で各々 4 分割し、計 16 区画としたもののひとつを第Ⅱ区画とする。さらにこの第Ⅱ区画を南北に 15 分割、東西に 20 分割した一辺 100 m の範囲を第Ⅲ区画とし、さらにこれを東西、南北ともに 10 分割した一辺 10 m の範囲を第Ⅳ区画とする。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画を 5 m 単位で分割した区画となるが、今回の調査では、第Ⅳ区画までを使用した。

遺物は、グリッドごとに第Ⅲ区画・第Ⅳ区画および出土遺構や層位、遺構面などを記入したラベルとともに取り上げ、登録番号を付した。

整理作業の方法 出土遺物の整理作業は、登録、洗浄、注記までの基本的な整理作業を、現場事務所にておこなった。基本整理作業終了後は、交野分室において遺物実測作業とトレース、図版作成、データ編集作業など、報告書作成にかかわる作業を実施した。

出土遺物は、登録番号に順じて洗浄し、注記をおこなった（写真 1-1）。注記を終えた遺物は、接合復元し、彩色を施した（写真 1-2）。また、残存状態が良好なものや重要度が高いものについては、実測図を作成し、写真撮影をおこなった（写真 1-3）。

現場で作成した遺構図と土器・金属器の遺物実測図に関しては、原図をスキャナーによって画像データとしてとりこみ、コンピュータ画面上でデジタルトレースをおこなった。また、石器に関しては、ロットリングを用いたトレースをおこなった（写真 1-4）。



1. 出土遺物への注記作業



2. 出土遺物の復元作業



3. 出土遺物の実測作業



4. 実測図のトレース作業（ロットリング）



5. データ編集作業（PC）

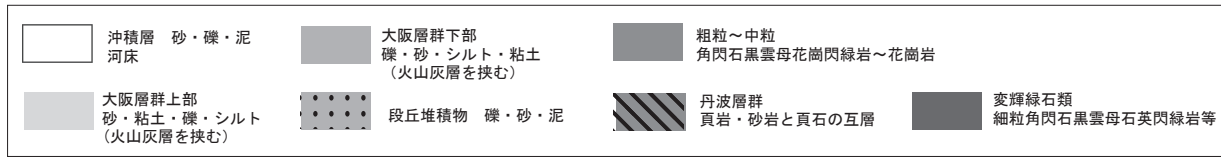
写真 1 整理作業風景

第2章 調査地周辺の地理と環境

第1節 地理的環境

調査地周辺の地形と景観 平池遺跡が立地する交野市は、大阪府の北東部、いわゆる北河内地域の東部に位置している。北に淀川、東に生駒山を控えているため、市域の南東部は起伏に富んだ山地、北西部は山地から派生した丘陵（枚方丘陵）と台地（交野台地・交野ヶ原とも呼称される）から成る。台地の大部分は、海退と海進の繰り返しによる浸食作用と、六甲変動など地盤の隆起によって形成された段丘で占められており、平池遺跡周辺は中位段丘面にあたる。

生駒山地から派生した河川は、段丘面を細かく刻みながら北西方向へと流走している。妙見川、傍



国土地理院 1:50,000地形図 NI-53-14-8(京都及大阪8号)「大阪東北部」平成10年12月1日発行を縮小、
通商産業省工業技術院地質調査所 1:200,000地質図 NI-53-14「京都及大阪」昭和60年3月24日発行記載の
データを加筆。



第6図 調査区周辺の地質図

示川、天の川（天野川）などの河川はいずれも高低差のわりに短く、急峻な岩肌を滑りながら淀川へと注ぎ込む。このため、大雨の際には風化した土砂が大量に流出し、流路はしばしばその方向を違えてきた。平池遺跡は、傍示川と妙見川にはさまれた地点に位置するが、妙見川は特にその傾向が強い。近世以降、堤防の整備によって川の流れが定まるまで、周辺地形は、その影響をうけつづけた。

河川の作用と丘陵の傾斜が影響して、調査地周辺はやや複雑な地形を呈している。現在、調査地周辺は、階段状に水田が整備されているが、舌状にはりだした小規模な丘陵の残骸が随所に認められる。この周囲をめぐるように用水路が導かれているため、水田区画は必ずしも方形を呈してはいない。

平成 15 年度におこなわれた確認調査では、平坦に整形された現代耕作土の下に、埋没した谷地が多く報告された。包括的にはなだらかな段丘面として捉えられがちであるが、周辺の原風景は、細かい谷地が入り組む、起伏の多い地形であったと考えられる。

旧集落と土地利用 交野市域に営まれた旧集落は、すべて谷筋に沿った台地上に存在する。調査地の南には星田村、南東には私市村、東には私部村、北には茄子作村と高田村（ともに現枚方市）、西には寝屋東村（現寝屋川市）、がある。高田村は近世、茄子作村から分立したと伝えられているが、そのほかは中世以前にさかのぼる歴史をもつ古村である。

現在、府道枚方泉佐野富田林線付近に比定されている東高野街道は、星田村から調査区の西側をかすめて茄子作村へと通じており、私部村、森村を経て淀川から京都へと続く。この路は、調査区付近で星田村から高田村へ通じる道（通称高田道）と分岐する。一方、星田村から寝屋東村へは山根街道が延びており、川沿いに進んで河内平野へ抜けることができる。また、背後の妙見山への登山道も、星田村を始発とする。このため、星田村に近い街道の交差点は、「六路の辻」と呼称されてきた。

調査地周辺の水田は、現代でもその大半が星田村に帰属するが、これは、平池周辺の田畑に注がれる用水が星田村の貯水池から供されているためである。星田村は、早くから交通の要所として栄えた豊かな村であったため、新田開発に伴う水利施設の整備にも尽力できたのである。

第 2 節 歴史的環境

1. 調査地周辺の遺跡とその調査成果

平池遺跡周辺では、第二京阪道路建設に伴う発掘調査以前にも、多くの遺跡が発見され、報告されている。以下、時代ごとに記す。

旧石器時代 交野市域では、氷河期にあたる旧石器時代から、人々が生活した足跡を追うことができる。昭和 31 年、調査地より 3 km 程度東北の山裾に位置する神宮寺遺跡では、尖頭器およびサヌカイト製翼状剥片を用いたナイフ形石器が発見された。また、昭和 53 年には調査地南方の JR 星田駅の南に位置する布掛遺跡で、サヌカイト製ナイフ形石器・削器・縦長剥片・横長剥片・石核および剥片などが出土した。総数 128 点にのぼるこれらの遺物は、遺跡内において石器製作をおこなっていたことを示すものであり、一連の工程を復元することが可能な資料として注目を集めた。

なお、隣接する枚方市域でも、茄子作遺跡・三ツ池遺跡・藤坂宮山遺跡などで、サヌカイト製翼状剥片が採取されており、当地の旧石器時代の当菓がおぼろげながら明らかになりつつある。

縄文時代 ウルム氷期が終わった紀元前 1 万年頃、気候の温暖化に伴う海面の上昇により、交野台地に

も海水の侵入があった。現在の妙見川と天の川の合流地付近（調査地より北東へ2 km 程度）が当時の汀線と推測されている。このため、交野市内における縄文遺跡の発見は、生駒山麓の斜面地上に集中する。

昭和32年に交野考古学会が実施した神宮寺遺跡の調査では、縄文時代早期の押型文土器を伴う石組遺構・炉跡の検出が報告された。出土土器には「神宮寺式」の名称が付与され、大阪における縄文時代早期の一型式として広く知られることとなった。

また、星田地区の西側を流れる傍示川谷口の台地上に位置する星田旭遺跡では、昭和41年に調査がおこなわれ、縄文時代中期～後期初頭の土器（醍醐式Ⅱ～Ⅲ・船元式・北白川上層式）を伴う住居跡が確認された。

弥生時代 調査地周辺における弥生時代の遺跡は、台地上において多く発見されている。

調査地より1 km 隔てた南西側に位置する坊領遺跡（星田ぼうりょう遺跡）は、天野川左岸の台地上に発達した集落跡であり、これまでも弥生時代前～中期の溝群が検出された。この溝からは、畿内第Ⅰ様式～第Ⅱ様式の特徴を有する甕・鉢・ヘラ描き沈線文を施した壺片などが多量に出土している。

また、調査区の北東へ1 km 隔てた、同じく天野川左岸に位置する上の山遺跡では、平成16年度の調査において、弥生時代中期初頭にさかのぼる建物跡が検出された。台地のもっとも高い地点で発見されたことから、周辺に営まれた集落の中心地であったと推測されている。発見された建物跡は、妻側に張り出した棟を支える柱をもつ、いわゆる棟持柱付掘立柱建物であり、大型の建物である。

一方、調査地から500 m程度北東に位置する茄子作遺跡では、昭和49年に枚方市文化財研究調査会によっておこなわれた調査において、弥生時代後期～古墳時代中期の集落跡が確認された。検出された遺構は隅丸方形プランをもつ竪穴住居跡14棟、方形周溝墓1基等であり、つづく昭和52年の調査でも同時期の竪穴住居跡19棟および方形周溝墓1基が確認された。なお、平成13年度に当センターがおこなった確認調査では、調査地東側の小川を挟んだ丘陵地斜面上で弥生時代末期～古墳時代初頭の遺物包含層を確認しており、広範囲にわたる集落跡が当該地に存在した可能性を示すこととなった。

古墳時代 古墳時代の交野市域は、山地より排出される土砂によって河川下流域の沖積化が進み、人間は徐々にその生活圏を広げることとなった。遺跡の立地もこの環境の変化と対応している。

調査地から2 km 北方に隔てた台地上に築かれた藤田山古墳では、残存状態が良好な粘土槨が発見された。木棺の朽失は著しかったが、「顔氏作自有己東王父西王母」の銘文をもつ画文帯環状乳四神四獣鏡や銅鏃、碧玉製磨製石鏃、鉄斧、鉄鑿などが、散布された朱とともに出土している。この古墳は、周辺地域の首長墓と目されるが、その経済基盤の中心は、天野川の下流域に求められるよう。

一方、調査地東方の山麓部には、古墳が群をなして築かれている。天の川上流の右岸に位置する森古墳群には、全長110 mを測る前方後円墳である雷塚古墳をはじめ、向山古墳・山神古墳など数基の古墳が点在する。雷塚古墳は標高150 mを測る尾根の最高所に築かれており、撥形にひらく前方部を備えている。また、森古墳群と天野川を挟んで対峙する山丘尾根上には、妙見山古墳が築かれている。現在は消滅した古墳であるが、昭和43年の調査では、長さ7 m以上を測る粘土槨が想定され、翡翠の勾玉、碧玉製管玉、ガラス製小玉や鉄製の剣、刀子、鉈が出土した。

古墳時代中期になると、渡来文化の影響がますます認められるようになり、調査区周辺でも画期的な変化がおこった。前掲した茄子作遺跡では、昭和52年の調査において古墳時代中期に所産時期をもつ韓式土器がまとまって発見されたが、平成17年度の調査では、集落の南辺をめぐる流路から溶着した初期須恵器片が大量に出土した。小川をはさんで対峙する上の山遺跡では、窠体とみられる焼き締まっ



交野市全図(平成12年交野市発行1:10,000図)および
枚方市全図(平成7年枚方市発行1:15,000図)を拡大、加筆

第7図 調査地周辺の遺跡分布図

た粘土塊も出土している。これらの資料は、この地で初期須恵器が焼成されたことを物語っており、その背景には須恵器製作技術者集団（渡来人か）の起居があったことを示している。

また、北西に2km隔てた私部南遺跡は、その名が示すとおり、朝廷の直轄領が置かれた土地として認識されている。私部は皇后の私領を指すが、西側に隣接する上私部遺跡では、平成15年度の調査によって、古墳時代後期の掘立柱建物群が多数検出された。

この建物群は、短期間で廃絶し、古代へとは継続しないようである。すなわち、在地の自発的な機運によって成立した集落であったとは考えがたく、強い外的要因によって構築され、廃絶された集落であったとみてよい。このような集落のあり方は、朝廷との密接な関係が想像されて興味深い。

古代（奈良・平安時代） 現在のところ、調査地周辺では、大規模な古代の遺跡は確認されていない。

前掲した茄子作遺跡では正方位に基軸をもつ、奈良時代の掘立柱建物が検出されているが、遺構の密度は低い。隣接する上の山遺跡では、流路から「小山」と記された墨書土器の出土があるが、当該時期の遺構はまだ確認できていない。

調査地から北北東へ2.5km隔てた交野郡衙跡は、6世紀代の総柱建物群の発見が『日本書紀』仁徳天皇十三年条に記された茨田屯倉を想起させ、また屯倉が地方官衙へと移行したとする予見的学説から生じたものである。いまだ官衙遺構を検出するには至っていないが、遺跡内では白鳳期の軒丸瓦や6世紀後葉から7世紀初頭に製作された須恵器や土師器、鞆の羽口や鉄滓などが採集されており、8世紀に創建されたとする長宝寺との関連も含め、注目されている。

また、調査地南東に0.5km隔てた伝寝屋長者屋敷跡遺跡では、平安時代の遺構面が確認されたが、屋敷の一部となるような大規模な建物跡は検出されなかった。

中世（鎌倉時代～戦国時代） 中世の遺跡としては、調査地の北東方向に、私部城跡・でがしろ遺跡が位置している。ともに鎌倉時代初期、河内守護代であった安見氏に関する遺跡として知られている。安見氏は、若狭国安見庄より当地へ来住し、「でがしろ（古くは「どいがしろ（土居ガ城？））」に城を築



1. 寝屋東遺跡で検出された中世掘立柱建物群



2. 茄子作・茄子作下浦遺跡で検出された中世初頭の水田跡
(小川の対岸は上の山遺跡)

写真2 調査地周辺の調査状況

いたという。室町時代にはいると、でがしろの北に私部城を築いたが、天正年間には衰退した(交野市史)。現在でも城跡周辺では、城築造時の整地土とみられる置土や段、堀跡などが確認されており、今後の調査が期待されている。

また、平池遺跡の北方に広がる茄子作下浦遺跡は、中世集落の存在が考察されている周知の遺跡である。平成16年度の茄子作・茄子作下浦遺跡の調査では、繰り返し作られた水田と、木組の水路が見つかった。12～15世紀に所産時期を持つ出土遺物には、大量の瓦器・土師器・須恵器にまじって、漆器碗や一定量の輸入陶磁器が含まれていた。300年の長きにわたり、安定継続した中世集落が存在したことをうかがわせる資料である。

2. 文献史料にみる古代の交野

交野の地名は古く、平安時代初頭に編まれた「延喜式」には、北河内に茨田郡・讃良郡とならんで交野郡の名がみえる。また「新撰姓氏録」には、交野に本拠を構えた氏族として、交野連氏・交野忌寸氏の名をあげている。このうち、交野忌寸氏は漢人(渡来人)の後裔とされており、茄子作遺跡や上の山遺跡・上私部遺跡から出土する初期須恵器との関係が注目される場所である。

調査地の南側に位置する星田の名は、平安時代末期の文書である「平清盛書状」にみることができる。これによると、星田には古代より「星田牧」と称される馬の放牧地があったが、このころには耕地化が進んだため、荘園(星田荘)にしたという。

牧には本来、耕作に不向きな土地があてがわれる。星田山中の小松寺に残る「小松寺縁起」には、平安時代後期頃、寺は「三宅山荒山寺」と称したが、これは付近が険しい荒山であり、いたるところ白い岩石が剥き出しであったことに由来すると説明されている。大雨があれば大水と土砂を排出するが、普段は川に一滴の水もない有様であり、このことから「ほしだ(乾田・干田)」の名がおこったという。

これらの史料は、水の利が悪い台地を放牧地として利用していた、古代における当地の景観を想起させるものである。

第3章 基本層序

今回の調査地は、南から舌状に張り出した丘陵の裾部を西至とする。この丘陵からは、さらに東へ向かって、手の指を広げるがごとく、幾筋かの小さな尾根がのびている。尾根と尾根の間には小谷があり、さらにこの原地形を縦断するように用水路が引かれ、水田が造られている。このため、概観して西が高く、東へとさがる地形のようであるが、詳細にみると、自然界の作用と人間の関与があいまって、複雑な景観を呈していることがわかる。

調査地内の標高は、尾根筋にあたる第4調査区がもっとも高く、第1調査区北隅から第2調査区東側付近がもっとも低い。調査着手前段階では、第4調査区が駐車場および資材置き場として使用されている以外は、すべて水田耕作地であった。

掘削深度は、丘陵上である西側で薄く0.3m、谷地である東側で1m程度を測る。以下、堆積土の性格ごとに記述する。

第I層 機械掘削層(現代耕土・現代耕土床土・攪乱土・近世耕作土) 重機によって除去した調査不要層である。現代耕作土は粗砂まじりの黒色シルト層であり、部分的に黄褐色粗砂まじりシルトを主体

とする床土層を伴う。

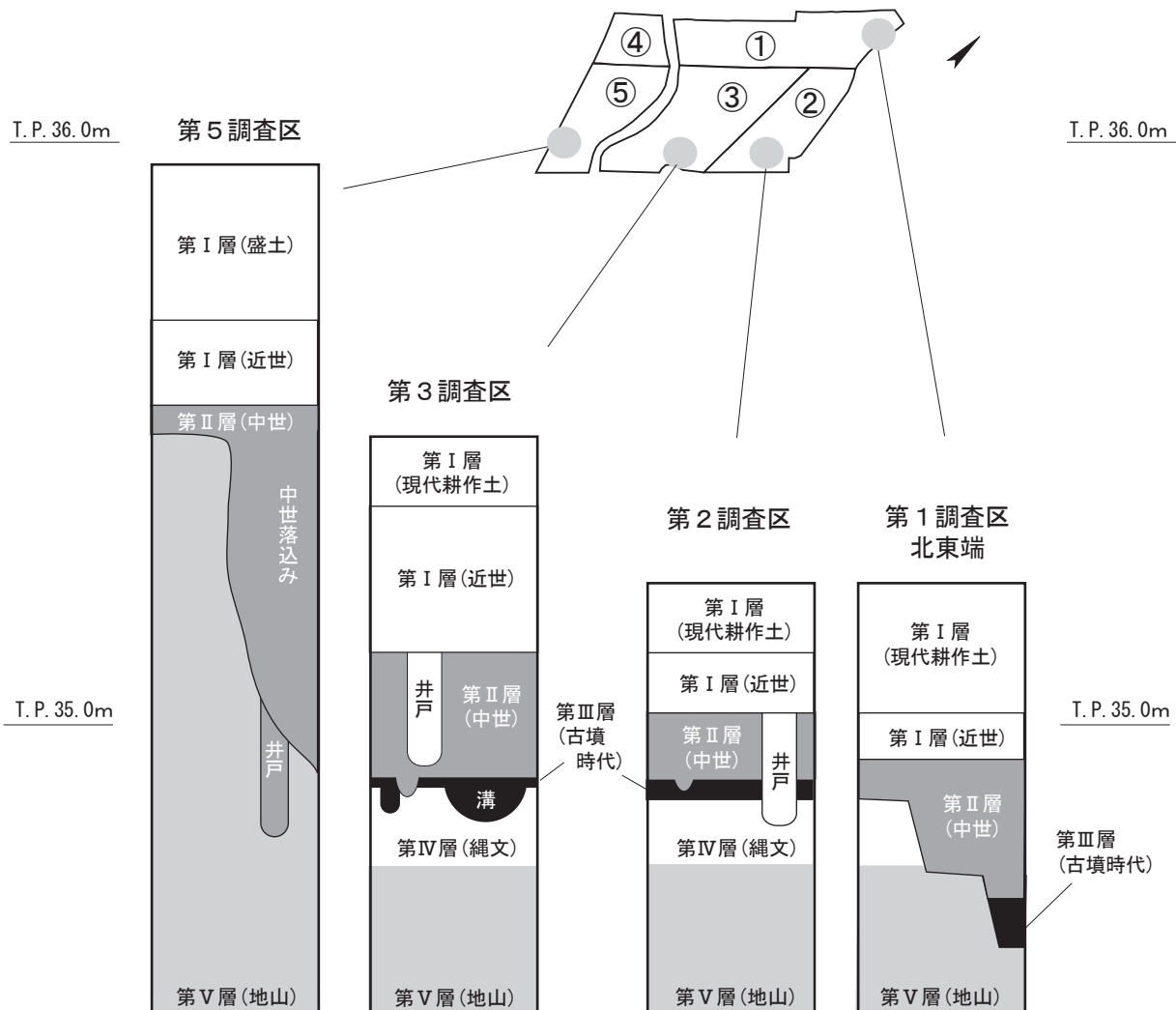
近世耕作土は、調査区全域にわたって認められる、締まりの悪い黄褐色砂質シルト層または細砂まじりシルト層である。部分によって多少はあるものの、マンガング粒の混じりこみや柱状鉄斑が観察できる。

第Ⅱ層 中世包含層(耕作土・整地土) 調査区によって層厚に差があり 0.1～1.6 m 程度の厚さを測る。黄灰色～オリーブ黄色粗砂まじり粘土質シルトを主体とし、13～15 世紀の遺物を伴う。おおむね水田耕作土である。第5 調査区では谷頭とみられる落込みを埋めた整地土も、中世包含層として認識できる。

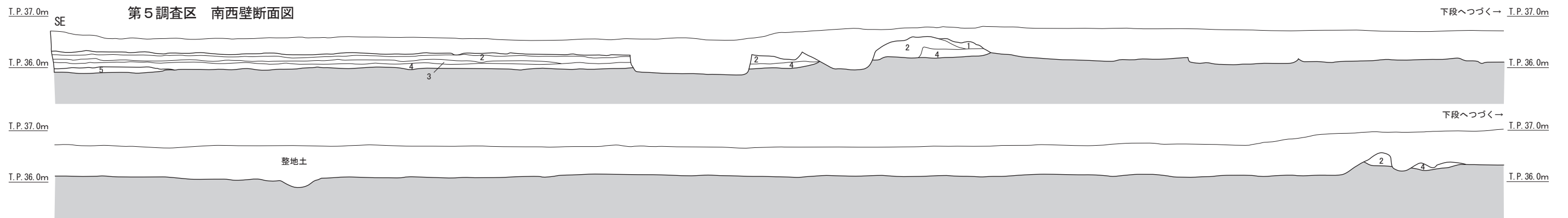
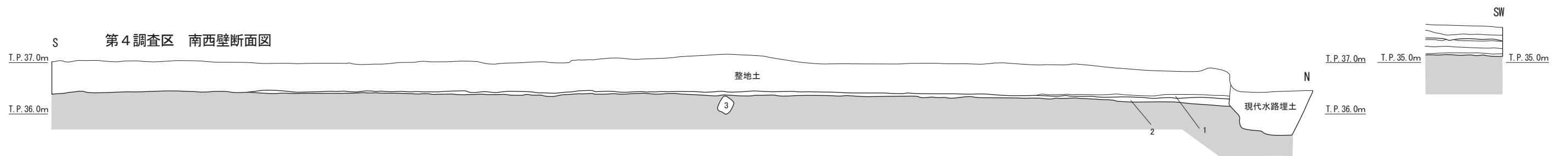
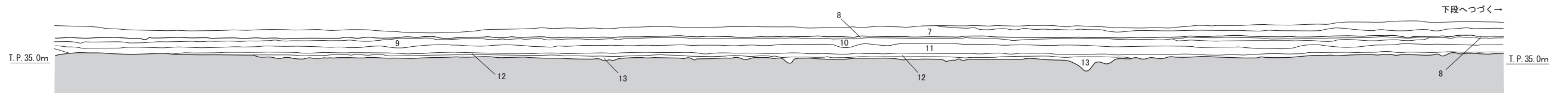
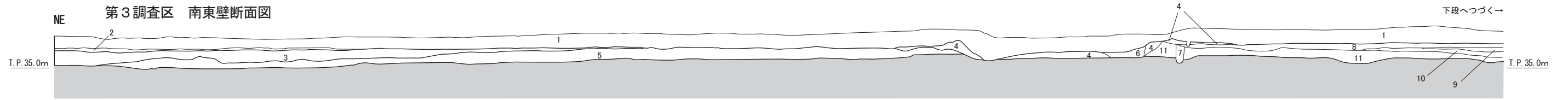
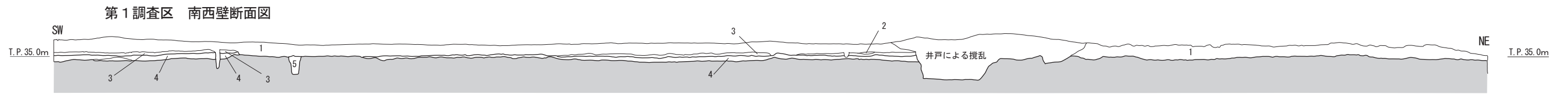
第Ⅲ層 古墳時代後期～古代相当層(湿地状堆積層) 第1 調査区の東側と第2 調査区と第3 調査区において確認した黒色粘土質シルト層である。総じて 5～10 cm 程度を測る薄層である。水生堆積もしくは積み重なった植物遺体の炭化によって黒色化が進んだとみられる。この層の直下において古墳時代後期の遺構が検出された。

第Ⅳ層 旧石器～縄文時代相当層 粗砂および小礫を多量に含む明黄褐色砂質シルト層である。部分的に下位の地山構成土が、3 cm 程度のブロックとしてまじる。確認調査時には、この層よりサヌカイト製縦長剥片や剥片が出土した。

第Ⅴ層 地山 硬く締まった灰黄色粘土である。草木類の繁茂による割痕や乾痕が認められる。ラミナを伴う黄褐色粗砂の流れ込みが顕著に認められる箇所もある。



第8図 基本層序模式図



【第1調査区 南西壁断面図】

- 1) 灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト 径1cm未満の礫少量入る(現代耕作土)
- 2) 灰色 5Y6/1 細砂 灰色(7.5Y5/1)砂質シルトブロック30%入る(現代耕作土)
- 3) 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質シルト マンガン粒多く含む(現代耕作土床土)
- 4) 黄灰色 2.5Y5/1 細砂まじりシルト マンガン粒多く含む(中世~近世耕作土)
- 5) 灰色 N7/1 粘土質シルト 同色細砂シルトブロック50%入る(ピット埋土)
- 地山) 灰色 5Y5/1 粘土 明黄褐色~青灰色(2.5Y6/8~2.5Y6/1)細砂シルト~砂礫シルト筋状に入る

【第4調査区 南西壁断面図】

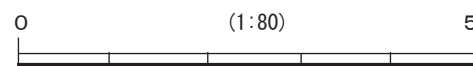
- 1) 褐色 7.5YR4/6 細砂まじりシルト (現代耕作土)
- 2) 黄褐色 10YR5/8 細砂まじり砂質シルト (近世耕作土層)
- 3) 暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂まじり粘土質シルト 杭穴痕
- 地山) 黄褐色 2.5Y5/4 細砂まじり粘土質シルト 径0.3cm未満の礫少量入る
明黄褐色細砂シルト 水平方向筋状に堆積
部分的に粗砂の密集あり 全体的に堅く締まる

【第5調査区 南西壁断面図】

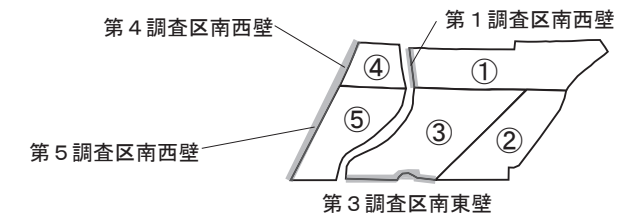
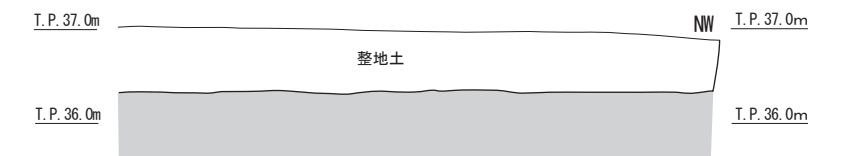
- 1) にぶい黄褐色 10YR5/4 細砂まじりシルト 灰色(5Y5/1)細砂シルトブロック30%程度入る(近世耕作土)
- 2) 灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト (近世耕作土)
- 3) 灰色 5Y5/1 細砂まじりシルト にぶい黄色(2.5Y6/4)ブロック20%程度入る マンガン粒少量含む(中~近世耕作土)
- 4) 灰色 7.5Y5/1 細砂まじりシルト 径1cm未満の礫少量入る(中~近世耕作土)
- 5) 黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る(中世耕作土)
- 地山) 明黄褐色 2.5Y7/6 細砂まじりシルト

【第3調査区 南東壁断面図】

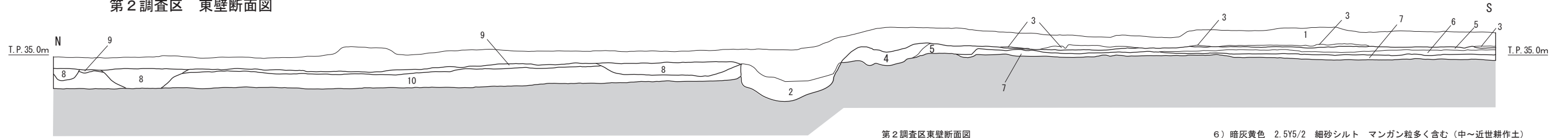
- 1) 灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト 径1cm未満の礫少量入る(現代耕作土)
- 2) 黄褐色 2.5Y5/6 細砂まじりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る(現代耕作土床土)
- 3) にぶい黄色 2.5Y6/4 細砂まじりシルト オリーブ黄色(5Y6/4)シルトまじり粗砂ブロック20%程度入る
- 4) 灰色 5Y6/1 細~中砂まじりシルト 径1cm未満の礫少量入る(近世耕作土)
- 5) オリーブ黄色 5Y6/3 細砂まじりシルト 黄灰色(2.5Y4/1)粘土ブロック 30%程度入る(中世耕作土)
- 6) 灰色 5Y4/1 細~中砂シルト 粗砂筋状に入る(近世区画溝埋土)
- 7) 黄灰色 2.5Y4/1 粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る(近世杭列跡埋土)
- 8) 黄褐色 10YR5/6 細砂まじりシルト 灰色(5Y6/1)細砂シルトブロック30%程度入る(近世耕作土)
- 9) 灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルトブロック30%程度入る
- 10) 灰色 5Y5/1 細砂まじりシルト マンガン粒少量入る 径1cm未満の礫少量入る(近世耕作土)
- 11) 黄褐色 2.5Y5/3 シルトまじり粗砂 浅黄色(2.5Y7/4)シルトブロック30%程度入る(中~近世耕作土)
- 12) 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじり粘土質シルト 粗砂ブロック少量入る(古墳時代相当層)
- 13) 黒褐色 10YR3/1 細砂まじり粘土質シルト 上層に比べて粘土質強い(古墳時代相当層)
- 地山) 緑灰色 5G7/1 粗砂まじりシルト



第9図 調査区断面図(1)

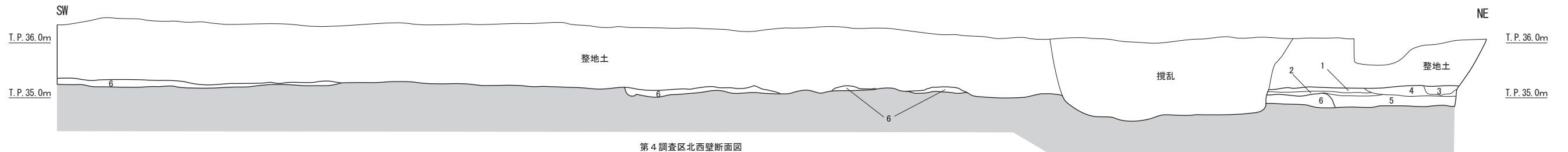


第2調査区 東壁断面図



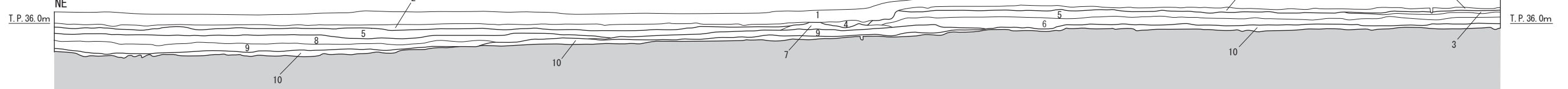
- 第2調査区東壁断面図
- | | | | |
|----------------|------------------------|-----------------|---|
| 1) 灰色 5Y6/1 | 細砂まじりシルト (現代耕作土) | 6) 暗灰黄色 2.5Y5/2 | 細砂シルト マンガン粒多く含む (中～近世耕作土) |
| 2) 黄褐色 10YR5/6 | 細砂～中砂まじりシルト (近現代水田区画溝) | 7) 黒褐色 2.5Y3/1 | 細砂混じり粘土質シルト (古代～中世相当層) |
| 3) 灰色 7.5Y5/1 | 細砂まじりシルト (現代耕作土) | 8) 明黄褐色 10YR6/8 | シルトまじり粗砂 弱いラミナあり (古墳時代後期包含層) |
| 4) 灰色 N5/0 | 細砂まじりシルト (近世水田区画溝) | 9) 黄褐色 10YR6/5 | 細砂まじりシルト |
| 5) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂まじりシルト (近世耕作土) | 10) 黄褐色 10YR7/8 | 粗砂まじり砂質シルトに
灰白色 5Y7/1 細砂まじりシルトが水平方向に入る ラミナあり |

第4調査区 北西壁断面図



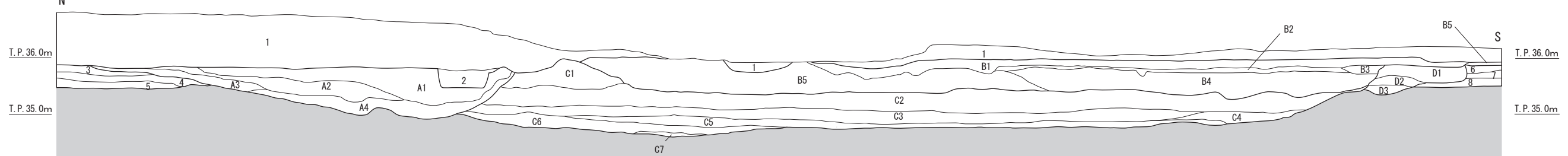
- 第4調査区北西壁断面図
- | | |
|-----------------|---------------------------------|
| 1) 灰色 5Y6/1 | 細砂まじりシルト (現代耕作土) |
| 2) 灰色 7.5Y5/1 | 細砂まじりシルト (現代耕作土) |
| 3) 灰黄褐色 10YR5/2 | 細砂まじりシルト マンガン粒を多く含む (現代水田排水溝埋土) |
| 4) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂まじりシルト (近世耕作土) |
| 5) 灰黄色 2.5Y6/2 | 細砂まじりシルト マンガン粒を多く含む (近世耕作土) |
| 6) 暗灰黄色 2.5Y5/2 | 細砂シルト マンガン粒多く含む (中～近世耕作土) |

第5調査区南東壁断面図



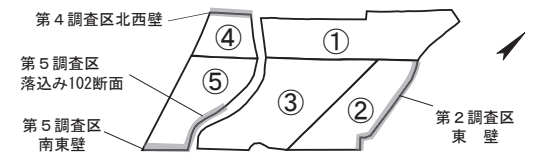
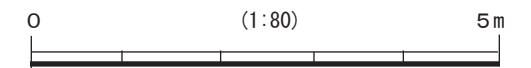
- 第5調査区南東壁断面図
- | | | | |
|-------------------|--|------------------|---------------------------|
| 1) 黄灰色 2.5Y4/1 | 細砂まじりシルト (現代耕作土) | 6) 灰色 7.5Y5/1 | 細砂まじりシルト (中世～近世耕作土) |
| 2) にぶい黄褐色 10YR5/4 | 細砂まじりシルトと灰色 5Y5/1 細砂まじり砂質シルトの混合層 (近現代耕作土) | 7) 明黄褐色 2.5Y7/6 | 細砂まじりシルト (中世～近世耕作土畦畔) |
| 3) 灰色 5Y6/1 | 細砂まじりシルト (近現代耕作土) | 8) 黄灰色 2.5Y6/1 | 細砂まじりシルト (中世耕作土・落込み102埋土) |
| 4) 灰色 7.5Y6/1 | シルトまじり粗砂 波状ラミナあり (近現代水田区画溝) | 9) 黄褐色 2.5Y5/4 | 細砂まじりシルト (中世耕作土・落込み102埋土) |
| 5) 灰色 5Y5/1 | 細砂まじりシルトに
にぶい黄色 2.5Y6/4 粘土質シルトブロックが20%程度入る マンガン粒少量含む (中世～近世耕作土) | 10) 黄灰色 2.5Y4/1 | 細砂まじり砂質シルト (中世耕作土) |
| | | 地山) 明黄褐色 2.5Y7/6 | 細砂シルト 粘質 (地山) |

第5調査区落込み102付近東壁断面図



- 第5調査区落込み102付近東壁断面図
- | | |
|------------------|---|
| 1) 黒褐色 2.5Y3/1 | 細砂まじり砂質シルト (現代耕作土) |
| 2) 黄灰色 2.5Y4/1 | 細砂まじりシルト (近現代溝埋土) |
| 3) 灰黄色 2.5Y6/2 | 細砂まじりシルト (中世耕作土) |
| 4) にぶい黄色 2.5Y6/4 | 細砂まじりシルト (中世耕作土) |
| 5) 明黄褐色 2.5Y6/6 | 細砂まじりシルト 径2cm未満礫多量入る (中世整地土) |
| 6) 黄灰色 2.5Y6/1 | 細砂シルト マンガン少量含む (中世耕作土) |
| 7) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂シルト (中世耕作土) |
| 8) 褐色 10YR4/1 | 細砂まじりシルト |
| 黄灰色 2.5Y6/1 | 細砂まじりシルトブロック30%程度入る (中世耕作土) |
| A1) 明黄褐色 10YR6/8 | 細砂まじりシルト (近世溝埋土) |
| A2) 黄褐色 10YR5/8 | 砂質シルト |
| 灰黄色 2.5Y6/2 | 細砂まじりシルトブロック20%程度入る (近世溝埋土) |
| A3) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂まじり粘土質シルト (近世溝埋土) |
| A4) 灰色 N5/0 | 細～中砂に粘土質シルトブロック30%程度入る
弱いラミナあり (近世溝埋土) |
| B1) 黄褐色 10YR5/8 | 細砂まじりシルト |
| 黄灰色 2.5Y6/1 | 細砂まじり粘土質シルトブロック30%程度入る (近世耕作土) |

- | | |
|------------------|---|
| B2) 黄灰色 2.5Y6/1 | 細砂まじりシルト (近世耕作土) |
| B3) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂まじりシルト マンガン粒多量入る (近世耕作土) |
| B4) 明黄褐色 10YR6/8 | 細砂まじりシルト 灰白色 2.5Y7/1 細砂ブロック20%程度入る (近世耕作土) |
| B5) 明黄褐色 10YR6/6 | 細砂シルト 灰色 5Y6/1 細砂ブロック20%程度入る
マンガン粒少量入る (近世耕作土) |
| B6) 黄褐色 10YR5/8 | 細砂まじりシルト (近世耕作土) |
| C1) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂まじりシルト (落込み102埋土) |
| C2) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂まじり粘土質シルト 明黄褐色 10YR6/8 粘土ブロック30%程度入る (落込み102埋土) |
| C3) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂まじり粘土質シルト (落込み102埋土) |
| C4) 黄灰色 2.5Y6/1 | 細砂まじり粘土質シルト 黄褐色 10YR5/8 粘土ブロック30%程度入る (落込み102埋土) |
| C5) 灰色 N5/0 | 粘土質シルト (落込み102埋土) |
| C6) 灰色 N4/0 | 粗砂まじり粘土質シルト (落込み102埋土) |
| C7) 灰色 N4/0 | 粘土質シルト (落込み102埋土) |
| D1) 黄灰色 2.5Y5/1 | 細砂シルト マンガン粒少量入る (落込み102埋土) |
| D2) 黄灰色 2.5Y6/1 | 細砂シルト 黄褐色 10YR5/8 粘土ブロック20%程度入る (落込み102埋土) |
| D3) 灰色 5Y5/1 | 細砂シルト オリーブ褐色 2.5Y4/6 粘土入る (落込み102埋土) |
| 地山) 明青灰色 10B6/1 | 粘質シルト～粗砂 |



第10図 調査区断面図(2)

第4章 調査成果

第1節 遺構

1. 第1調査区

第1調査区は、調査対象地の東側低地部のうち、北西辺に沿って設定した調査区である。面積は、2,723.88 m²を測る。標高は、西側がもっとも高く、東側へと階段状に下がる。現代では、水田耕作地として利用されていた（第11図）。

調査はまず、機械掘削によって近現代耕作土および近世耕作土を除去した後、人力掘削をおこなった。人力掘削は、調査区の西端から着手し、東方向へと掘り進める手順をとった。

調査区の西半部（第11図下方）は、近世以降の削平により、中世の包含層はほとんど残存していなかった。このため、5 cm程度の掘削精査により、遺構面を検出することができた。しかし、東へと掘り進めるうち層厚が徐々に増し、やがて中世耕作土と地山の間において、黒色粘土質シルトの薄層が確認できるようになった。この層は、有機質炭化物を含むほぼ均質な層であることから、湿地や沼地のような、湿潤で、かつ変動の少ない環境下において堆積した層であると考えられる。

遺構面は、この黒色粘土質シルト層の下面（地山上面）において確認した。この層自体には、遺物がほとんど含まれていなかったが、直上に堆積する包含層に13～14世紀所産の遺物が多くまじっていたこと、また直下において検出した遺構の埋土から、古墳時代後期～古代初頭の遺物が出土したことから、おおむね古代から中世初頭にかけて堆積したものと推測される。

検出された遺構には、古墳時代後期～古代に掘削されたものと中世に帰属するものがある。明確に古墳時代の遺構として確認できたのは、調査区中央付近を東北東から西南西方向へと走る溝6であり、他は、中世に営まれた水田耕作に伴う遺構とみられる。以下、遺構ごとに記述する。

1-1. 古墳時代後期～古代の遺構

溝6 第1調査区の中央付近において検出した溝である。断面形状は逆台形、幅は2.5 m～2.8 m、深さ0.5 m程度を保ちながら、調査区北西辺より南東辺へとほぼ直線を描いて続き、隣接する第3調査区内で直角に進路を変える。その先は、中世遺構の溝10と重なるため明確ではないが、おそらく溝10と同じように北方向へ続いていたものと推測される（第26図参照）。

埋土は、大きく2種に大別できる（第12図）。上層は、中近世包含層と湿地状堆積からなる上位層の落ち込みであり、下層は溝本体の埋土である。溝の埋土は黄灰色～褐灰色を呈する粗砂まじりシルトを主体とし、最下層には地山土をブロック状に含む粗砂層が確認できる。ただし、大きな粘土ブロックやラミナは観察できず、常に多量の水が流れていたような状況下にあったとは考えにくい。また、溝底面の標高は、調査区北辺でT.P. 34.22 cm、南東辺でT.P. 34.29 cmを測り、ほとんど高低差を認めることができない。

これらのことから、この溝は、耕作に伴うような用排水を目的として掘削されたとは考えられず、むしろ区画を意識した溝ではなかったかと推測される。

溝の埋土からは古墳時代後期～古代に所産時期をもつ土師器甕片や須恵器甕・横瓶の破片が出土した。

このうち実測が可能なもの、特徴的なものについては第 17 図に実測図を掲げた（第 17 図 1～6・14 次節にて詳述）。

1-2. 中世以降の遺構

溝 10 調査区東辺を北方向へむかって流れる溝である。幅員は 5～7m と一定せず、やや湾曲して調査区外へと続く。底面に凹凸はほとんどない。前述のとおり、溝 6 が直角に近い角度で進路を変更するあたりから派生する。調査区内の南西辺では T.P. 33.95 m、北端で T.P. 33.38 m を測る。

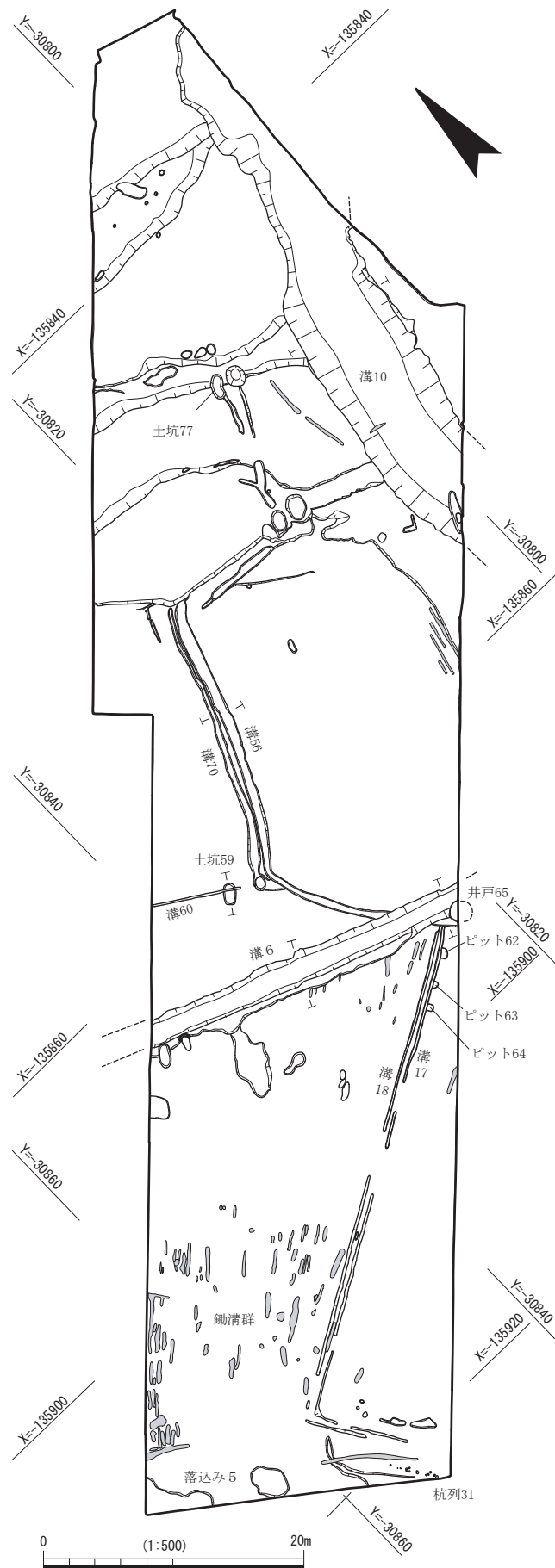
埋土は、灰色～褐灰色を呈する粘土質シルトで占められており、底面の一部にラミナが観察できる。水の流れは、比較的ゆるやかであったようである。水田の区画からみて、周囲の排水を集積して場外へ導くために設けられた水路であると考えられる。

なお、溝 10 の上流には、溝 6 の痕跡とみられる掘り込みの痕跡が認められた。

溝 10 からは、須恵器甕(初期須恵器)・鉢(中世)、土師器皿、瓦器椀・皿、白磁碗、施釉陶器碗・陶器播鉢などが出土した(第 17 図 7～17)。出土遺物の内容から、最終埋没時期は 16 世紀初頭と考えられる。

杭列 31 調査区南隅に置いて検出したピット列である。確認したピットの数は 13 個、本来は 2 列に並んで打設されていたようである。ピットの径が小さいこと、また水田区画に沿うことから、土留めのための杭列跡と推察した。埋土は、中世耕作土である褐灰色粘土質シルトを主体とする。

杭列の東南側(調査区外)には、用水路が通っており、その東側には丘陵裾斜面と高台(第 4 調査区)がある。丘陵裾部の整地や水路の開通など、水田耕地化に伴う土木作業は、中世にさかのぼると考えられることから、この杭列の打設も、その時期になされたもので



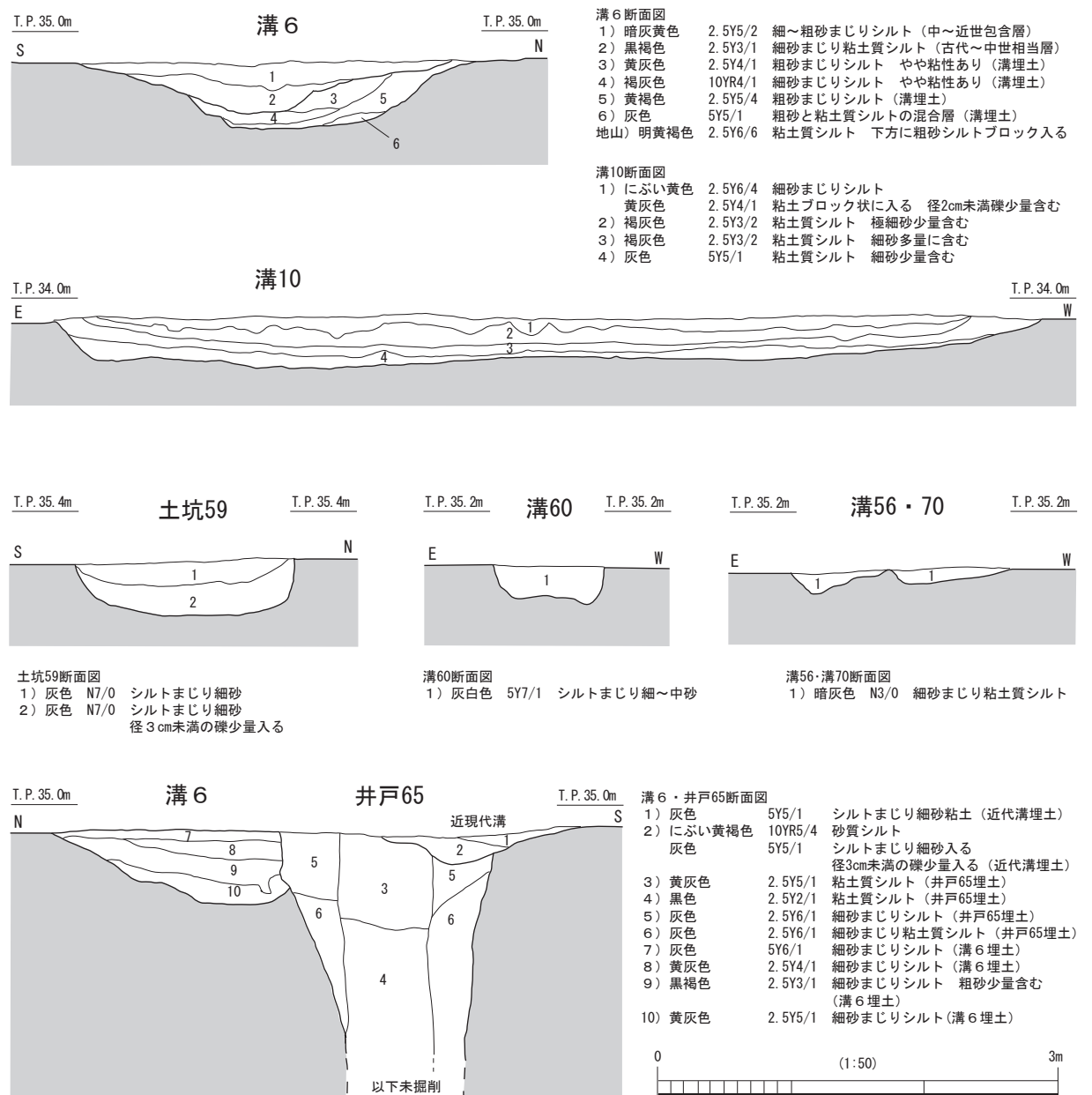
第 11 図 第 1 調査区遺構面全体図

ある可能性が高い。

溝 56・70 調査区中央をほぼ南北方向に並んでのびる 2 本の溝である。溝の西側の遺構面はほぼ平坦であるのに比して東側は、徐々に下がる傾斜をもつ。水田の区画溝だと考えられる。溝 56 は角度をもって曲がり、溝 6 の上位あたりまで続く。埋土はともに暗灰色の粘土質シルトである。溝 70 からは、瓦器碗と土師器皿の細片が出土した。

土坑 59 調査区中央付近において検出した中世末の土坑である。長径 1.6 m、短径 1.2 m を測る楕円形の土坑で、深さ 0.3 m を測る。埋土は灰色ないし、黄灰色のシルトまじり細砂であり、地山ブロックを少量含む。底面直上から土師器皿（15 世紀）が出土した（第 17 図 18）。

落込み 5 調査区南西辺において検出した不定形の落込み状遺構である。深度は浅く、0.15 ～ 0.2 m を測る。調査区の外側を通る水路からの浸水によってできた窪みに、上層（近世耕作土）が落ち込んで形成されたものと考えられる。埋土からは、染付碗の破片と、施釉陶器壺の口縁が出土した（第 17 図



第 12 図 第 1 調査区遺構断面図

30)。

溝 17・18 調査区西半部において検出した、2条の溝である。断続的ではあるが、調査区南東辺付近まで延び、南方向へと曲がって調査区外へと続く。2条の溝の間には、本来畦が設けられていたようである。遺物の出土は確認できなかった。

溝 60 調査区中央付近において検出した近世の水田区画溝である。調査区外の北西辺から延び、土坑59の周辺まで続く。幅80cm、底面に凹凸があるものの、深さは平均して20cm程度を測る。埋土は灰白色シルトまじり細砂～中砂、部分的に弱いラミナが確認できる。遺構内からは、染付碗の細片が出土した。

井戸 65 溝6を切って掘られた近世の井戸である。直径1.5mを測る円形の平面形を呈する。底部にむかって徐々に径が小さくなるため、遺構面以下1.5mまで掘削をおこなった。井桁や井筒は確認できていない。遺物の出土は僅少で、井戸瓦の破片と染付片が出土した。

土坑 77 遺構面が北へ向かって下がる東半部において検出した、平面ビーンズ形を呈する土坑である。深度は浅く、10～15cmを測る。階段状に整形された近世水田面の隅に設けられており、畦をはさんで井戸がある。土坑内に木組み等は確認できなかったが、堆肥を一時保管するような、水田耕作に伴う施設であった可能性が高い。埋土から、染付碗が出土した（第17図27～29）。

2. 第2調査区・第3調査区

第2調査区と第3調査区は、調査地東半部の低地に設けた調査区のうち、第1調査区を除いた部分である。第2調査区は1,727.12㎡、第3調査区は2,914.16㎡を測る。工程上、調査は分けておこなったが、連続する遺構があるため、ここでは一括して記述する。

第2調査区および第3調査区では、北西辺において、第1調査区から連続する溝6・溝10を検出した（第13図）。また、古墳時代と推測されるピット、中世水田に伴う水路、土坑、近世井戸などを確認した。

2-1. 古墳時代後期の遺構

溝 6 第1調査区から続く古墳時代後期の溝である。第3調査区内で屈曲し、その進路を北方向へと変える。中世の遺構である溝10に切られて消滅するが、遺構断面の観察から鑑みるに、本来はそのまま直進して調査区外へと続いていた可能性がある。溝の残存幅は、第1調査区検出時と同じく2.5m前後、深さは0.4mを測る。上層からは瓦器椀や土器器皿の破片が出土した。下層からは、溝10との接点付近において、細かい格子状タタキを外面に施した初期須恵器甕片が出土した（第17図14）。

溝 91 第3調査区東辺から第2調査区南半部において検出した直線を描く溝である。規模は幅0.2～0.3m、深さは0.05m程度、かろうじて埋土が残る程度の浅い遺構である。主軸を西へ75°振った方向にもつこと、加えて黒色粘土を主体とする埋土をもつことなど、溝6との共通項がある。遺物の出土は確認できなかった。

溝 130 第3調査区端で検出した溝である。残存長約40m、幅0.2m～7.4m、深さは0.1～0.12cmを測る。広く浅い溝であり、南から北方向へむかい、溝幅の伸縮を繰り返しながら延びている。埋土は黒色～黒褐色粘土質シルトを主体とする。遺物の出土は確認できなかった。

土坑 136 第3調査区南半部に位置する、やや楕円形を呈する土坑である。長径0.7m、短径0.6m、深さ0.35mを測る。中央より南西よりには、直径0.32mを測る平面円形の柱跡状痕跡が確認できる。

このため、大きな掘形をもつピットの可能性もある。埋土は、柱跡にあたる部分が黒褐色細砂まじり粘土質シルト、掘り方にあたる部分がにぶい黄色を呈する細砂まじり砂質シルト（地山土に近似）である。遺物の出土が少なく、明確な時期が確定できなかった。

なお、周辺では、連続する柱穴を検出することができなかった。

ピット 138 第3調査区北半部において検出した円形のピットである。直径0.3 m、深さ0.22 mを測る。埋土は湿地堆積と近似する黒褐色細砂まじりシルトである。遺物の出土は確認できなかった。この周辺には、黒色粘土質シルトを埋土にもつピットが集まっており、建物等が存在していた可能性がある。

ピット 148・149・150・151 第3調査区の北半部で検出した4基のピットである。ともに粗砂まじり黒色粘土を埋土の主体とする。規模は、ピット148が直径0.34 m、深さ0.2 m、ピット149が直径0.35 m、深さ0.1 m、ピット150が直径0.32 m、深さ0.16 m、ピット151が直径0.33 m、深さ0.22 mを測る。柱根の残存は確認できなかったが、ピット148に関しては、直径0.15 m程度の柱跡を復元することができる。

これらは、平成15年度におこなった確認調査において発見されていた遺構の一部である。確認調査では、遺構の掘削をおこなわずに埋め戻しをおこなっており、今回の調査において、改めて埋土を完掘するに至った。なお、入念な精査にもかかわらず、このピット群に連続する遺構を検出することができなかった。したがって、建物跡などは復元できていない。

2-2. 中世以降の遺構

土坑 134 第3調査区の南半部で検出した円形の土坑である。直径1.3 m、深さ0.3 mを測る。埋土は、中世耕作土のうち下層に介在する暗灰黄色を呈する砂質シルトであり、上位に近世耕作土である灰色細砂まじりシルトが、落ち込むように堆積する。下層からは土師器片甕片、上層からは染付碗の破片が出土した。水田区画溝付近に位置することから、耕作に伴う施設と考えられる。

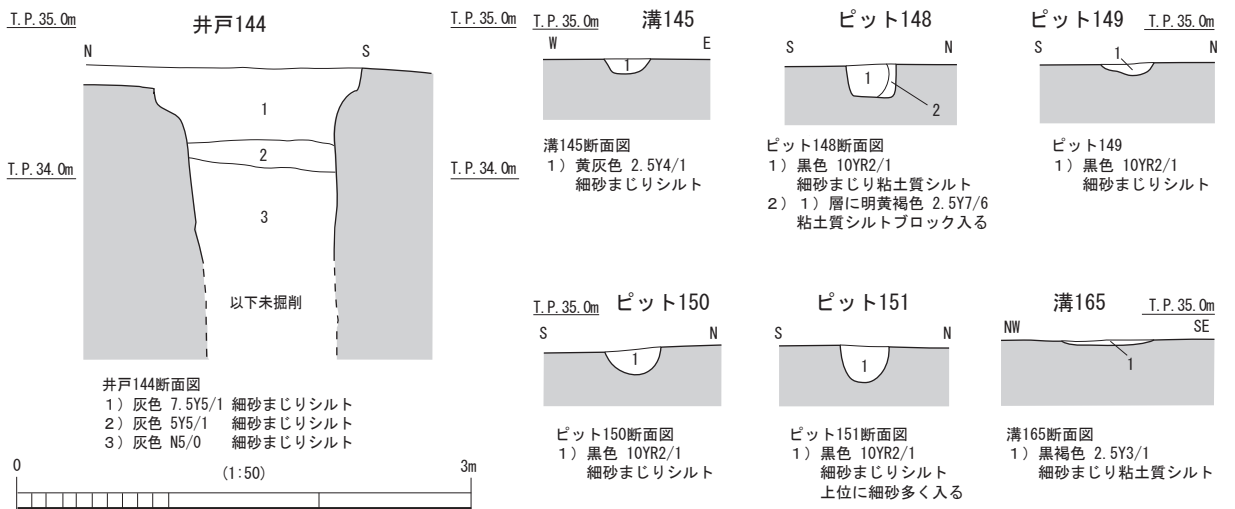
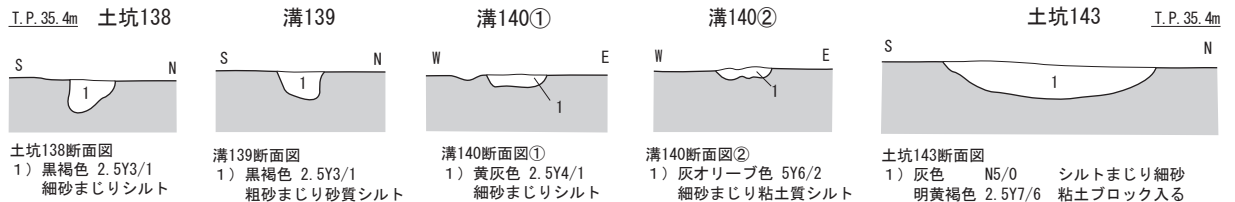
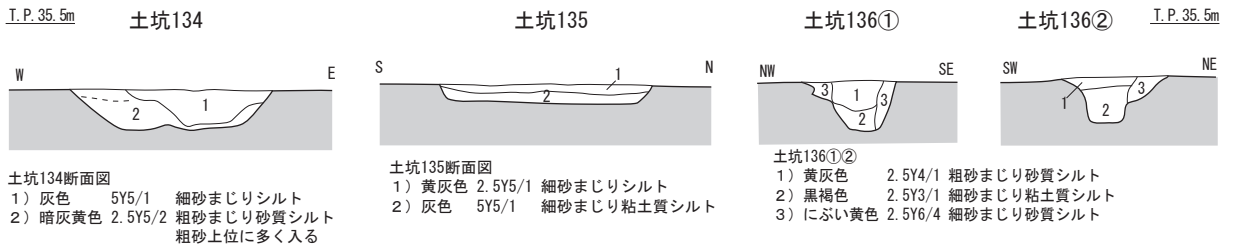
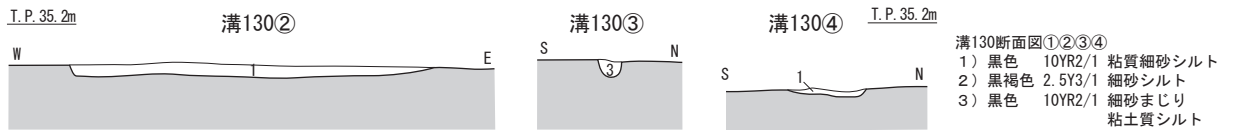
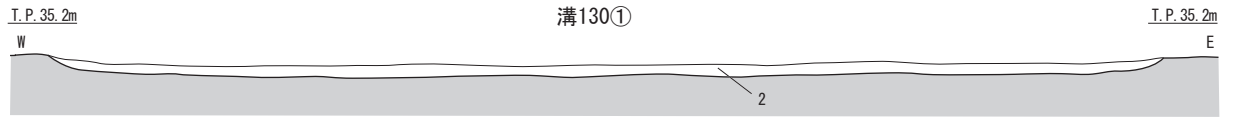
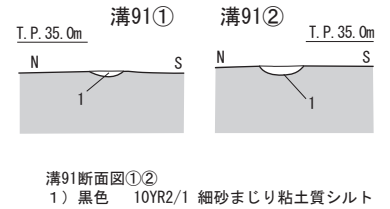
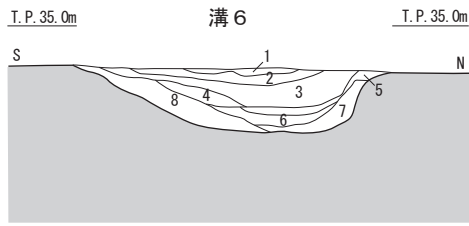
溝 139 第3調査区北隅で検出した小溝である。溝6と平行して北西―南東方向に延びる。残存長6.0 m、幅0.3 m、深さ0.22 m、断面形状は方形を呈する。溝埋土は、上位に堆積する黒色粗砂まじり粘土質シルト（湿地状堆積）に、地山ブロックが少量入る。遺構の埋没時期を示すような遺物の出土は確認できていないが、掘り込み面が古代の堆積層である黒色粘土質シルトの上面であること、また土坑143（近世）に切られていることなどから、中世の遺構であると考えた。

溝6は、中世においても水田区画溝として利用されていたことが、出土遺物から明らかとなっている。溝6と平行するこの溝148も、水田耕作に伴う遺構であると考えられる。

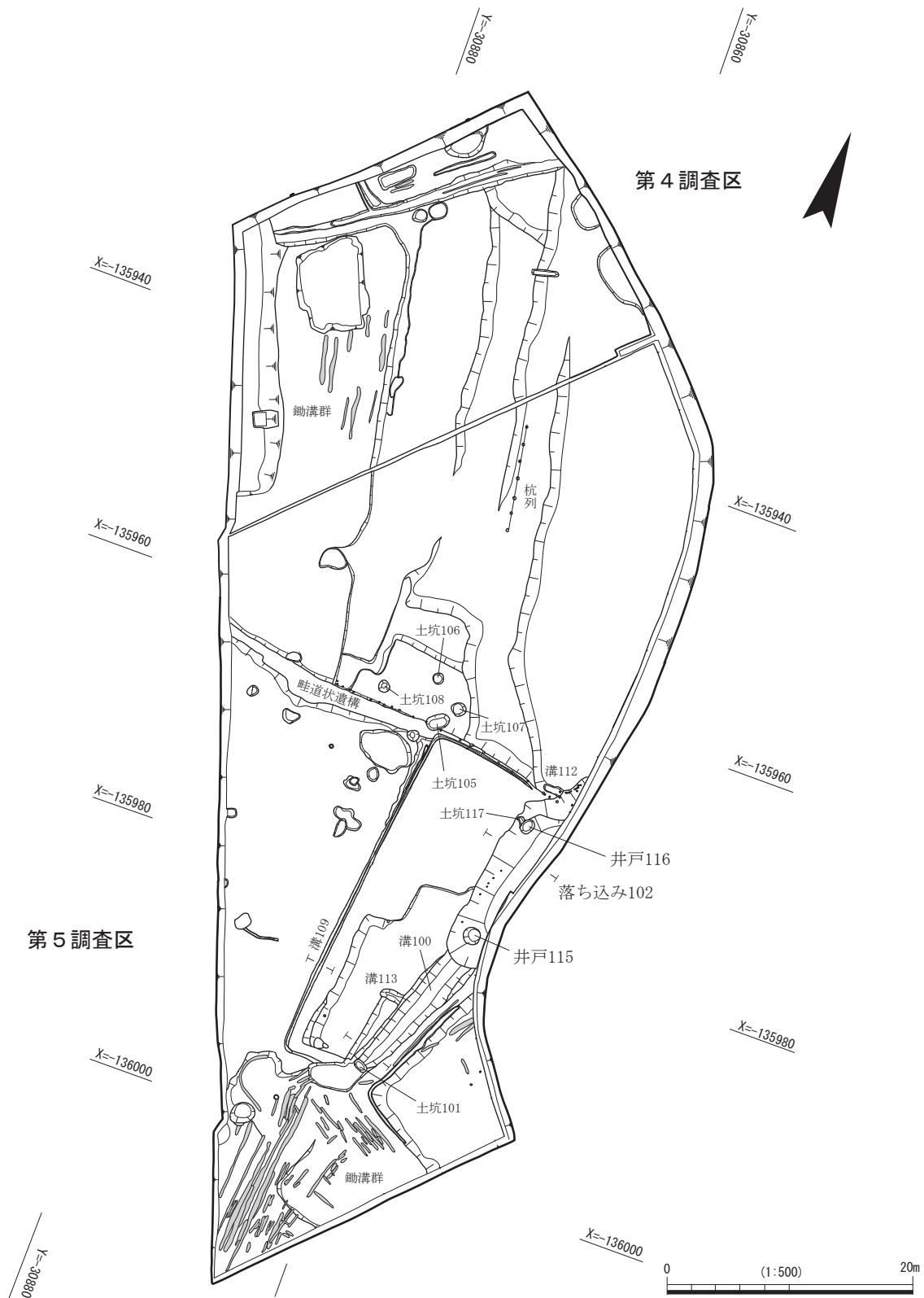
溝 145 第3調査区をほぼ東西方向に横断し、第2調査区内において屈曲し、そのまま北へむかって延びる溝である。第3調査区内では断続的にしか残存していないが、その方向軸と埋土の状況から同一の遺構と判断した。溝の幅は0.3 m、深さは0.1 m前後を測る。埋土は、黄灰色細砂まじりシルトで、中世耕作土に近似する。尾根の裾（第4調査区）から等高線に交差して延びていることから、水田の用水路として設けられた遺構であると考えられる。

土坑 135 第3調査区南半部に位置する楕円形を呈する土坑である。規模は長径1.5 m、短径0.8 m、深さは0.15 mを測る。埋土は近世耕作土と同じく灰色シルトで、底面に粘土質シルトが堆積する。水田区画の端に位置することから耕作に伴う施設であると考えられる。遺物の出土はなかった。

溝 140 第2調査区で検出したL字形に屈曲する溝である。規模は幅0.5 m、深さ0.1～0.15 mを測る。



第14図 第3調査区遺構断面図



第15図 第4・第5調査区遺構面全体図

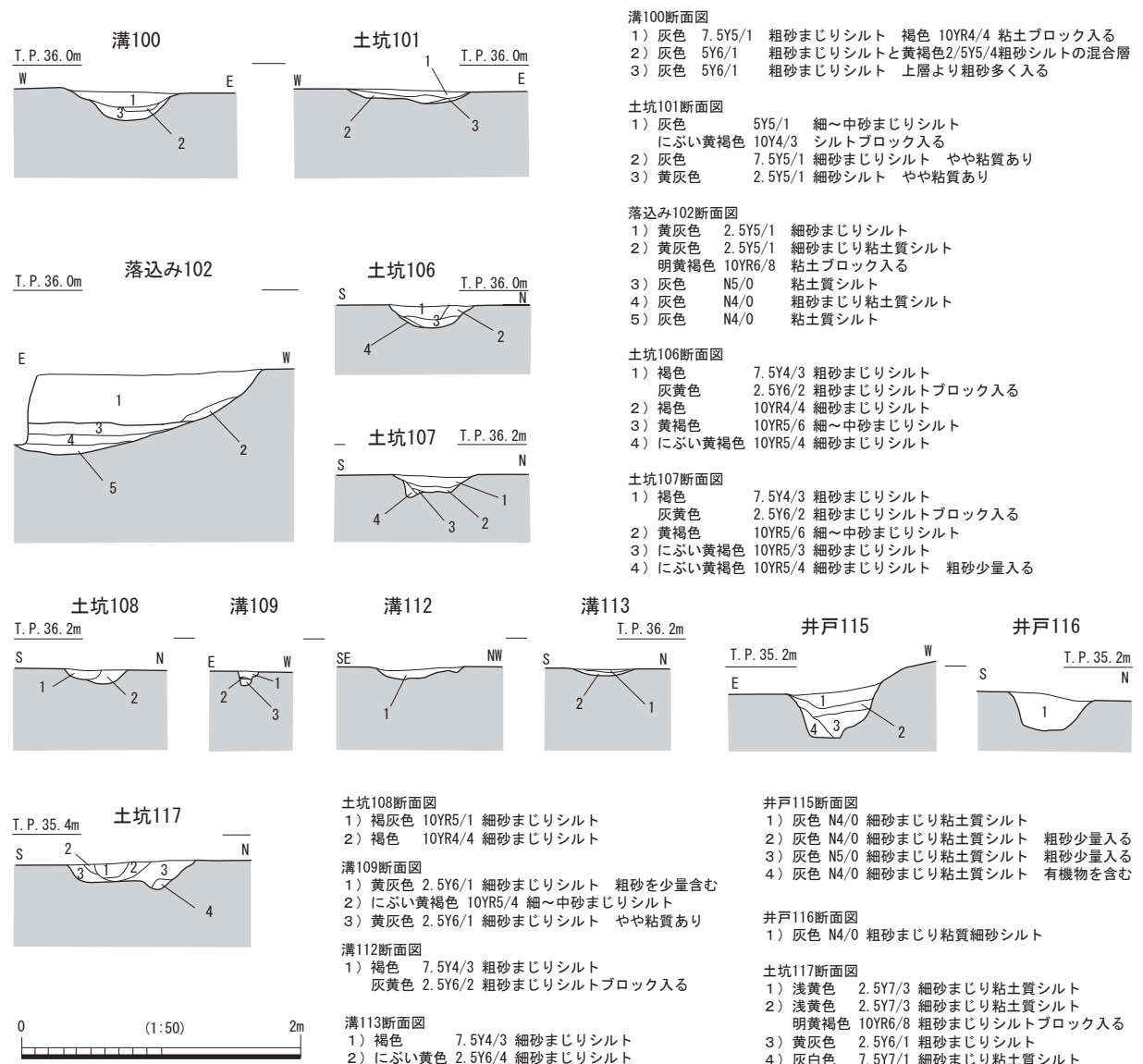
溝 10 に沿って北北東方向に延びているが、溝 10 の上面から掘り込まれている箇所を確認できるため、溝 10 の埋没後、新たに設けられた遺構であることがわかる。中世に開削された水田区画が、近世に至っても踏襲されていたことを示しているといえる。

埋土は、近世耕作土である黄灰色シルトを主体とする。ただし、溝 10 と重なる付近では、溝 10 の埋土である褐灰色粘土質シルトがまじる。遺物の出土は確認できなかった。

土坑 143 第 2 調査区北端で検出した土坑である。直径 1.4 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は、近世耕作土に近似する灰色シルトに、地山土である明黄褐色粘土がブロック状に入る。水田区画下手に設けられており、耕作に伴う遺構であると考えられる。埋土からは染付碗の破片が出土した。

井戸 144 第 3 調査区西辺で検出した、素掘りの井戸である。直径 1.3 m を測る、平面円形の遺構である。掘削は、検出面より 1.5 m の深度までおこなった。

井戸内は、直径 0.8 m 程度の円筒状を呈しており、主として近世耕作土の落ち込みにより埋没していた。水田区画の脇（上流）に設けられており、耕作地への給水を目的として設けられた遺構であると考えられる。埋土からは、染付碗の細片が出土した。



第 16 図 第 5 調査区遺構断面図

井戸 78 第2調査区の中央西辺寄りにおいて検出した井戸である。近世水田区画の隅に設けられており、長径4.8 m、短径3.5 mを測る不定型な落ち込みの中央に、直径1.87～2.0 mを測る楕円形の井戸の掘り形が設けられている。埋土は現代耕作土ないし整地土である。水田への給水施設として掘削されたものが、現代の整地により埋め立てられたものと考えられる。埋土からは、竹製の箕断片、染付、施釉陶器、青磁、ガラス製品などが出土した（第26図）。

3. 第4調査区・第5調査区

第4調査区と第5調査区は、小規模な尾根とこれに連なる丘陵裾部に設定した調査区である。第4調査区は694.26 m²、第5調査区は1,741.67 m²の面積を測る（第15図）。第1調査区との比高差は1.0～1.5 m程度、もっとも高いの尾根の頂点は、第4調査区と第5調査区の分割線付近である。

第4調査区は、市道に面した微高地という立地条件の良さから、工場用地や資材置場として利用されていた区画である。このため、概して遺構面の残りは悪く、攪乱が随所に見られた。一方、第5調査区は、なだらかな斜面地にあたっており、堆積層が遺構面を覆う環境下にあった。このため、遺構面の残存状態は良好に保たれており、自然、遺構の検出は第5調査区に偏ることとなった。以下、遺構ごとに記述する。

3-1. 中世以降の遺構

溝 100 第5調査区の南半部で検出した溝である。南西から北東に向かって徐々に幅員を増しながら続き、落ち込み102へ注ぎ込む様相をみせる。溝の幅は0.8～2.2 m、深さは0.2～0.3 mを測る。埋土は中～近世耕作土である灰色粗砂まじりシルトに、地山土である黄褐色粗砂シルトがブロック状に混じる。水田の段差下に沿って設けられていることから、耕作地の排水溝であった可能性が高い。埋土からは、瓦器椀、陶器碗、土師器皿などが出土した（第17図19～21）。

土坑 101 第5調査区南半部で検出した土坑である、溝100埋土の上面から掘り込まれている。平面形状は楕円形、規模は長径1.2 m、短径0.7 m、深さ0.2 mを測る。埋土は近世耕作土である灰色粗砂まじりシルトを主体とする。耕作に伴う遺構であると考えられる。遺物の出土は確認できなかった。

落ち込み 102・井戸 115・井戸 116・土坑 117 第5調査区南東辺において検出した遺構群である。落ち込み102は、前述のとおり東に向かって開く、小規模な谷頭にあたる。この谷頭は湧水地点であり、西側斜面の浸食と崩落が顕著である。今回、遺構として確認した落ち込みの規模は、最大長18.5 m、最大幅3.2 mに及ぶ。なお、落ち込みの上端と底面とでは、1.0～1.2 mの比高差がみられた。

また、落ち込みの埋土を除去したところ、崖下の2箇所において、2基の井戸と1基の土坑を検出した（井戸115・116・土坑117）。井戸115の底面は、落ち込み102のそれよりもさらに0.3 m低い、T.P. 34.7 mを測る。井戸116は、0.4 m低いT.P. 34.6 mである。土坑117は、井戸116に切られているが、井戸壁面が大きく崩壊していることから、その性格を推測するのは難しい。

落ち込みの埋土は、上下2層に大別することができた（第10図下段参照）。近世耕作土の沈み込みである上層（第10図断面図A層・B層に相当）は、黄灰色細砂まじりシルトを主体とし、マンガング粒を随所に含む。この層からは染付椀、陶器碗などが出土した（第17図22～26）。

一方、下層は中世以前に堆積した土層であり、還元化が進んだ粘土層（第10図断面図C層）と、水田耕作の際に成形された整地層（同D層）である。この整地層からは瓦質の鍋や陶器鉢が（第17図

22・23)、また下層からは石製品の破片(同31)が出土した。なお、井戸115・116からは、遺物の出土が確認できなかった。

この落込み102は、湧水による浸食崖が埋めたてられたものである。自然地形そのものではなく、時間的経過を如実に示す、人為的な関与が確認できる遺構であるといえる。この付近は、湧水のため常に湿った環境にあった。このため、きめ細かい軟質粘土が周辺に堆積したと考えられる。

中世には、この粘土層の上面から井戸が掘り込まれ、より標高が低い水田へ給水されたようである。その後、近世には作付面積の拡大により、井戸と谷頭は完全に埋めたてられたものと推測される。

土坑105・106・107・108 第5調査区中央付近において検出した円形土坑4基である。規模は、土坑105が直径0.8m、深さ0.05m、土坑106が直径0.6m、深さ0.15m、土坑107が直径0.55m、深さ0.15m、土坑108が直径0.45m、深さ0.1mを測る。

埋土はすべて近似しており、上層は中世耕作土である褐色粗砂まじりシルト、下層は地山土を攪拌した鈍い黄褐色細砂まじりシルトを主体とする。土坑107の底面には、植物茎根が地山へと潜り込んだ痕跡がみられた。ともに、遺物の出土は確認できなかった。

なお、この土坑群は、5×6m程度の小区画内に集中して設けられており、その様相から、水田に伴う遺構群であると推測される。この小区画の南側には、幅1.2～2.0m、高さ0.2m程度の高まりをもった畦状の遺構が、東西方向に続く。畦の裾には、密に並ぶ杭列が設けられており、入念な土留め工事の痕跡をとどめている。また、畦の裾部分では、所々、ヒトや偶蹄類(ウシ?)の足跡を認めることができた。

これらのことは、この畦が単に区画や分水のために設けられたのではなく、人やウシが通う畦道であったことを示している。畦道沿いに設けられた土坑を伴う小区画は、農作業小屋を建てるスペースや、堆肥置場として利用された可能性が高い。

溝112 第5調査区東辺の中央付近において検出した溝である。確認できた規模は、長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.08mである。東に向かって流れ落ち、落込み102の近世埋土に切られて消滅している。埋土は、褐色を呈する粘土質シルト(中世耕作土)である。溝底部から、布目圧痕のある平瓦が1点出土した。

溝113 第5調査区南半部で検出した溝状遺構である。溝112と同様、東へ流れる方向性をもつ。検出した規模は、長さ1.8m、幅0.6m、深さ0.05m、埋土は中世耕作土である褐色細砂まじり粘土質シルトを主体とする。遺物の出土は確認できなかった。溝112とともに、水田区画溝の一部であったと考えられる。

溝109 溝109は、第5調査区中央から南半部にかけて検出した、「コ」字形にめぐる溝である。全長40m、幅0.15mの規模で確認した。溝の断面は、段状に作られている。近世水田区画のために設けられた溝である。埋土からは、染付碗の細片が出土した。

第2節 遺物

1. 遺構出土の遺物

第17図には、遺構から出土した遺物のうち、実測が可能なものについて掲載した。

溝6 1～6および14は、溝6から出土した遺物である。1・2は下層から、3～6は上層から出土した。

1は、須恵器甕の体部である。外面に平行タタキ、内面に同心円状タタキの調整を施す。

2は、須恵器横瓶の体部側面である。横瓶は通常、側面を下にして製作をはじめ、縦長中空品の先端に粘土を詰めて俵形とし、これを横たえて口縁を取り付ける。2は、粘土を詰めた痕跡がないことから、製作開始時に作成されはじめた部分であると考えられる。外面の調整は、ロクロ回転による指ナデ調整後、回転ヘラケズリをおこない、さらに時計回りの方向に手持ちヘラケズリを施す。残存部中央には、二条の線刻が認められる。胎土はやや粗く、焼成も甘い。残存部中央の内面は、火ぶくれによる破碎のため器壁が一部欠損する。

横瓶は、6世紀から9世紀初頭まで存続するが、製品そのものが徐々に大型化する傾向にある。この横瓶は、全長30cm前後、高さ20cm程度の製品であったと推測される。口縁部や他の体部は出土していないが、大きさから鑑みて、古墳時代後期の製品である可能性が高い。

3・4は、須恵器鉢の口縁部である。ともに口縁端部が肥厚し、外側に面を持つ。東播系須恵器で、片口鉢の一部と考えられる。4は、焼成不良のため、やや赤みを帯びた色調を呈する。12世紀末～13世紀後葉の製品である。

5は、瓦器の皿である。器壁の調整には、内外面ともに横方向のユビナデが認められるのみでミガキは認められない。

6は、土師器の皿である。胎土内に粘土塊があるため、器壁に凹凸が生じている。色調は、赤褐色を呈する。中世の製品である。

14は、須恵器甕の口縁から肩にかかる部分である。口縁へと立ち上がる変化点には、粘土帯の継目が明瞭に残る。器壁外面の調整は細かい格子状タタキ、内面にはタタキを擦り消した痕跡が認められる。焼成は甘く、断面はセピア色を呈する。古墳時代中期の製品であると考えられる。

溝 10 7～17は、溝10から出土した遺物である。出土遺物は、13世紀所産のものもっとも多く、最終埋土に近世初頭の遺物がまじる。このことから、溝10の埋没時期は13～16世紀頃と考えられる。

7は、土師器の皿である。くすんだ肌色の色調を呈しており、低い器高を有する。

8は、瓦器の皿である。内面には、ユビナデの後、一条のミガキが認められる。

9は、瓦器碗の底部である。焼成が甘く、淡い橙色を呈する。退化した断面三角形の貼付高台がつく。内面には、ジグザグ状の暗文が認められる。

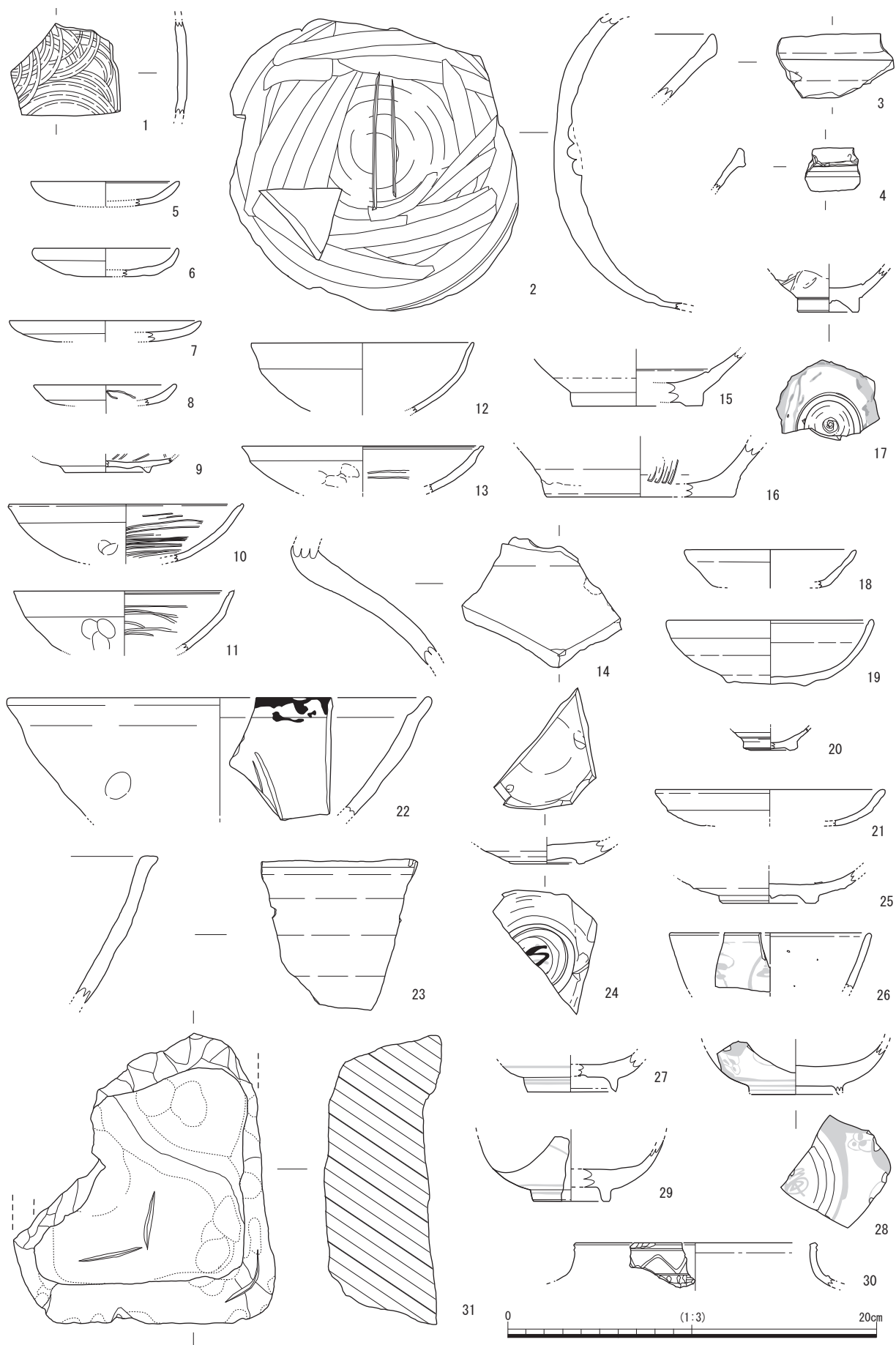
10～13は、瓦器碗の口縁部である。10は、ゆるやかに伸びる器形をもつ、大和型の碗である。口縁端部内面に、一条の沈線をめぐらせることによって生じた段が認められる。内面には、ミガキが密に認められ、外面にはユビナデとユビオサエの痕跡が残る。13世紀前半の製品である。

11も同じく大和型の碗である。口縁端部より、一段下がったところで屈曲して立ち上がる器形をもつ。口縁端部内面には、沈線による段をもつ。器壁内面にはまばらなミガキ、外面にはユビナデとユビオサエが残る。13世紀前半の製品である。

12は、楠葉型の碗である。口縁部より一段下がったところに最大厚があり、口縁端部を尖らせる器形をもつ。口縁端部内面には沈線をめぐらせていた可能性はあるが、摩滅が著しく判断は難しい。同様に、ミガキの痕跡も認められなかった。

13は、やや器高が低い大和型の碗である。口縁端部内面には、沈潜による段が認められる。器壁内面にはまばらなミガキ、外面にはユビナデとユビオサエが残る。13世紀中葉の製品である。

平池遺跡から0.7km東へ隔てた茄子作遺跡では、類似した格子状タタキをもつ初期須恵器がまとも



第 17 图 遺構出土遺物実測図

って出土している。溶着した資料が多いことから、窯跡の存在も想起されており、14も茄子作遺跡において製作されたものである可能性が高い。生産地と消費地の関係を示唆するものとして、興味深い資料である。

15は、白磁碗の底部である。高台周辺は露胎、他には淡いクリーム色の釉を施す。外面の釉には、亀甲状のひび割れがある。内面には、焼成時についた輪状の痕跡が残る。12世紀後葉の製品である。

16・17は、溝10の最上層（最終埋土）から出土した。16は、陶器（信楽焼）播鉢の底部である。1.7cmの幅に4条の播り目が内面に残る。外面は橙色、内面は灰白色を呈する。器壁外面にはざらつきがあるが、内面は使用による摩滅のため滑らかである。近世初頭の製品であると考えられる。

17は、施釉陶器の碗である。口台の内側には、粘土を削り取った痕跡が渦巻状の突起として残る。また、高台の床付面には、重ね焼きのため他製品の胎土が付着する。外面は、黒褐色を呈する鉄釉を筋状に施した後、白色釉を塗布する。このため、部分的に釉薬が混じりあい、独特の雰囲気を出している。内面は白色釉のみが塗布され、釉の表面にはヒビ割れと細かい気泡が認められる。近世の製品である。

土坑 59 18は、土師器の皿である。底面から直線的にのびる器壁をもつ。13～14世紀の製品である。

溝 100 19～21は、溝100から出土した。19は、大和型の瓦器碗である。やや丸みを帯びた器形をもつ。口縁端部内面には、めぐらせた沈線による段が認められる。貼付高台を有するが、大変退化した形状である。口台が消滅しつつある、13世紀後半の製品である。

20は、白磁碗である。高台内部には、工具によって粘土を切り欠いた痕跡が残る。高台周辺は露胎、内面には灰白色の釉薬が塗布されている。12世紀前葉の製品である。

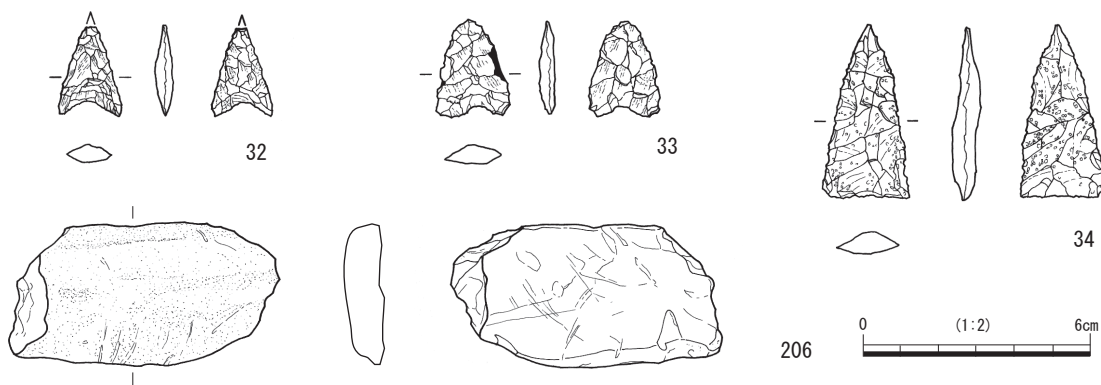
21は、土師器皿である。底部から口縁への変化点に段を設ける。胎土は精良、焼成はやや甘く、肌色を呈する器壁断面に灰色の縞をもつ。13世紀前半の製品である。

落込み 102 22～26・31は、落込み102から出土した。出土土器の所産時期は 中世後半～近世までである。

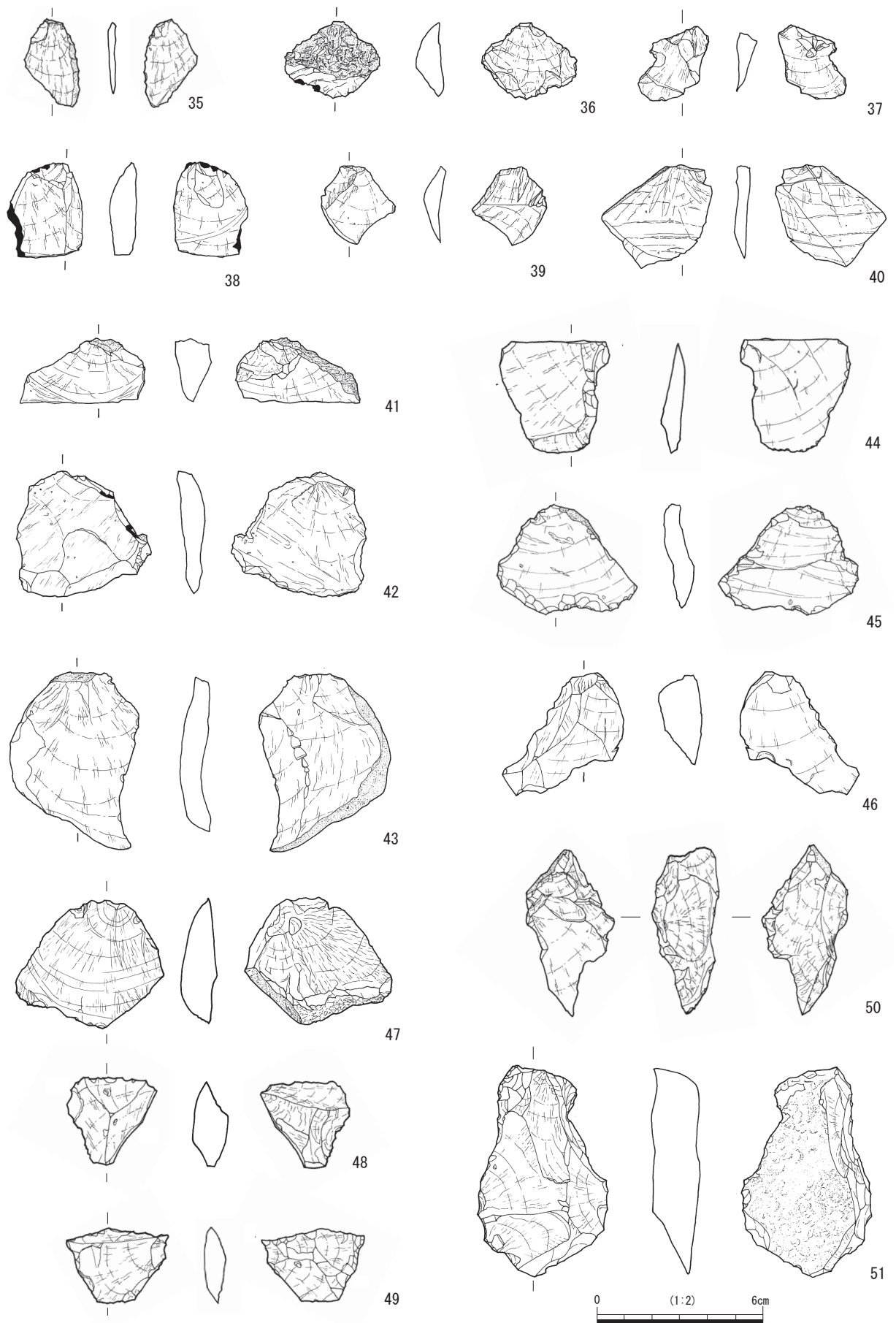
22は、瓦質焼成の鍋である。やや内傾しながら立ち上がる口縁の端部を、ナデによって外反させる。内面には播り目状の線刻が2条残る。口縁端部内面には、炭が付着していた。16世紀に製作された、京都型瓦質焼成土器に分類される特徴をもつ。

23は、信楽焼の鉢である。断片であり、播目は確認できていない。短く外反させた口縁端部には、面をつくる。胎土は粗く、径5mm未満の白色礫の混入が目立つ。14～15世紀の製品である。

24は、灰釉を施した施釉陶器である。内面は、オリーブ色を呈しており、2箇所（本来は3箇所）に、胎土目をもつ。高台は削りだし、高台内面中央には回転ナデによる粘土の残骸が突起状に残る。高台周



第18図 包含層出土遺物実測図（石器）



第19図 包含層出土遺物実測図（サヌカイト剥片）

辺は露胎するが、器壁の一部に釉薬の刷毛塗りが残る。高台内には墨書が一文字認められる。判読は難しいが、「支」「友」「為」もしくは仮名文字の可能性もある。13～14世紀の美濃・瀬戸産の製品か。

25は、白磁碗の底部である。内面には灰白色の釉薬が塗布され、2箇所（本来は3箇所）に、胎土目をもつ。外面は残存する部分においては釉薬の塗布が認められない。高台の床付面には、積み重ね焼成による胎土の欠損がみられる。

26は、染付碗の口縁部である。外面には絵付けを施す。器壁には、釉の濃淡や気泡による凹凸がみられる。

31は、加工面をもつ石製品である。凝灰岩質の石を成形したもので、欠損箇所があるものの、本来は一辺12cmの正方形を上面とし、断面は台形を呈する製品であったと考えられる。上面および残存する側面は、ほぼ平坦に加工されており、部分的に切傷状の加工痕跡を残す。用途は不明である。

土坑 77 27～29は、土坑77から出土した染付碗である。27は、高台床付面に離れ砂が付着する。

28は高台内部に「福」の文字を書き込む。高台端部は欠損している。

29は、内面には蛇の目釉剥を残す。高台の床付は、露胎する。すべて近世の製品である。

落込み 5 落込み5からは、施釉陶器壺の口縁部と考えられる30が出土した。内面は露胎、外面は、オリーブ色の下地に白色釉で幾何学的な文様を施す。

井戸 78 なお、今回の調査では、近代以降に埋没したと考えられる遺構が、複数確認された。これらはみな、水田に給水することを目的として設けられた井戸もしくは、堆肥置場などの施設である。このうち、第1調査区において検出した井戸78からは、遺物がまとまって出土した。

第26図195は、瀬戸焼（陶器）の蓋である。土瓶や大型の急須、小壺などを覆うものである。表面に鈍い象牙色の釉が塗布されている。裏面は無釉である。

196は染付碗の口縁部である。白地に緑色のインクで、松竹梅のモチーフを印刷する。

197は、染付皿もしくは鉢の底部である。白地に濃淡をつけた呉須で絵付けを施す。絵柄は、山村の風景で、雑木林のなかに水車小屋が配されている。低い高台の床付面は無釉、高台内は輪状に釉を掻き取る。高台内部中央には円形の窪みがあり、この部分の釉は掻き取られていない。

198は、やや深みのある染付皿である。高台床付面は無釉、底部内面中央には胎土の盛り上がりを残す。196同様、白磁に緑色で絵柄を印刷する。内面には、細かい網の目や亀甲花文の間に、「壽」「福」字を配している。印刷時の失敗か、一部の文様に擦れたような乱れが見える。

199は、瀬戸焼（陶器）土瓶の口縁部である。受部は無釉、他は黄緑色の釉を施す。

200も同じく瀬戸焼で、猪口または小鉢とみられる。釉にはひび割れが認められる。

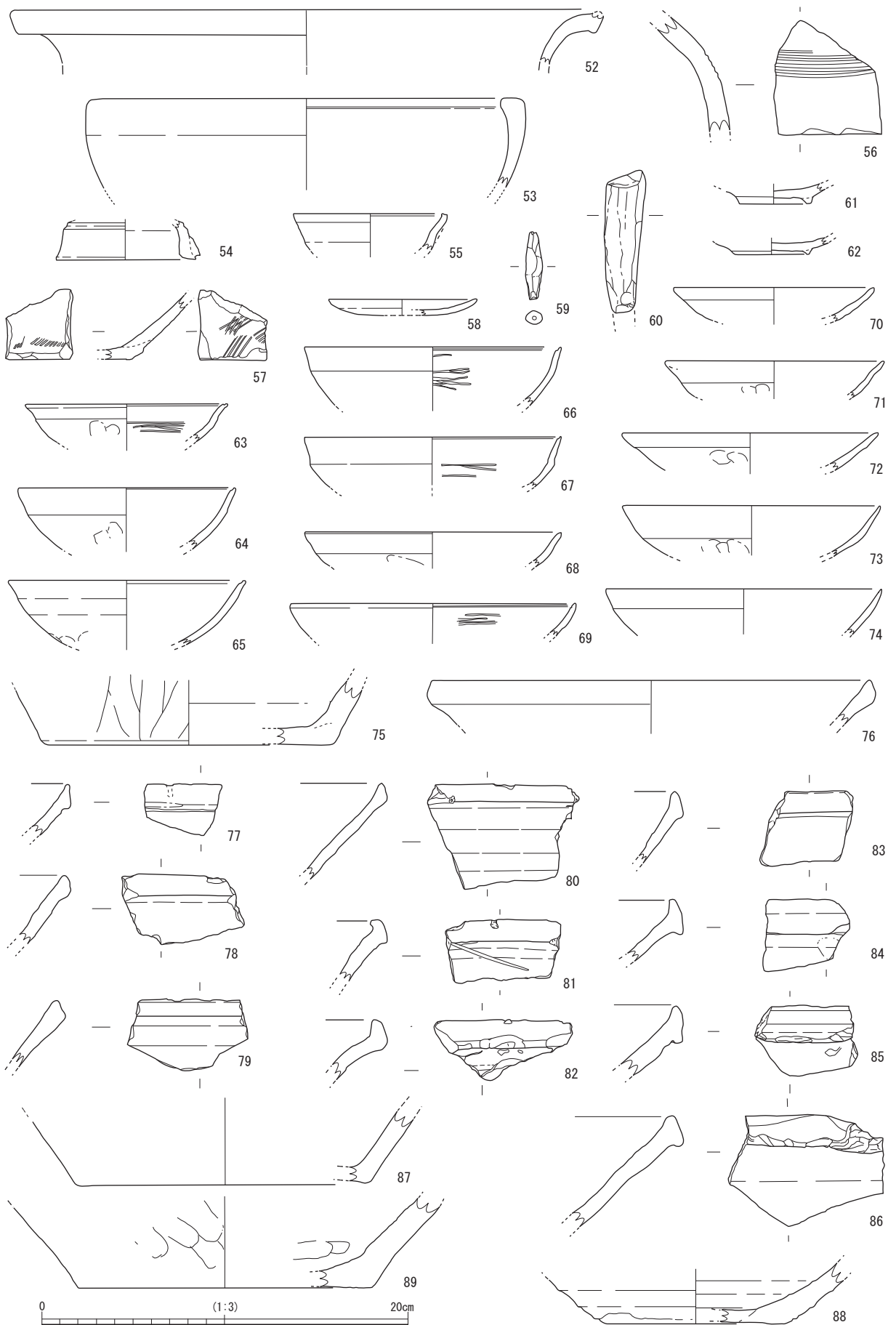
201は青磁花瓶の脚部である。裾部および内面は無釉、他には青緑色の釉を施す。小型品であり、一輪挿し、または仏具の可能性もある。

202は、ガラス製の円板状品である。コバルトブルーの色調を呈しており、内部には細かい気泡が多く認められる。表面には、曲線を描く陰刻が認められる。裏面には使用痕とみられる擦痕が残る。箸置きであろうか。

203は、ガラス製の注射器の一部である。柱状部は磨りガラスで、端部に「39」と数字が陰刻されている。

204は、ガラス製のおはじきである。乳白色を呈しており、表面に花もしくは手形の押印がなされている。

205は、瓦質の筒型製品である。口縁端部を上方へナデて尖らせている。用途は不明である。



第20図 包含層出土遺物実測図 (第1調査区1)

2. 包含層出土の遺物（第1調査区）

第1調査区から出土した遺物のうち、石器は第18・19図（32・33・35～38・43・47・49）、土器は第20・21図（52～127）、金属器は第25図（189・192）に掲げた。

石器 第18図32・33は、ともにサヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。法量から、縄文時代の製品であると考えられる。32は、先端部と側縁部をわずかに欠損するが、ほぼ完形で出土した。先端部は測辺の角度に対して、鈍く作る。基部の逆刺は丸みを帯びた形状に調整されている。33も、先端部2mm程度と測縁の一部を欠損する。ただし風化の度合いから、使用痕跡である可能性が高い。表裏面とも細かい調整剥離を施しており、基部の逆刺も鋭角に作られている。32は、地山上面より出土した。

サヌカイト切片・剥片 第19図に掲げたサヌカイト切片および剥片のうち、35～38・43・47・49が第1調査区より出土した。すべて中近世包含層からの出土である。35～38・43は、刃部調整など、二次加工が見られないものである。35は側面、36は背面に、37は打撃面に自然面を残す。43は全長6.5cmを測る大型の切片であるが、やはり打撃面から側面に自然面を残している。

47・49は、二次加工が認められる切片である。47は、下端部に集中して複数回の敲打痕が残る。表面風化の度合いが、他の切片よりも新しいことから、火打ち石として利用された可能性も残している。49は、背腹両面から、細かい調整をおこなっているが、刃を作り出すまでには至っていない。

弥生土器 第20図52・53は弥生土器である。52は甕の口縁部、53は鉢の口縁部である。

52は、大きく外反する口縁である。口縁端部は肥厚して短く垂下し、外側に面をもつ。口縁端部を上方に短くつまみ上げて成形されていたようだが、その突端部を欠損する。摩滅が著しく、調整痕を確認することはできなかった。器壁は暗灰黄色、胎土には径5mm未満の円礫を少量含む。

53は、やや内湾して立ち上がる口縁の端部に、一条の沈線をめぐらせている。焼成は良好、器壁は淡い橙色から灰色の色調を呈する。胎土には径1mm未満の礫がまじる。類例から、台付鉢である可能性が高い。

52・53ともに、弥生時代中期後葉（畿内第Ⅲ～第Ⅳ様式）の製品である。中近世包含層より出土した。

須恵器 54～56は古墳時代～古代の須恵器である。54は脚部、55は高杯の杯部、56は甕の肩部と考えられる。

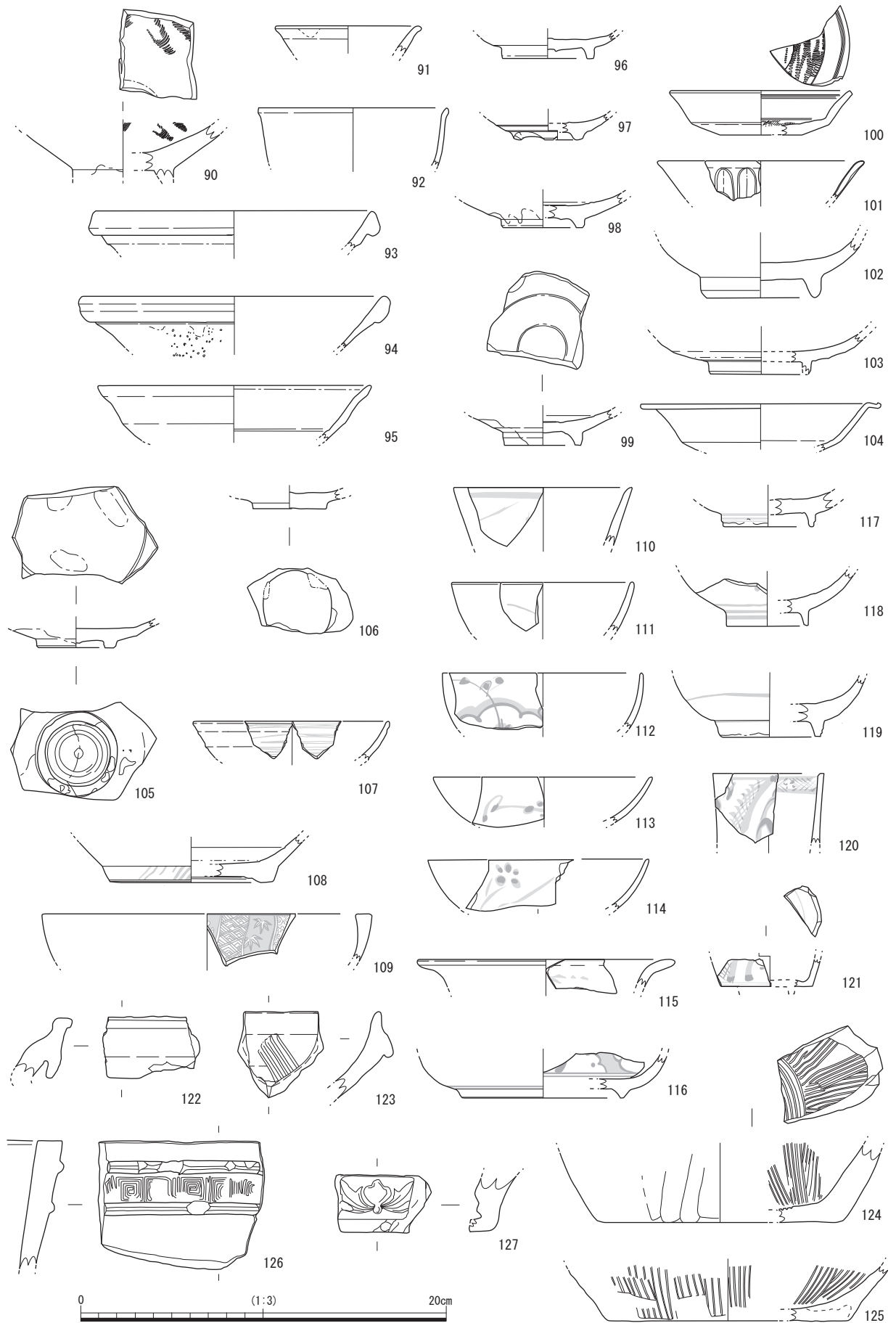
54は、裾に焼成時の溶着とみられる粘土塊が付着する。外面に沈線が一条めぐらされており、その上辺から屈曲して内傾する。器形の特徴から、台付長頸壺の脚部と考えられる。55は焼き歪みのため、曲がった器壁をもつ。56は、肩部にカキ目が施されている。すべて6世紀末から7世紀前半期に所産時期をもつ。中近世包含層より出土した。

土師器 57・58・75は土師器である。57・75は鉢の底部、58は皿である。

57は、外面にハケ目調整を施す。内面は使用による摩滅が著しいが、底部付近に8本一単位の拵目が残る。75の鉢は、焼成良好で、硬く焼き締まる。外面には、工具によるケズリが認められる。

瓦器 60～74は、瓦器である。60は三足竈の脚部、61・62は瓦器椀の底部、63～69は大和型の瓦器椀、70～72は和泉型瓦器椀、73・74は楠葉型瓦器椀である。すべて摩滅が著しく、確認できたミガキや暗文はわずかである。おおむね13世紀の製品である。

中世須恵器 76～88は、中世に所産時期をもつ須恵器の鉢である。すべて東播系の製品であるが、口縁端部の形状に差異が認められる。大きくは、単純に端部を肥厚させるもの（76～80）、端部を内側ないし上方に折り曲げるもの（81・82）、端部を上方につまみ上げ、さらに垂下させるもの（83～86）の



第 21 図 包含層出土遺物実測図 (第 1 調査区 2)

三種類がある。所産時期は、12世紀中葉～14世紀である。

磁器（青磁・白磁） 第21図90～103は磁器である。このうち青磁は、すべて竜泉窯系の特徴を備える。所産時期は、13世紀～15世紀の前葉である。

90は、青磁碗である。直線的に立ち上がる器壁をもつ。内面には絵画様の櫛描文がなされている。高台と高台内部は露胎するが、外面器壁と内面には透明度の高い釉薬が施されている。

91は、白磁皿の口縁部である。口縁端部をユビナデによって短く外反させる。口縁外面には釉溜りが認められる。92は、青磁碗の口縁部である。ゆるやかに立ち上がる口縁と短く外反する端部をもつ。

93・94・95は、白磁碗の口縁部である。口縁端部の外側に粘土帯をめぐらせて、肥厚させる器形をもつ。93の内面は施釉されるが、外面下半部は無釉である。94は、外面に釉溜りと細かい気泡の痕跡が残る。ともに12世紀の製品である。

95は、丸みを帯びて立ち上がる体部とゆるやかに外反する口縁をもつ。内面には、沈線が一条めぐらされている。口縁の先端部は露胎し、わずかに砂が付着する。13～14世紀の製品である。

96は、磁器碗の底部である。やや青みがかかった白色釉薬を塗布するが、高台および高台内部は無釉である。見込み部中央には、ロクロ成形時にできた突起が残り、高台内には、ヘラで切り欠いた痕跡と粘土塊が認められる。

97と98は、白磁皿である。97は、高台に抉りをもつ。残存する高台の床付面と見込み部に離れ砂が付着する。15世紀前葉の製品である。

98にも、高台と高台内部に離れ砂が付着する。底部内面には、蛇の目釉剥が残る。

99は、白磁碗の底部である。高台内部は工具による切り欠きと整形が認められる。底部内面には、蛇の目釉剥が残る。

100は、青磁皿である。内面の底部にはジグザグ状の櫛描文、口縁部には二条の線刻が施されている。外面底部のみ露胎、他にはまんべんなく釉薬がかかる。13世紀前半の製品である。

101は、青磁碗の口縁部である。外面に、先端部が丸く細い蓮弁文が施されている。使用のため、口縁端部がやや摩滅する。13世紀後半の製品である。

102と103は、青磁碗の底部である。102は、高台内部に釉の掻き取りと粘土塊の付着が認められる。14世紀後半の製品である。103は、高台の床付面を欠損する。高台と高台内部は露胎、その他には灰オリーブ色の釉が施されている。

施釉陶器 104～108は、施釉陶器である。

104は、灰釉陶器の碗である。口縁は屈曲して外反させ、その内面に沈線をめぐらせて、玉縁状につくる。器壁が薄く、シャープな印象を与える。

105・106は、灰釉陶器の皿である。高台と底部内面に離れ砂が付着する。釉は、黄色味を帯びたオリーブ色を呈する。釉はツケガケのため、底部外面の約半分が露胎する。106の底部外面は露胎、内面には灰釉がわずかに残る。底部外面には糸切痕があり、重ね焼きによる釉薬の付着が2箇所に残る。

107は、一般に刷毛目唐津と称される唐津焼碗の口縁部である。褐色の下地釉に乳白色の釉を筋状に塗布する。口縁端部には、使用痕と思われる摩滅がみられる。

108は、灰釉陶器の鉢である。高台外面にタタキ状の調整を施す。外面と見込み部はともに露胎、器壁内面にかかる釉薬は灰色を呈する。見込み部の一部に、釉薬が点状に残る。

染付 109～121は、染付である。109・115・116は鉢、110～113、117～119は碗、120・121は湯呑

である。染付とは通常、磁器を胎土とし、呉須による絵付けを施した後、透明釉をかけたものを指す。ただしここでは、陶器を素地として絵付けや施釉したものも、染付の部類に含めた。

109 は、磁器染付の鉢である。内面には、笹の葉と格子状の紋様が配されている。110～114 の椀は、釉薬に気泡やヒビ割れが目立つ。絵付けのモチーフは草木を主とし、背景に雲を配する。115 は、陶器染付の鉢である。内面に絵付け、口縁端部にコバルトブルーの彩色を施す。器壁には、釉のひび割れがみられる。117・118 の高台は無釉、見込み部には蛇の目釉剥が残る。116・117・118 の高台床付面には、離れ砂が付着する。すべて近世後半期の製品である。

陶器 89・122～125 は、無釉の陶器である。89 は信楽焼鉢の底部、122 は、信楽焼甕の口縁部である。外面は淡い橙色、内面は灰色を呈する。ともに14世紀中葉の製品である。

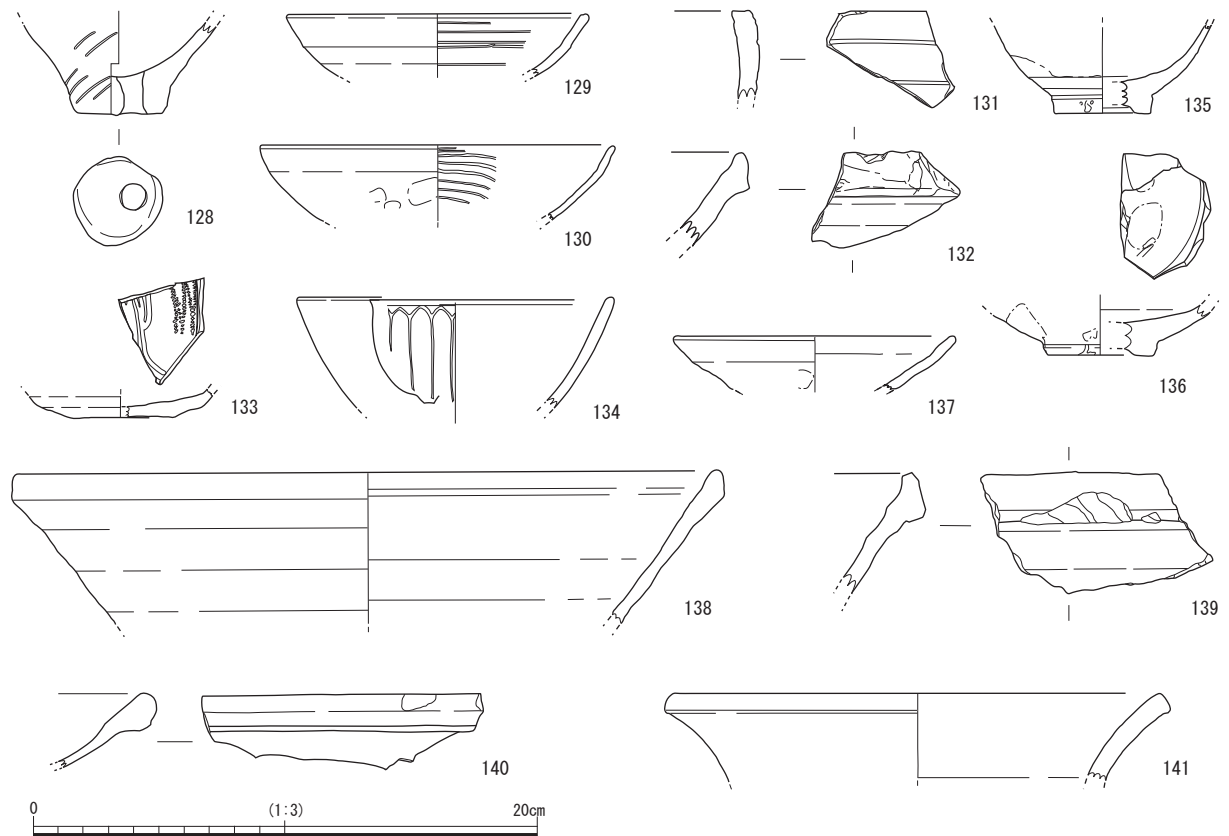
123・124 は備前焼の播鉢である。123 の口縁端部には、上辺へのつまみ上げと短い垂下がみられる。内面には5本一単位の播り目が、斜め方向に施されている。124 は、外面をへら状工具でナデ上げて調整する。内面には、4本一単位とした播り目が、器壁と底面に認められる。14～15世紀の製品である。

瓦質土器 125・126 は、瓦質土器である。125 は播鉢で、内面に6本一単位の播り目が放射状に残る。外面は、ハケ目による調整が施されている。15世紀後葉～16世紀初頭の製品である。

126 は、奈良火鉢のうち深鉢に類されるものである。外面に二条の突帯をめぐらせ、その間に雷渦紋を連続して押印する。口縁部内面には、一条の沈線が認められる。焼成が甘く、一部は土師質である。15世紀頃の製品と考えられる。

土製品 59 は土師質の土鍾である。紡錘形を呈しており、中央に貫通孔をもつ。同形状の土鍾は、今回の調査で計3点が出土した。網糸に通して使う漁労具であるが、近隣の河川で使用したものであろう。

銭貨 第25図189は銅銭「開元通寶」である。完存するが劣化が著しく、文字は膨張する。裏文字はない。



第22図 包含層出土遺物実測図（第2調査区）

開元通寶は、621年に初鑄された唐銭である。本来、文字を楷書体で明確に表すが、189は文字が小さく、やや不明瞭である。表文字のうち、「元」字が行書体に近く、几部分が左右非対称となっている。「通」字は「道」を思わせるような形状を呈する。

鉄製品 192は、釘もしくは鏝とみられる鉄製品である。断面形状は楕円形、先端部は尖る。錆ぶくれが著しく、残存状況は悪い。近世包含層より出土した。

3. 包含層出土の遺物（第2調査区）

第2調査区の包含層から出土した遺物のうち、石器は第19図（40・51）、土器は第22図（128～141）、金属器は第25図（190・193・194）に掲げた。すべて中近世包含層からの出土である。

サヌカイト切片・剥片 40・51はサヌカイトの剥片である。40は、打撃面から側面にかけて自然面を残す。剥離面も風化が著しい。51は、二次加工が認められる切片である。背面に大きく自然面を残す。左側方や下方など、打撃痕を多く残す。形状から、えぐりをもつような石器の作成を意図したものであったようであるが、未成のまま廃棄されたようである。

弥生土器 128は、鉢の底部である。摩滅が著しいが、外面には斜め方向の平行状タタキ痕が認められる。底部中央よりずれた箇所、貫通孔が認められる。焼成前に穿孔されたものであるため、甑のような利用方法が考えられる。弥生時代後期の製品である。

瓦器 129・130は、大和型瓦器椀、131は羽釜、132は鉢である。129・130の内面には、まばらなミガキが認められる。ともに13世紀の製品である。131の外面には、沈線が二条めぐらされている。132は、内面にユビナデ痕跡が残る。ともに15世紀の製品である。

磁器（青磁・白磁） 133・134は竜泉窯系の青磁、135は白磁である。133は、青磁皿の底部である。外面底部は無釉であるが、他は明るいオリーブ色の釉が施されている。底部内面には、ジグザグ状の櫛描や線刻模様が認められる。13世紀前半の製品である。134は、青磁碗の口縁部である。外面には細い蓮弁文がなされている。塗布された釉は、全体的にヒビ割れが認められる。15世紀の製品である。135は、白磁碗の底部である。短く成形された高台は無釉、外面の上半部と内面は白色釉が塗布されている。高台は一部欠損する。14世紀の製品である。

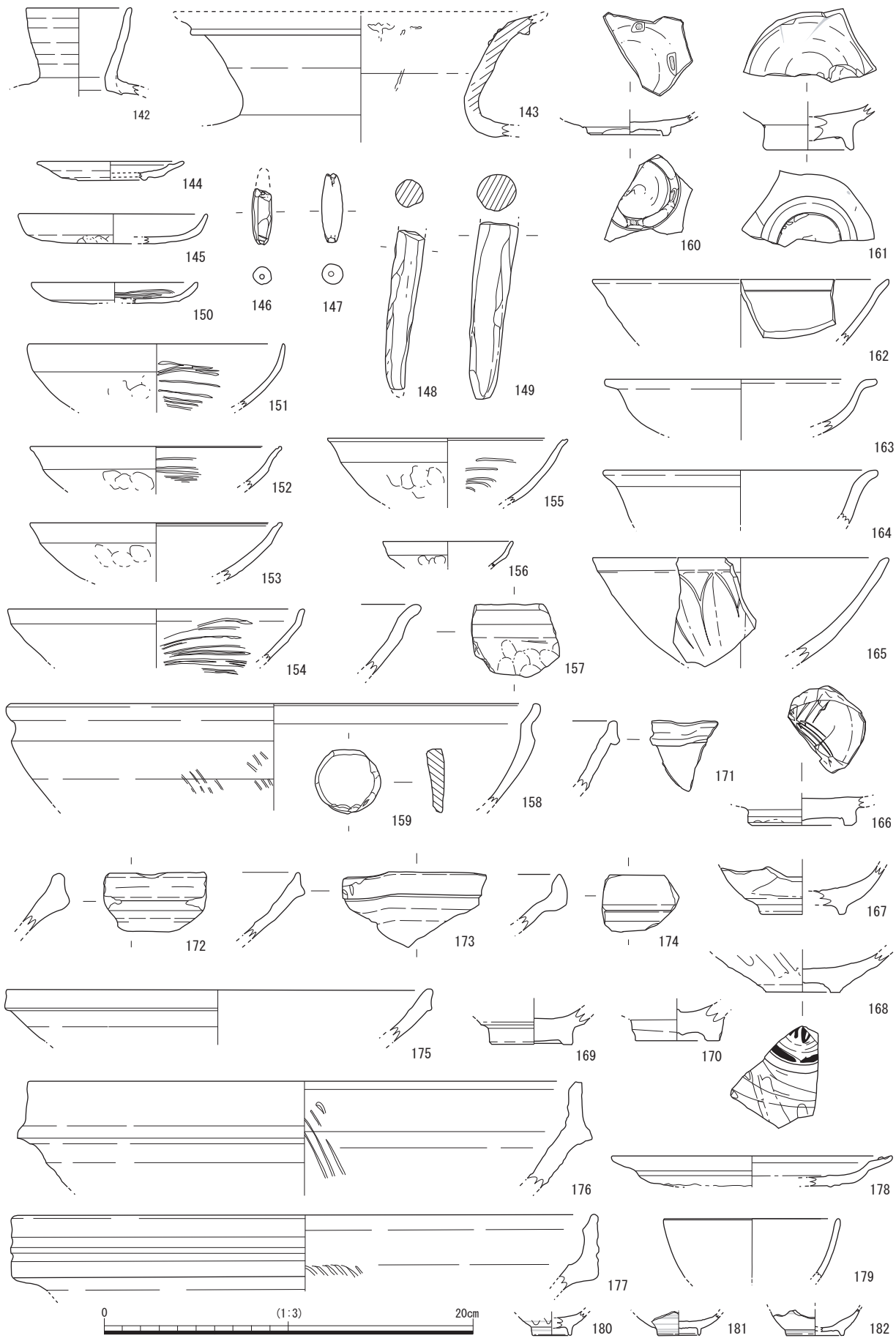
施釉陶器 136は、透明度の高い黄褐色釉を施した陶器碗の底部である。内面には、2箇所に胎土目が残る。所産地の推定は難しい。

土師器 137・140は土師器である。137は皿の口縁部である。内面および口縁端部にはナデ、外面にはユビオサエが残る。140は、大きく開く鍋の口縁部である。内外面ともにユビナデ調整をおこなう。外面には全体的に煤や炭化物の付着が認められた。137・140ともに近世初頭の製品と考えられる。

中世須恵器 138・139は東播系須恵器鉢の口縁部である。138はナデにより、口縁端部を肥厚させて端面を作り出すタイプ、139は口縁端部を垂下させるタイプである。ともに12世紀末～13世紀中葉の製品である。

陶器 141は、陶器甕の口縁部である。石製を思わせるほど硬く焼き締まり、断面の色調は白色を呈している。胎土は粗く、径3mm程度の黒色・白色礫が多くまじる。器壁表面は、内面がやや赤褐色、外面にはオリーブ色の自然釉が付着している。所産地は確定できていない。

銭貨 第25図190は、銅銭「元祐通寶」である。側縁の一部を欠損するが、ほぼ完形で出土した。表文字は小ぶりに行書体である。裏文字はない。元祐通寶は、北宋銭の一種で、初鑄は1086年（元祐元年）



第 23 图 包含層出土遺物実測図 (第 3 調査区)

である。

鉄製品 193は、釘もしくは銚とみられる鉄製品である。断面形状はほぼ正方形、先端部を細く作る。錆ぶくれが著しく、残存状況は悪い。近世包含層より出土した。

194は鉄製鋏の刃先と考えられる板状品である。直角を呈する一隅は確認できるが、全体形状の復元は難しい。裏面は平坦、表面には盛り上がりが見られる。近世包含層より出土した。

4. 包含層出土の遺物（第3調査区）

第3調査区から出土した遺物のうち、石器は第18・19図（34・39・45・46・48）、土器は第23図（142～182）、金属器は第25図（191）に掲げた。

石器 34は、平基式の石鏃である。大きな欠損はみられない、ほぼ完形品である。両側面から連続して剥離調整をおこない、背面には中央に稜線をつくる。腹面は、下半部が平坦に加工されており、矢柄との接合面を顕著に示す。先端部、側縁とも、非常に鋭利な刃が作り出されている。全長は4.5cmを測る。法量の大きさから弥生時代の製品であると考えられる。ただし風化は全面に及んでおり、細かい穴が随所に見られる。

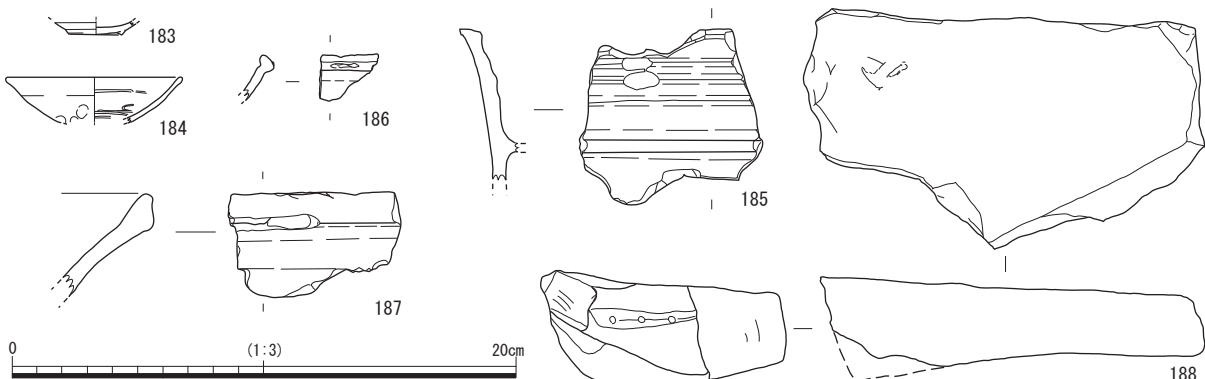
サヌカイト製切片・剥片 39は、打撃面に自然面を残す。45は、一側面に自然面を残すが、それ以外の側面には二次加工が認められる。細かい敲打を繰り返し、刃の成形を試みた痕跡が残る。石材自体は粗質で、縞状の模様が顕著に残る。46は楔形の切片である。打撃面に自然面を残す。側面によって風化の度合いに差異があるため、打撃が加えられた時期が複数あるものと推測される。48は、平面三角形を呈する切片である。46と同様、自然面のほかに、風化が進んだ側面をもつ。側片の一部に二次加工が認められる。

須恵器 142・143は古墳時代後期に所産時期をもつ須恵器である。

142は、提瓶の頸部である。外面にはユビナデによる凹凸が認められる。焼成は甘く、断面はセピア色と灰白色の縞状を呈する。

143は、甕の頸から口縁にかけての部分である。残存部位のうち、口縁端部はすべて欠損する。口縁外面には、断面三角形の突帯が貼り付けられており、古墳時代中期後葉から後期の特徴を示している。口縁内面にはオリーブ色の自然釉が付着する。焼成は甘く、断面の色調はセピア色を呈する。割れ口の一部にも被熱痕跡と自然釉が認められることから、焼成時に破碎した可能性がある。ヒビ割れをおこした製品ではありながら、流通した例としてとらえることができる。

土師器 144・145は土師器の皿である。144は口縁部に段をもち、ほぼ水平に端部までひろがる形状を



第24図 包含層出土遺物実測図（第5調査区）

もつ。底部には断面円形の短い高台が付随する。145は、丸みをもって底部から口縁が立ち上がる器形をもつ。内面と口縁部は、入念なヨコナデで仕上げられている。

瓦器 148・149は三足竈の脚部、150は瓦器皿、151～156は瓦器碗、157・158は鉢、159は瓦質の円板形土製品である。

150は、瓦器の皿である。底部内面にはユビナデ後、粗い格子状の暗文を施す。外面は、口縁にのみナデ調整がみられる。

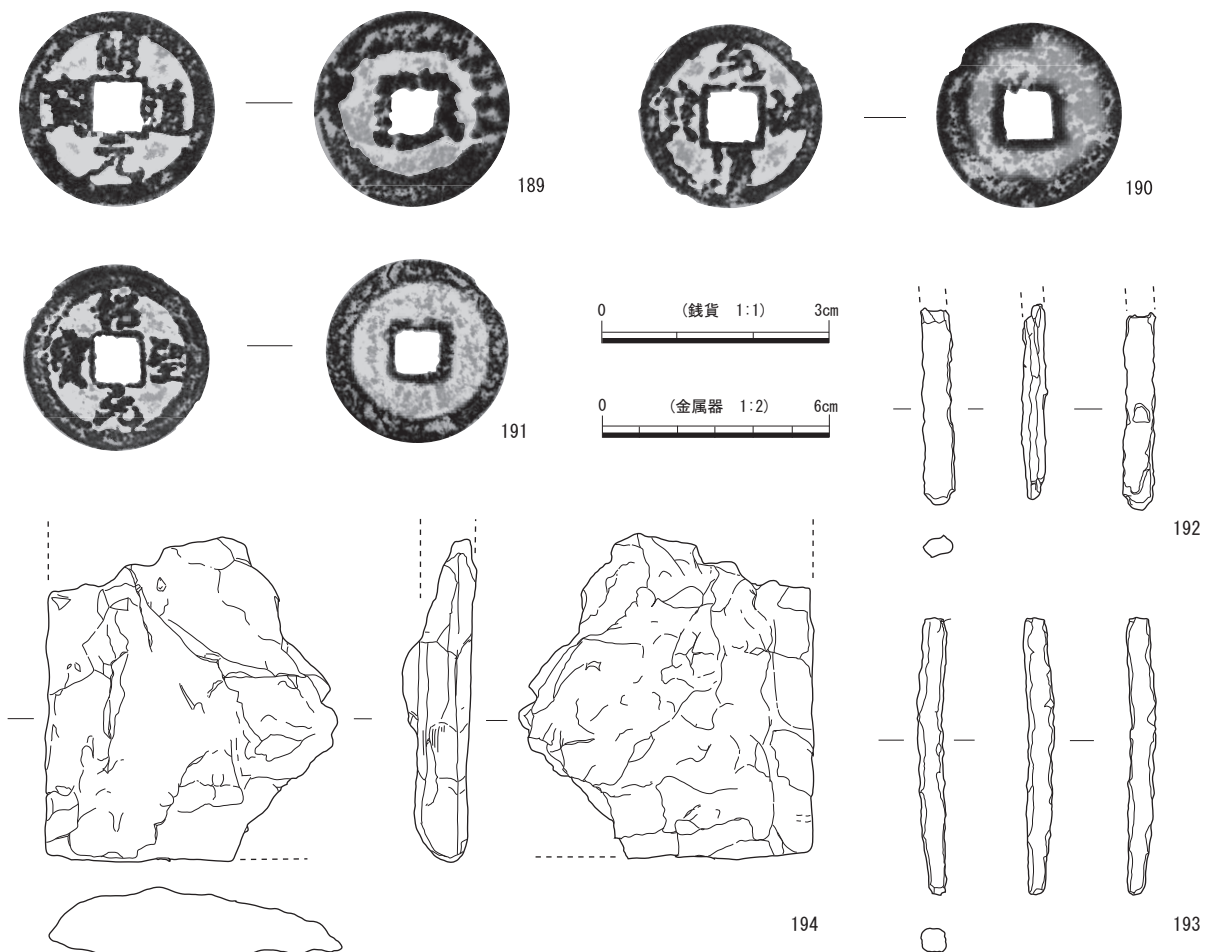
151は楠葉型瓦器碗、152～155は大和型瓦器碗、156は和泉型瓦器碗である。156は小型品である。出土した瓦器碗は、おおむね13世紀から14世紀初頭の製品である。

157・158は、屈曲して外反させた口縁をもつ鍋である。ともに京都型瓦質焼成土器に類される製品である。157は、器壁全体に横方向のユビナデと指頭圧痕が明瞭に残る。158の焼成は良好で、器壁は銀色を呈する。ともに16世紀前半期の製品である。

159は、瓦質の鉢または羽釜の体部破片を円板形に再加工した製品である。周辺を打ち欠いた後、磨いて曲線をつくりだしたもののようである。直径3.4cmを測る。穿孔等の加工は認められず、用途は不明である。

磁器(白磁・青磁) 160は白磁、161～165は竜泉窯系青磁碗、166は同安窯系と考えられる青磁碗である。

160は、高台の4箇所にくぐりをもつ白磁皿である。残存する高台の床付面は、釉が剥落する。底部内面には胎土目が残る。15世紀前半期の製品である。



第25図 包含層出土遺物実測図(金属器・銭貨)

161 は、高台内面と高台床付面に釉剥が認められる。高台内部には釉の掻き取りが輪状に残り、他製品の胎土が一部付着する。内面には、線状の文様（櫛描文の縁辺か？）が施されている。14 世紀頃の製品である。

162 の外面には、蓮弁文状の凹凸がわずかに認められる。内面に 1 条の沈線がめぐらされている。

163 は、外側へ折れ曲がった口縁部をもつ。緑色が強い釉が塗布されており、表面には釉のヒビ割れが認められる。164 はなだらかに外反する口縁端部をもつ。162～164 は、すべて 14 世紀頃の製品である。

165 は、外面に蓮弁文を施した青磁碗である。尖った蓮弁が、稜をもって連続する。口縁端部は摩滅が著しく、一部に釉の剥離が認められる。13 世紀末～14 世紀前半期の製品である。

166 は、内面に櫛描文が施されている。高台は、ヘラ状工具で整形されているため、角のある断面形状をもつ。高台と高台内部は無釉、他には青味がかった釉が塗布されている。所産時期は 13 世紀頃である。

施釉陶器 167・168 は施釉陶器碗の底部である。

167 は、黄色味かかった灰釉を塗布する、瀬戸焼の碗である。外面の一部は露胎する。高台床付面には離れ砂が付着する。15 世紀後半期の製品である。

168 は、灰白色釉を塗布する施釉陶器（志野焼か？）の碗である。底部外面は露胎、内面は薄く施釉する。内面には胎土目が残る。高台内面には、墨書が認められる。高台の内側を一筆描きで輪状に囲み、その中央に文字を記す。欠損部位が多いため判読は難しいが、「介」「光」「花」などが候補としてあげられる。

169・170 は、天目茶碗である。ともに高台とその周辺は無釉、169 は内面には茶褐色～黒褐色の鉄釉を施す。170 は、黄色味がかった灰釉を塗布している。底部内面中央には、ロクロ成形時の粘土塊が突起状に残る。中世後半期の製品である。

中世須恵器 171～175 は、東播系須恵器の鉢である。171 と 173 は、口縁のうち片口にあたる部分の破片である。

陶器 176・177 は、無釉の陶器である。ともに備前焼の播鉢で、大型品である。内面に明瞭な播り目を残す。15～16 世紀の製品である。

染付 178 は、口縁部に段を有する器形を呈する。欠損するが、高台を伴う皿であったと考えられる。口縁部には、やや青みがかった白色釉を塗布する。底部外面は露胎、内面には蛇の目釉剥が認められる。口縁端部内面の一部には、粘土塊が付着する。

179～182 は、碗である。180 は、高台の一部を欠損する。高台の床付面は露胎、他には乳白色の釉が塗布されている。外見には釉溜まりが認められる。181 は、灰色の素地と青みがかった釉薬が特徴的である。底部内面には蛇の目釉剥を残す。高台の床付面は露胎する。釉の塗布は均一ではなく、随所に気泡が認められる。

182 は、外面に淡い水色の絵付けと透明釉を施すが、内面は無釉である。高台床付面は露胎する。釉の一部には、ヒビ割れが認められる。器壁は底面がもっとも薄く、底面から口縁へ変化する箇所がもっとも厚い。内面には、炭が付着していた。

土製品 146・147 は土錘である。146 は、3 分の 1 程度を欠損する。

147 は、表面の摩滅は著しいが、全長をとどめている。前述の土錘も含め、全長 3.8cm、直径 1.0cm を目安に作成された一群であると考えられる。

銭貨 第 25 図 191 は、銅銭「紹聖元寶」である。裏面を一部を欠損するが、ほぼ完形で出土した。表

文字は、やや小ぶりの行書体である。裏文字はない。紹聖元寶は、北宋銭の一種で、1094年（紹聖元年）の初鑄である。

5. 包含層出土の遺物（第5調査区）

第5調査区から出土した遺物のうち、石器は第18・19図（41・42・44・50・206）、土器は第24図（183～188）に掲げた。

サヌカイト切片・剥片 第19図41・42・44は、第5調査区唐出土したサヌカイト製の切片および剥片である。41・42は、打撃面・側面に自然面を残す。44は、薄く割り出した切片の裾に、さらに加工を加えた痕跡が残るが、刃を作るまでには至っていない。

サヌカイト石核 50は、石核であると考えられる。一部に自然面を残すが、多方向から敲打をうけて切片がそぎ取られており、えぐれた三角錐状を呈する。

磨製石器 206は、磨製石器の破片である可能性が高い資料である。両端および背面は欠損しているが、本来は円柱状ないし楕円形の断面をもつ板状品であったと考えられる。残存面には擦痕と切り傷状の線刻がわずかに残る。石材は砂岩質で、断面は濃灰色、風化面は灰白色を呈する。落込み102の上面（中近世包含層）から出土した。

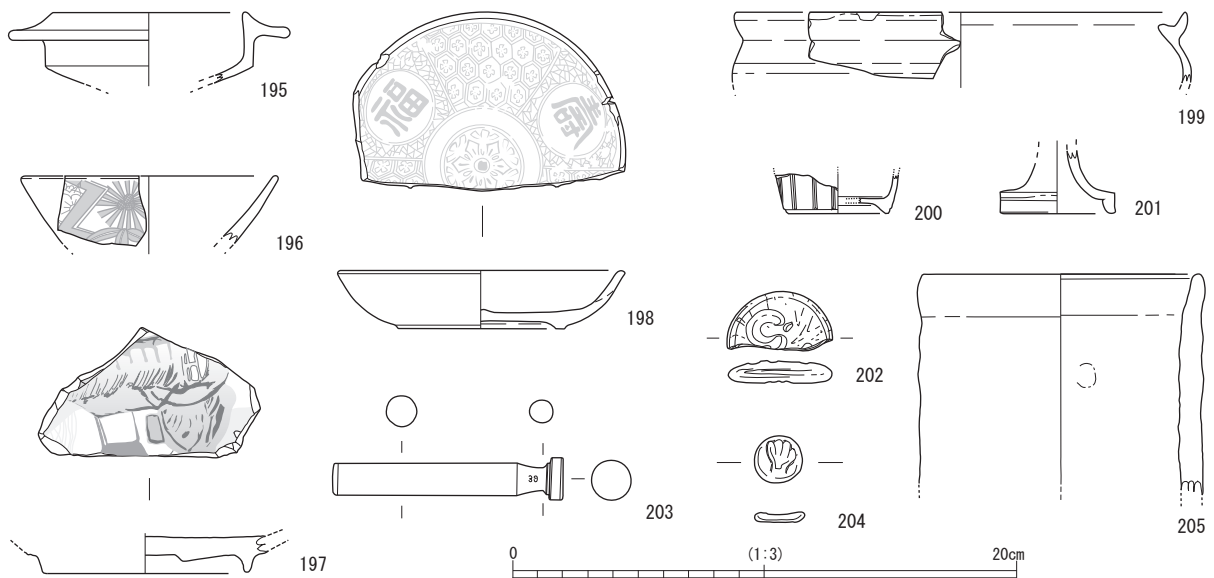
瓦器 183・184は、瓦器碗である。183は、摩滅が著しいが、断面三角形の貼り付け高台が残る。底面内部には暗文の痕跡をわずかに残す。

184は、和泉型瓦器碗の口縁部である。内面にはまばらなミガキを施す。13世紀後半の製品である。

185は、瓦器羽釜の口縁から鏝にかけての部分である。口縁外面にはユビナデによる凹線がめぐる。鏝は破損して残っていない。内面には、1cmあたり7～8本の細かいハケメが施されている。

中世須恵器 186・187は、東播系の須恵器鉢である。186は、口縁部にオリーブ色の自然釉が付着する。また、焼成時の接触によるとみられる、他製品の胎土が付着する。

瓦 188は、軒平瓦である。焼成は甘く、部分的に灰白色の色調を呈する。瓦当面に突起が3点確認できるが、他は欠損のため不明である。落込み102埋土の直上から出土した。



第26図 井戸78出土遺物実測図（近代以降）

第5章 総括

以上、平池遺跡の発掘調査成果について記述した。今回の調査では、古墳時代後期から中世にわたる各遺構面を検出した。また、縄文時代の石鏃をはじめ、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、金属器など、多岐にわたる遺物の出土を確認した。

以下、時代ごとに調査成果を列記し、まとめとしたい。

縄文時代 遺構面からは、石鏃のほか、サヌカイトの切片や剥片が出土した。石鏃は、狩場でも出土するが、サヌカイト剥片は、人間が石器製作をおこなう際に生じるものであることから、当該時期における人的な関与を示唆している。

なお、今回の調査は縄文時代に属する遺構を検出することはできなかった。

弥生時代 わずかではあるが弥生土器の破片が出土した。すべて摩滅をうけており、原位置を保つものではないと考えられる。しかし現時点において、弥生時代の遺構は、調査地周辺では確認されていない。今回の発見は、その存在を予見させる資料である。

古墳時代 古墳時代後期に掘削されたと考えられる溝が検出された（溝6）。この溝は、方位北より西へ75°振った方向を軸として掘削され、ほぼ直角に屈曲して調査区外へと続く。

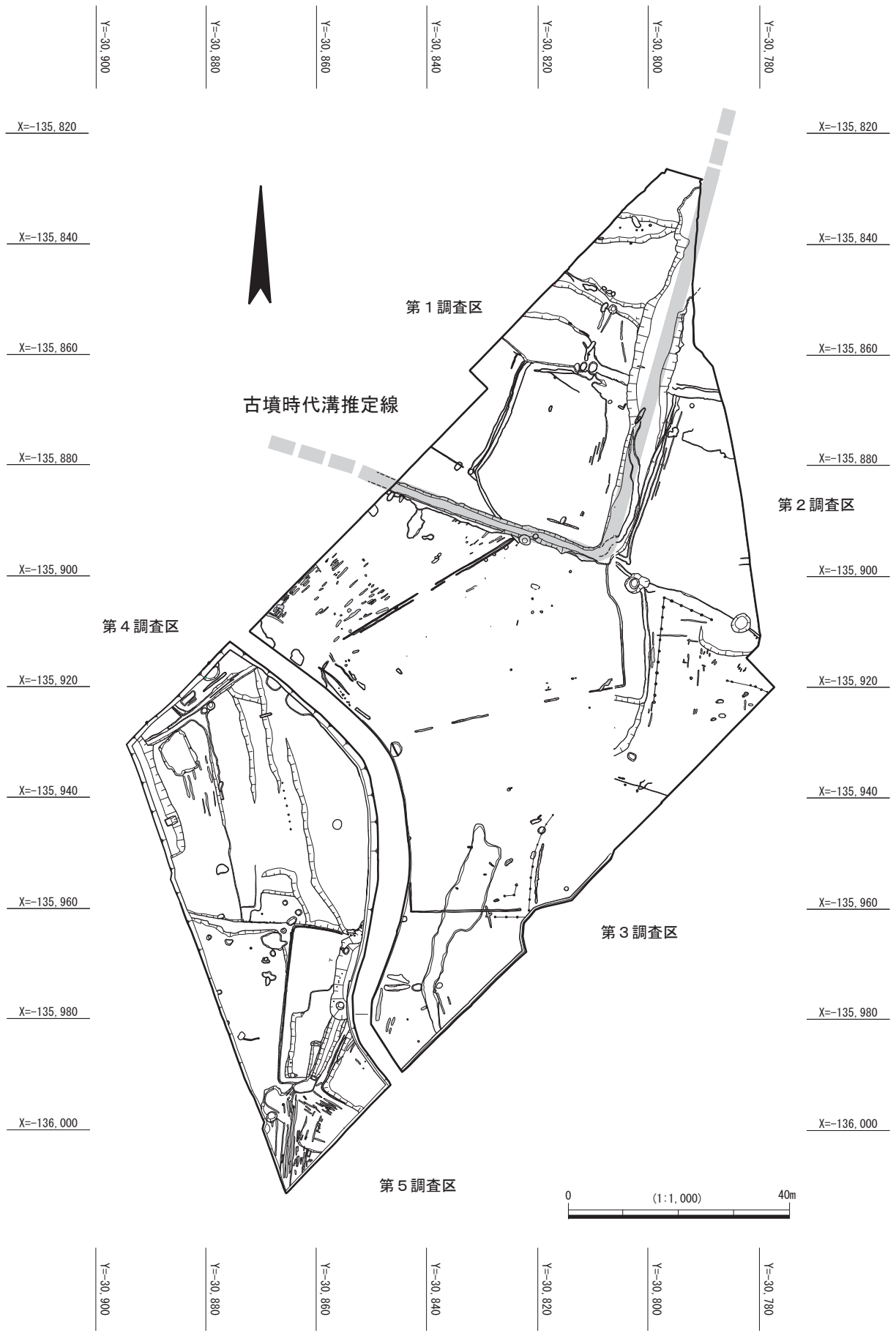
調査地周辺は、南側から張り出した尾根の影響で、南西側が高く、北東方向へむかってなだらかに傾斜する景観を呈している。このため、後世に掘削された水田排水溝は、尾根を中心としては、南西から北東方向、または西から東へ向かって放射状に延びる様相を見せている（第27図参照）。溝6は、これらの方位に即しておらず、地形に沿って掘削されたものではない。

また溝6は、調査区内で約20mの区間において検出されたが、その底面の標高差は0.7cmを測るにとどまっている。また、埋土の堆積状況は、常に流水があった痕跡を残していない。これらのことは、この溝が、用排水を目的としたものではなく、土地の区分を示すために掘削されたものであった可能性を示している。すくなくとも、耕作に伴うような性格の遺構ではないと考えられる。

残念ながら今回の調査では、この溝で方形に分けられた区画内において、明確な遺構を検出できていないため、溝が設けられた意図そのものは解明できていない。ただし、出土遺物のなかに、横瓶や提瓶など特殊な器形が含まれていることは、注目に値する。隣接地における、今後の調査成果が期待されるところである。

中世 中世に属する遺構として、水田とこれに伴う水路（溝）、畦、井戸、土坑などを検出した。出土遺物はおおむね、12世紀後半から15世紀までに製作されたものである。出土量は、13世紀に属するものが最も多い。このことは、当該地において本格的な水田開発がおこなわれはじめた時期と密接に関係するものと思われる。13世紀初頭といえば、全国的に新田開発が活発におこなわれた時代である。文献史料「平清盛書状」にもみえるように、牧が耕地に姿を変えていくのもこの時期である。平池周辺でも、時代の機運に即して、精力的な開墾がなされたものと考えられる。

水田は、地形に沿って棚田状に成形されたようである。ただし、古墳時代に掘削された溝6周辺では、その方向軸が踏襲され、あらたに大溝（溝10）を掘削して、周辺の排水を集めた。このため、溝10付近では、溝10に直交する方向軸で水田が区画されている。



第 27 図 平池遺跡検出遺構全体図

なお、今回の調査では、中世の明確な集落跡を検出するにはいたらなかった。しかし、出土遺物のなかに輸入陶磁器が一定量含まれていること、また銭貨が出土したことなど、活発な流通の恩恵に浴した人々が、この地に起居した可能性は高いとみられる。周辺地域の歴史を語る、貴重な資料である。

近世 中世に引き続き、精力的な水田開発が推進された時期である。今回の調査では、水田耕作に伴う井戸や土坑、溝などを検出した。中世の水田区画を踏襲しつつも、さらに井戸の掘削や水路の整備に力を注ぐ、近世の人々の営みを再確認したといえる。この地域は、丘陵と谷地が入り組む複雑な地形を呈するため、基本的に水田の区画は大きく改変されなかったようであり、中世にはじまった水田区画は、近世を通じて守られ、近代を経て、現代まで引き継がれたと考えられる。

以上、平池遺跡の調査成果について総括を述べた。当初の予想では、中世遺構の検出のみが考えられていたが、予想外にも古墳時代の明確な遺構を検出した。

この地域の歴史を解明する上で、貴重な資料を提示することができたと考えられる。

参考文献

第1章 調査に至る経緯と調査方法

(財)大阪府文化財センター 1997 『三ツ島遺跡』

(財)大阪府文化財センター 2001 『長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群』

(財)大阪府文化財センター 2004 『津田遺跡、東倉治遺跡、茄子作遺跡他』

日本歴史体系第28巻 1986 『大阪府の地名』 平凡社

第2章 調査地周辺の地理と環境

和久田薫・札埜耕三 1995 『星田歴史風土記』 交野市教育委員会・財団法人交野市文化財事業団

影守紀子・中光司・米田昭一 1986 『交野市史 自然編Ⅰ』 交野市史編纂室

水野正好 1992 『交野市史 考古編』 交野市教育委員会

片山長三 1981 『交野市史 交野町略史 復刻版』 交野市史編纂委員会

交野市教育委員会ほか 1987 『清水谷古墳調査概要』

交野市教育委員会 1991 「平成2年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要」『交野市文化財調査概要1991-3』

交野市教育委員会 1995 「平成6年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要」『交野市文化財調査概要』

交野市教育委員会 1996 「平成7年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要」『交野市文化財調査概要』

交野市教育委員会 1997 「平成8年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要」『交野市文化財調査概要1996-1』

交野市教育委員会 2001 「平成12年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要」『交野市文化財調査概要2000-2』

(財)大阪府文化財センター 2002 『讃良郡条里遺跡・小路遺跡・打上遺跡・茄子作遺跡・藤阪大亀谷遺跡・長尾寮跡群・長尾東地区』

(財)大阪府文化財センター 2003 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』

第4章 調査成果

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

掲載遺物一覧表

表 1. 掲載遺物一覧表 (土器・土製品)	50
表 2. 掲載遺物一覧表 (石器・サヌカイト剥片・切片他)	58
表 3. 掲載遺物一覧表 (金属器)	58

表1 掲載遺物一覧表(土器・土製品)

挿図 番号	No.	写真 図版	調査区	地区		層位・遺構	種類	器種	法量()は残存値				
									口径	胴径	底径	器高	最大厚
17	1		1区	9I	4i	溝6下層	須恵器	甕				(5.0)	0.5
17	2		1区	9I	5i	溝6下層	須恵器	横瓶		(6.8)		(17.5)	(1.4)
17	3		1区	8I	10f	溝6上層	須恵器	鉢	29.6			(3.5)	1.1
17	4	6	1区	9I	1j	溝6上層	須恵器	鉢				(4.5)	1.3
17	5		1区	8I	10f	溝6上層	瓦器	皿	8.0			(1.2)	0.4
17	6	6	1区	8I	10f	溝6上層	土師器	皿	8.0			(1.5)	0.6
17	7		1区	9I	1g	溝10上層	土師器	皿	10.4			(1.9)	0.5
17	8	6	1区	9I	1g	溝10上層	瓦器	皿	7.8			(1.1)	0.4
17	9	6	1区	8I	1g	溝10上層	瓦器	椀			4.0	(1.0)	0.5
17	10		1区	9I	4j	溝10下層	瓦器	椀	12.6			(3.1)	0.4
17	11	6	1区	9I	1g	溝10下層	瓦器	椀	12.0			(3.2)	0.5
17	12	6	1区	9I	1g	溝10下層	瓦器	椀	12.0			(3.7)	
17	13	6	1区	9J	3h	溝10下層	瓦器	椀	13.0			(3.4)	0.5
17	14		2区	9I	1i	溝10最下層(溝6)	須恵器	甕					1.5
17	15	6	2区	9I	1g	溝10上層	白磁	碗	(12.2)		7.0	(2.6)	1.8
17	16		2区	9I	4j	溝10上層	陶器	播鉢			10.2	(2.5)	1.9
17	17	6	2区	9I	2j	溝10上層	施釉陶器	碗				(1.8)	
17	18		1区	9I	5i	土坑59	土師器	皿	9.2			(2.2)	0.4
17	19		5区	9J	6j	溝100	瓦器	椀	11.4			3.6	0.5
17	20	6	5区	9J	6j	溝100	白磁	碗			4.2		
17	21		5区	9J	6j	溝100	土師器	皿	12.4			(2.0)	0.41
17	22	6	5区	9J	6h	落込み102上層	瓦質土器	鍋	23.0			(6.3)	0.9
17	23	6	5区	9J	6h	落込み102最下層	陶器	鉢					
17	24	6	5区	9J	6h	落込み102上層	施釉陶器	碗			4.1	(1.2)	1.2
17	25	6	5区	9J	6h	落込み102最下層	白磁	碗			5.0	(1.8)	0.6
17	26	6	5区	9J	6h	落込み102上層	染付	碗	11.0			(3.0)	0.35
17	27	6	1区	9I	10a	土坑77	染付	碗				(3.3)	
17	28	6	1区	9I	10a	土坑77	染付	碗				(2.7)	
17	29	6	1区	9I	2F	土坑77	染付	碗			4.8	(2.0)	1.6
17	30	6	1区	9I	2f	落込み5	施釉陶器	壺	13.0			(2.3)	0.4
20	52		1区	9I	3i	1・2層	弥生土器	甕	32.0			(2.8)	1.1
20	53		1区	9J	5a	1・2層	弥生土器	鉢	8.0			0.9	0.3
20	54		1区	8I	4i	1・2層	須恵器	壺	(8.3)			(2.0)	1.0
20	55		1区	9I	4i	1・2層	須恵器	坏身	8.4			(2.0)	0.5
20	56		1区	9I	1e	1層	須恵器	甕				(6.2)	1.1
20	57	7	1区	9I	2j	1層	土師質	播鉢	16.8			(4.9)	1.3
20	58	7	1区	9I	2j	1層	土師器	皿	(8.0)			5.0	
20	59		1区	9I	2j	1層	土製品	土錘	3.6	4.5			
20	60	7	1区	8I	10f	1・2層	瓦質	三足竈脚部					(2.1)
20	61	7	1区	9I	4j	1・2層	瓦器	椀			4.0	(0.9)	0.5
20	62	7	1区	9I	4j	1・2層	瓦器	椀			4.2	(0.6)	0.5
20	63	7	1区	9I	3j	1・2層	瓦器	椀	11.0			(2.0)	0.4
20	64	7	1区	9I	10t	1層	瓦器	椀	12.0			(3.3)	0.4
20	65	7	1区	8I	10g	1・2層	瓦器	椀	13.2			(3.2)	0.40

色調				胎土	焼成	残存率	時期	備考
外面	内面	断面	素地					
灰	灰白	灰白		◎	◎	10	6C	
灰白～灰	灰白	灰白		○	○	30	古墳時代後期	ロクロ回転後手持ちヘラケズリ
灰	灰	灰		○	○	5	中世前期	東播系須恵器
にぶい黄橙	灰白	浅黄		△	×	10	中世前期	東播系須恵器
灰	灰	灰黄		○	△	15		
橙	橙	橙		△	×	20		
にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙		△	△	10		
灰	灰	灰黄		○	○	10		
浅黄橙	浅黄橙	にぶい黄橙		△	△	5		
灰、灰白	灰	灰白		○	△	5	13C 後葉	大和型
暗灰	暗灰	にぶい黄褐		○	△	10	13C 後葉	
黄橙	灰白、明黄褐	黄橙		○	△	20	13C 中葉	楠葉型
灰白	灰白	灰白、明黄褐		○	△		13C 中葉	大和型
褐灰	オリーブ黒			◎	◎		古墳時代中期	
灰白	灰白	灰白		△	△		14C	白磁碗IV類
明褐灰	灰	灰		△	○	5	近世初頭	
灰白	明オリーブ灰	灰白		◎	◎		近世初頭	
にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	×	10	13～14C	
灰白	灰	灰白		○	○	10	13C 後葉	大和型
淡黄	明オリーブ灰	灰		○	○	10	12～13C	内面に削り残し段あり 白磁碗IV類
黒	灰白	黒		◎	△	10	13C 前葉	
灰	灰	灰白		△	○	5	16C	京都型瓦質焼成土器
にぶい橙	灰	にぶい橙		×○	○	15	14～15C	信楽焼
灰白	灰白	灰白		○	◎	20	13～14C	瀬戸焼 高台内に墨書あり
にぶい黄橙	灰白	灰白		○	○	10	14C	
明緑灰	黄灰、明緑灰	灰白		○	○	10	近世	
灰白				◎	○	20	近世	
灰白				◎	○	30	近世	
明オリーブ灰	明オリーブ灰	灰白		○	○	5	近世	
にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙		○	△	5	近世	
にぶい橙	橙	にぶい橙		△	△	10	弥生時代中期後葉	
褐灰	黄褐			◎	○	5	弥生時代中期後葉	
灰白、灰	灰白	灰白		○	○	5	6C末～7C初	台付壺脚部 (TK43)
浅黄、灰	オリーブ褐	黄灰		○	○	5		焼き歪みあり
灰	灰	灰赤		◎	◎	5		
灰白	にぶい黄橙	灰白		△	○	5		
灰白				○	△	5		
暗灰	灰	淡黄		○	△	5		
灰	灰	灰白		○	△	10		
暗灰	暗灰	灰白		○	○	5		
明黄褐	灰白	灰白		△	△	5		
暗灰	灰白	灰白		○	△	5		大和型
明黄褐	灰白	灰白		○	△	5		大和型
灰白	明黄褐	灰白		○	△	5		大和型

胎土……◎精良 ○やや粗い △粗い ×非常に悪い 焼成……◎堅緻 ○やや甘い △甘い ×不良(生焼け)

挿図 番号	No.	写真 図版	調査区	地区		層位・遺構	種類	器種	法量 () は残存値				
									口径	胴径	底径	器高	最大厚
20	66		1区	9I	4j	1・2層	瓦器	椀	14.0			(2.3)	0.4
20	67	7	1区	9I	4j	1・2層	瓦器	椀	14.0			(2.7)	0.4
20	68		1区	9J	5a	1・2層	瓦器	椀	14.0			(2.0)	0.4
20	69	7	1区	9J	5a	1・2層	瓦器	椀	14.0			2.7	0.4
20	70	7	1区	9J	5a	1・2層	瓦器	椀	11.0			(1.8)	0.4
20	71	7	1区	9J	6a	地山面	瓦器	椀	12.0			(1.8)	1.2
20	72	7	1区	9J	6a	1・2層	瓦器	椀	15.0			3.0	0.25
20	73	7	1区	9I	1g	1・2層	瓦器	椀	14.0			(1.8)	1.3
20	74	7	1区	9J	6c	1・2層	瓦器	椀	15.6			(1.8)	0.9
20	75	9	1区	9I	1g	1・2層	土師器	鉢			15.2	(3.0)	0.8
20	76	8	1区	9I	1g	1・2層	須恵器	鉢	23.8			(2.4)	0.9
20	77	8	1区	9J	7b	1・2層	須恵器	鉢				(2.8)	1.0
20	78	8	1区	9I	1g	1・2層	須恵器	鉢				(2.9)	0.85
20	79	12	1区	9I	2i	1・2層	須恵器	鉢				(3.7)	1.1
20	80	8	1区	8I	10e	1層	須恵器	鉢				(5.1)	1.6
20	81	8	1区	9I	1e	1・2層	須恵器	鉢				(3.2)	1.0
20	82	8	1区	8I	4j	1・2層	須恵器	鉢				(2.8)	1.2
20	83		1区	9I	1h	1・2層	須恵器	鉢				(3.8)	1.3
20	84	8	1区	9J	6b	1・2層	須恵器	鉢				(3.3)	1.5
20	85		1区	9J	7b	1・2層	須恵器	鉢				(3.3)	1.2
20	86	8	1区	9I	1e	1・2層	須恵器	片口鉢				(6.3)	1.4
20	87	8	1区	9I	3j	1・2層	須恵器	鉢			15.7	(3.8)	1.8
20	88	8	1区	9J	6a	1・2層	須恵器	鉢			9.6	(3.4)	1.3
20	89	9	1区	9I	5i	1・2層	陶器	鉢			10.0	(4.8)	
21	90	8	1区	9I	6j	1・2層	青磁	碗				(2.9)	0.4
21	91	8	1区	9I	1f	1層	白磁	皿	10.4			(3.0)	1.0
21	92	8	1区	9J	6a	1・2層	青磁	碗	8.0			1.5	0.8
21	93	8	1区	8I	10f	1・2層	白磁	碗	15.2			(2.0)	0.4
21	94		1区	8J	4a	1・2層	白磁	碗	16.6			(2.8)	
21	95	8	1区	9J	6a	地山面	白磁	碗	15.0			(3.0)	0.6
21	96	8	1区	9I	4y	1・2層	磁器	碗			3.3	(1.1)	
21	97	8	1区	9I	3f	1層	白磁	皿			5.0	(1.9)	
21	98	9	1区	9I	1f	1層	白磁	皿 or 鉢			4.2	(1.9)	0.6
21	99	8	1区	9I	3j	1・2層	白磁	碗			4.2	(2.0)	
21	100		1区	9I	1g	溝 10	青磁	皿	10.0		12.0	2.4	
21	101	8	1区	9J	5a	1・2層	青磁	碗	11.1			(2.1)	0.7
21	102	8	1区	9I	3i	1・2層	青磁	碗			5.9	(2.8)	0.2
21	103	9	1区	9J	6c	1・2層	青磁	碗			5.5	(2.2)	
21	104	8	1区	9I	1e	1・2層	灰釉陶器	碗	13.0			(2.5)	0.85
21	105	9	1区	9I	10e	1層	灰釉陶器	皿			4.4	(1.5)	0.3
21	106	9	1区	8I	10e	1層	灰釉陶器	皿			4.0	(1.0)	0.7
21	107		1区	8I	10f	1・2層	施釉陶器	碗	11.0			(2.0)	1.0
21	108		1区	9J	4a	1・2層	灰釉陶器	鉢			8.8	(2.5)	0.4
21	109	9	1区	9J	6a	1・2層	染付	鉢	18.0			2.6	0.45

色調				胎土	焼成	残存率	時期	備考
外面	内面	断面	素地					
灰白	灰白	灰白		○	△	5	13C	大和型
一	灰白	浅黄橙		△	△	5	13C	大和型
灰	灰	灰白		○	△	10	13C	大和型
灰白	灰白	灰白		△	△	5	13C	大和型
淡黄、黄灰	灰白	灰白		○	×	5	13C	和泉型
浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙		○	△	5	13C	和泉型
灰白	灰白、灰黄褐	灰白		△	△	5	13C	和泉型
灰	灰	灰白		○	△	10	13C	楠葉型
灰白	灰白	灰白		△	△	5	13C	楠葉型
浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙		×	△	5	13C	外面、工具によるケズリ調整
暗青灰、浅青	浅黄	灰白		△	×	5	13C	東播系須恵器
灰、暗灰	灰	灰		△	◎	3		東播系須恵器
灰白、灰	灰	灰		○	○	5		東播系須恵器
青灰	暗青灰、青灰	灰白						東播系須恵器
灰	青灰	灰		△	○			東播系須恵器
灰白	灰	灰		○	○			東播系須恵器
灰、灰白	にぶい赤橙	灰白		△	×			東播系須恵器
にぶい黄橙	灰白	浅黄橙		△	△	5		東播系須恵器
青灰	青灰	青灰		○	○			東播系須恵器
暗灰、灰白	灰白	灰、灰白		△	△	5		東播系須恵器
灰白	灰白	灰白		×	○			東播系須恵器
灰	灰白	灰		○	○	5		東播系須恵器
灰白、灰	灰白	灰白		△	△	5		東播系須恵器
橙	橙、赤橙	橙		△	○	5		信楽焼
灰白	灰白	灰白		○	○	10	14C	竜泉窯系青磁
灰	灰	灰白		○	○	20	14C	竜泉窯系青磁
灰白	灰白	灰白		○	○	10	14C	竜泉窯系青磁
灰白	灰白	灰白		○	○	10	12～13C	
明オリブ灰	灰白	灰白		○	○	10	12～13C	
明オリブ灰	明オリブ灰	灰白		○	○	10	14C	口禿
白	白	白		○	○	10		
灰白、灰黄	灰白	灰白		◎	○		15C前葉	高台に切欠きあり
	灰白	灰白		○	○	10	近世初頭	唐津焼IV期
明緑灰、灰白				○	○	10	近世初頭	唐津焼IV期
明オリブ灰	灰白	灰白		○	○	20	13C後葉	
オリブ灰	オリブ灰	灰白		○	○	5	14C後葉	
灰オリブ	灰オリブ	灰白		○	○	20		
灰オリブ	灰白	灰白	にぶい黄橙	△	△	5		
灰白	灰白	灰白		○	○	15	13C後～14C初	
灰黄	灰黄	灰白		○	○	15		袖ツケガケ
オリブ黄	灰白	灰白		○	○	10		
にぶい橙、淡黄	にぶい褐、淡黄	にぶい橙			○	5	18C	唐津焼（刷毛目唐津）
灰白	灰白、灰黄	灰白		◎	◎	5		
灰白	青	灰白		○	○	5		

胎土……◎精良 ○やや粗い △粗い ×非常に悪い

焼成……◎堅緻 ○やや甘い △甘い ×不良（生焼け）

挿図 番号	No.	写真 図版	調査区	地区		層位・遺構	種類	器種	法量()は残存値				
									口径	胴径	底径	器高	最大厚
21	110	9	1区	8I	10e	1層	染付	碗	9.6			(3.0)	0.35
21	111	9	1区	9I	2g	1層	染付	碗	9.7			(2.8)	0.3
21	112	9	1区	8I	10g	1・2層	染付	碗	11.0			(3.0)	1.4
21	113	9	1区	9I	1h	1・2層	染付	碗	11.8			(2.5)	0.5
21	114		1区	9J	4a	1・2層	染付	碗			6.8	(2.0)	0.55
21	115		1区	9I	2g	1・2層	染付	鉢	17.0			(2.3)	1.0
21	116	9	1区	9I	2e	1・2層	染付	鉢			8.6	(2.2)	1.6
21	117	9	1区	9I	2g	1層	染付	碗			4.8	(1.8)	1.8
21	118	9	1区	9I	1f	1・2層	染付	碗			4.4	(2.9)	0.45
21	119	9	1区	9I	1f	1・2層	染付	碗			5.2	(2.1)	0.35
21	120	9	1区	9I	2g	1層	染付	湯呑	6.0			(3.8)	(2.0)
21	121	9	1区	8I	10g	1・2層	染付	湯呑			6.6		1.15
21	122		1区	9I	1e	1・2層	陶器	甕	36.2			(3.3)	1.6
21	123	9	1区			機械掘削層	陶器	播鉢	19.3			(5.0)	1.3
21	124	9	1区	8I	10g	1・2層	陶器	播鉢			12.4	(3.8)	1.3
21	125	9	1区	9I	1h	1・2層	瓦質土器	播鉢			13.0	(2.8)	
21	126		1区	9J	5a	1・2層	瓦質土器	火鉢				(7.0)	
21	127		1区	9I	2g	1層	瓦	軒平瓦					0.4
22	128	10	2区	9I	1j	側溝	弥生土器	鉢			3.4	(3.4)	0.3
22	129	10	2区	9I	1h	1層 溝10上面	瓦器	椀	12.0			(2.5)	0.9
22	130	10	2区	9I	1i	1層	瓦器	椀	14.0			(3.0)	1.0
22	131	10	2区	9I	1i	1層	瓦器	羽釜				(3.5)	0.7
22	132	10	2区	8I	10j	1層	瓦質土器	鉢				(3.6)	
22	133	10	2区	8I	10j	1層	青磁	皿			4.0	(1.1)	1.5
22	134	10	2区			1層	青磁	碗	13.0			(4.3)	1.5
22	135	11	2区	9J	1b	1層	白磁	碗			3.8	(2.3)	0.4
22	136		2区	9J	1a	1層	施釉陶器	碗			4.2	(1.9)	0.9
22	137	10	2区	9I	1j	1層	土師器	皿	11.0			(2.1)	1.4
22	138	10	2区	9I	1i	1層	須恵器	鉢	27.6			(6.0)	1.1
22	139	10	2区	8I	10j	1層	須恵器	鉢				(4.3)	0.9
22	140	10	2区	9J	1c	1層	土師器	鍋				(2.9)	0.8
22	141	11	2区	9I	1i	1層	陶器?	甕	20.0			(3.8)	0.9
23	142	12	3区	9J	4e	1・2層	須恵器	提瓶	5.6			(4.6)	
23	143	12	3区	9J	5f	1・2層	須恵器	甕	(19.0)			(6.5)	0.4
23	144	11	3区	9J	5i	1・2層	土師器	皿	8.0			1.3	
23	145	11	3区	9J	3g	1・2層	土師器	皿	5.4			(1.5)	
23	146		3区	9J	3g	1・2層	土製品	土錘	(3.2)				
23	147		3区	9J	3g	1・2層	土製品	土錘	3.0				
23	148	11	3区	9J	4g	1・2層	瓦質	三足竈脚部					1.4
23	149	11	3区	9J	3f	1・2層	瓦質	三足竈脚部					2.1
23	150	11	3区	9J	4h	1・2層	瓦器	皿	9.0			1.1	0.5
23	151	11	3区	9J	4h	1・2層	瓦器	椀	14.0			(3.4)	0.5
23	152	11	3区	9J	5i	1・2層	瓦器	椀	13.6			(2.3)	0.4
23	153	11	3区	9J	3f	1・2層	瓦器	椀	13.6			(3.0)	0.4
23	154	11	3区	9J	5i	1・2層	瓦器	椀	16.0			(2.8)	0.4

色調				胎土	焼成	残存率	時期	備考
外面	内面	断面	素地					
灰白	灰白	灰白		○	○		近世後期	
灰白	灰白	白		○	○	5	近世後期	
明緑灰	明緑灰				○		近世後期	
灰白	灰白	灰白		○	○	10	近世後期	
灰白	灰白, 灰黄褐	灰白		○	○		近世後期	
淡黄	淡黄	浅黄		○	○		近世後期	
灰白	灰白	灰白		○	○	10	18C	
灰白	灰白	白		○	○	10		
明オリーブ	明オリーブ灰	灰白	浅黄橙	○	○		18C	
明緑灰	明緑灰	灰白		○	○			
灰白	灰白	灰白			○			
灰白、暗オリーブ灰	灰白	灰白		◎	◎			
にぶい橙、明青灰	青灰	明褐、にぶい橙		○	△		14C 中葉	信楽焼
にぶい赤褐	にぶい橙	にぶい橙		○	△	5	14 ~ 15C	備前焼
灰褐	にぶい褐	灰白		△	△	5	14 ~ 15C	備前焼
灰	灰黄褐	淡橙		○	○	10	15C 後 ~ 16C 初	
淡橙	橙			△	△		15C	奈良型瓦質焼成土器
灰		灰白		△	△			
浅黄橙	黄橙	浅黄橙		○	○	25	弥生時代後期	底部に穿孔あり
灰	灰, 明黄褐	灰白		△	○	10	13C	大和型
暗灰	灰	灰白		○	△	10	13C	大和型
灰		灰白		△	△	2	15C	
暗灰, 灰白	灰白	灰白		△	△	5	15C	
明オリーブ灰	緑灰, 明オリーブ灰	灰白		◎	○		13C 前	
明緑灰		灰		○	○	5	15C	
灰白	灰白	灰白		◎	◎	15	14C	胎土に黒色点あり
にぶい黄	にぶい黄	浅黄		◎	◎			
灰白	灰白	灰白		△	×			
灰白, 褐灰	明紫灰	灰		○	○	5	12C 末 ~ 13C 中	東播系須恵器
灰	灰	灰		○	○	5	12C 末 ~ 13C 中	東播系須恵器
黒、にぶい黄褐	灰黄	灰黄		○	○	5		煤、炭化物付着あり
灰白, 灰黄	灰白, にぶい黄橙	灰白		○	◎			
明青灰	灰白	にぶい橙、灰白		○	◎		6C 後	TK43 古相
青灰	灰、灰白	赤灰		○	△	3		側面にも自然釉付着。失敗作?
灰白	浅黄橙	浅黄橙		○	○		13C	
灰白	黄	灰白		△	×	40	13C	
にぶい黄橙		浅黄		○	△	50		
にぶい黄橙		浅黄		○	△	90		
灰白、橙		灰白		△	○	5		
灰白、黄灰		浅黄橙		△	○	5		
灰	灰白、灰	灰白		○	○	80		
灰	暗灰	灰白		○	○	10	13C 後半	楠葉型
灰	明褐	灰白		△	△	20	13C	大和型
暗灰	灰、灰白	灰白		○	○	10	13C	大和型
灰	暗灰	灰白		△	○	5	13C	和泉型

挿図 番号	No.	写真 図版	調査区	地区		層位・遺構	種類	器種	法量()は残存値				
									口径	胴径	底径	器高	最大厚
23	155	12	3区	9J	3e	1・2層	瓦器	椀	12.8			(3.1)	0.4
23	156	11	3区	8I	10g	1・2層	瓦器	椀	7.0			(1.6)	0.35
23	157	11	3区	9J	5i	1・2層	瓦質土器	鉢				(3.8)	0.8
23	158	11	3区	9J	2a	1・2層	瓦質土器	鉢	28.4			(5.0)	1.0
23	159	11	3区	9J	3e	1・2層	瓦質土器	土製円板					0.9
23	160	10	3区	9J	5d	1・2層	白磁	皿			4.4	(1.0)	1.5
23	161	10	3区	9J	4c	1・2層	青磁	碗			4.6	(2.4)	1.5
23	162	10	3区	9I	2j	1・2層	青磁	碗	16.0			(3.5)	1.3
23	163	10	3区	9J	3d	1・2層	青磁	碗	14.7			(3.2)	0.45
23	164	10	3区	9J	5g	1・2層	青磁	碗	14.8			(2.8)	2.0
23	165	10	3区	9J	3e	1・2層	青磁	碗	16.0			(5.7)	0.7
23	166	10	3区	9J	3f	1・2層	青磁	碗			5.4	(1.6)	1.4
23	167	12	3区	9J	2d	1・2層	灰釉陶器	碗			4.6	(2.5)	1.0
23	168	11	3区	9J	4c	1・2層	施釉陶器	碗			5.2	(2.3)	1.0
23	169	11	3区	9J	5d	1・2層	施釉陶器	碗			4.6	(1.9)	1.5
23	170	11	3区	9J	4e	1・2層	施釉陶器	碗			4.6	(2.0)	1.4
23	171	12	3区	9J	5g	1・2層	須恵器	鉢				(3.9)	0.6
23	172	12	3区	9J	2a	1・2層	須恵器	鉢				(3.2)	1.0
23	173	12	3区	9J	2a	1・2層	須恵器	鉢				(3.5)	1.0
23	174	12	3区	9J	4d	1・2層	須恵器	鉢				(3.0)	1.1
23	175	12	3区	9J	5d	1・2層	須恵器	鉢	25.0			(2.7)	1.0
23	176	11	3区	9J	4h	1・2層	陶器	擂鉢	30.0			(5.7)	1.5
23	177		3区	9J	4c	1・2層	陶器	擂鉢	31.4			(4.1)	0.4
23	178	10	3区	9J	4e	1・2層	染付	皿	15.2			(1.6)	0.8
23	179	11	3区	9J	5i	1・2層	染付	碗	9.6			(3.2)	1.0
23	180	11	3区	9J	3f	1・2層	染付	碗			5.0	(2.7)	1.4
23	181	11	3区	9J	3f	1・2層	染付	碗			4.4	(2.3)	1.1
23	182	11	3区	9J	3d	1・2層	染付	碗			6.2	(3.3)	
24	183		5区	9J	6i	1・2層	瓦器	椀			2.0	1.3	
24	184	1	5区	9J	6i	1・2層	瓦器	椀	14.0			3.6	
24	185	12	5区	9J	6i	1・2層	瓦質	羽釜				(6.0)	
24	186	12	5区	9J	7j	1・2層	須恵器	鉢	27.2			(3.6)	0.45
24	187	12	5区	9J	7j	1・2層	須恵器	鉢				(3.7)	
24	188		5区	9J	6h	1・2層 落込102上層	瓦	軒平瓦					0.6
25	195	7	5区	8J	9a	井戸78	施釉陶器	蓋				(2.8)	
25	196	7	5区	8J	9a	井戸78	染付	碗	10.2			(2.7)	
25	197		5区	8J	9a	井戸78	染付	鉢					
25	198	7	5区	8J	9a	井戸78	染付	皿	11.4		6.6	2.3	
25	199	7	5区	8J	9a	井戸78	施釉陶器	土瓶					0.9
25	200		5区	8J	9h	井戸78	施釉陶器	猪口			3.8	(2.0)	
25	201	7	5区	8J	9a	井戸78	青磁	花瓶					
25	202	7	5区	8J	9a	井戸78	ガラス製	箸置き					
25	203	7	5区	8J	9a	井戸78	ガラス製	注射器					
25	204		5区	8J	9a	井戸78	ガラス製	おはじき					
25	205	7	5区	9J	6g	井戸78	瓦質土器	筒型製品	11.0			(8.7)	

色調				胎土	焼成	残存率	時期	備考
外面	内面	断面	素地					
明黄褐、灰白	明黄褐、灰白	明黄褐、灰白		○	○	5	13C 後～14C 初	大和型
にぶい橙、灰白	灰、明黄褐	明黄褐、浅黄		○	○	10	14C	和泉型
灰	灰白	灰白		△	△	5	16C 前	
灰	灰	灰白		○	○	5	16C 前	
灰、灰白	灰、灰白	灰白		○	○			再加工品
灰白	灰白	灰白、明黄褐		○	○	20	15C 前	
オリーブ灰	オリーブ灰	灰白		◎	◎	10	14C	
オリーブ黄	オリーブ黄	灰白		◎	◎	10	14C	
灰オリーブ	灰オリーブ	灰白		○	○	5	14C	
オリーブ灰	オリーブ灰	灰白		◎	◎	5	14C	
灰オリーブ	灰オリーブ	灰白		○	○	5	13C 末～14C 前	龍泉窯系青磁碗
緑灰	明緑灰	灰白		○	○	5	12C 後～13C	同安窯系青磁碗
灰白、にぶい黄橙	灰白	灰白		◎	◎	5	15C 後	瀬戸焼
灰白	灰白	灰白		○	◎	10	15C 後	志野焼？ 底部外面に墨書あり
暗赤褐、灰白	黒褐、にぶい赤褐	灰白		○	○	10	15C～16C	天目茶碗
灰白	灰黄	灰白		◎	◎	10	15C～16C	天目茶碗
灰白	灰白	灰		○	○	5	13C	東播系須恵器
灰白、黒	灰白	灰		△		5	13C 前	東播系須恵器
灰白、灰	灰白	灰白		○	○	5	13C 前	東播系須恵器
黄灰、灰白	灰白	灰		△	○	5	13C 後～14C	東播系須恵器
灰	灰	灰		△	○	5	13C 後～14C	東播系須恵器
黄灰、赤灰	灰赤	灰赤		△	○	5	14C 前～15C 末	備前焼
浅黄橙	赤灰			◎	◎	5	14C 前～15C 末	備前焼
灰白	灰白	灰白		◎	◎	5	16C	
明緑灰	明緑灰	灰白		○	○	10		
灰	灰	灰白		◎	◎	5		
明緑灰、青灰	明緑灰、灰白	灰白		◎	◎	5		
灰白	灰白	灰白		◎	◎	5		内面に煤付着
黒	オリーブ黒	明黄褐、灰白		○	○	5		
黄灰、浅黄	黄灰、灰白	灰白		○	○	5	13C 後	和泉型
灰白、灰	明黄褐、オリーブ黒	明黄褐、灰白		△	△	5		
灰白、灰	灰白	灰白				5		東播系須恵器
明青灰、灰	青灰	青灰		△	○	5		東播系須恵器
灰	灰黄	淡黄		△	△	5		
淡黄				○	○	30	近現代	瀬戸焼
灰白				○	○	20	近現代	
灰白				◎	◎	10	近現代	
灰白	灰白	灰白		○	○	50	近現代	
灰白				◎	○	10	近現代	
淡黄	淡黄	灰白				20	近現代	
灰白				○	○	40	近現代	
						50	近現代	
						100	近現代	
						100	近現代	
にぶい黄橙	褐灰	にぶい黄橙		△	△	?	近世?	

表2 掲載遺物一覧表（石器・サヌカイト剥片・切片他）

挿図 番号	No.	写真図版	調査区	地区		層位・遺構	石材	器種	法量 (cm)			時期	備考
									最大長	最大幅	最大厚		
17	31	12	5区	9J	6h	落込み 102	凝灰岩	?	15.6	14.0	5.4	中世?	
18	32	13	1区	7I	10e	地山上面	サヌカイト	石鏃	(2.7)	1.7	0.4	縄文	
18	33	13	1区	8I	5i	1・2層	サヌカイト	石鏃	2.6	1.9	0.4	縄文	
18	34	13	3区	9J	4e	地山上面	サヌカイト	石鏃	4.5	2.4	0.6	弥生	平基式
19	35	13	1区	8J	5a	1・2層	サヌカイト	剥片	3.0	1.8	0.3		
19	36	13	1区	8I	2g	1層	サヌカイト	剥片	2.7	3.5	1.0		
19	37	13	1区	8I	1c	1層	サヌカイト	剥片	3.0	2.2	0.7		
19	38	13	1区	7I	10e	1層	サヌカイト	剥片	3.4	2.8	0.9		
19	39	13	3区	9J	3e	1層	サヌカイト	剥片	2.8	3.1	0.6		
19	40	13	2区	8J	10c	2層	サヌカイト	剥片	4.3	3.4	1.0		風化顕著
19	41	13	5区	9K	6a	1・2層	サヌカイト	剥片	4.4	2.4	1.2		
19	42	13	5区	9J	6g	1・2層	サヌカイト	剥片	4.5	4.8	1.0		
19	43	13	1区	8I	2i	1層	サヌカイト	切片	6.5	4.7	1.7		
19	44	13	5区	9K	7a	1・2層	サヌカイト	剥片	4.2	4.0	0.7		
19	45	13	3区	9J	5g	土坑 147	サヌカイト	切片	5.0	4.0	0.7		
19	46	13	3区	9J	2c	1層	サヌカイト	切片	4.9	3.0	1.5		楔形
19	47	13	1区	8I	1c	1層	サヌカイト	剥片	4.5	5.3	1.3		二次加工あり
19	48	13	3区	9J	3f	1・2層	サヌカイト	剥片	3.2	3.2	1.2		二次加工あり
19	49	13	1区	9J	1c	1層	サヌカイト	剥片	2.6	3.7	0.8		二次加工あり
19	50	13	5区	9J	6i	1・2層	サヌカイト	石核	6.0	3.2	2.2		
19	51	13	2区	8J	10d	1層	サヌカイト	切片	7.5	4.5	1.5		二次加工あり
18	206	13	5区	9J	6h	地山上面	砂岩	磨製石器	7.0	3.7	1.0		

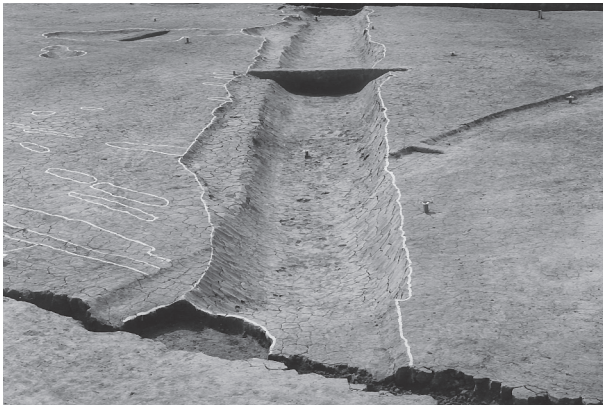
表3 掲載遺物一覧表（金属器）

挿図 番号	No.	写真図版	調査区	地区		層位・遺構	種類	器種	法量 (cm)			時期	備考
									最大長	最大幅	最大厚		
25	189	14	1区	7I	10e	1・2層	銅貨	「開元通寶」	2.6	2.6	0.2	初鑄 621年	唐銭
25	190	14	2区	8J	10a	1層	銅貨	「元祐通寶」	2.4	2.4	0.15	初鑄 1086年	北宋銭
25	191	14	3区	9J	4e	1・2層	銅貨	「紹聖元寶」	2.3	2.3	0.15	初鑄 1094年	北宋銭
25	192	14	1区	8I	4j	1・2層	鉄製品	釘 or 鏃	5.1	0.7	0.6		
25	193	14	2区	8J	10a	1層	鉄製品	釘 or 鏃	7.3	0.7	0.7		
25	194	14	2区	8J	10a	1層	鉄製品	鏃先	8.2	7.6	1.8		

写 真 图 版



1. 第1調査区遺構面全景（東から）



2. 溝6完掘状況（北から）



3. 溝10完掘状況（南から）



4. 土坑1完掘状況（北から）



5. 石鍬(32)出土状況

写真図版 2



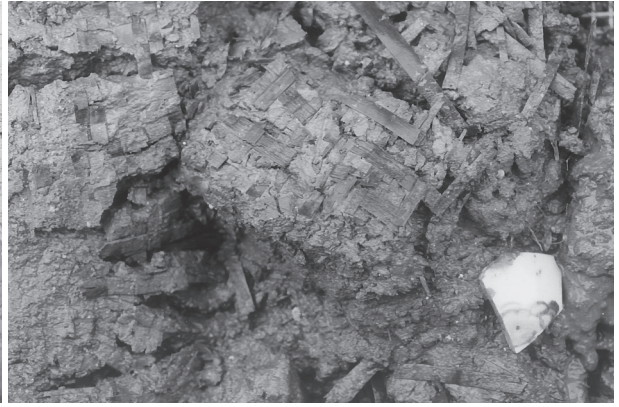
1. 第2調査区遺構面全景（西から）



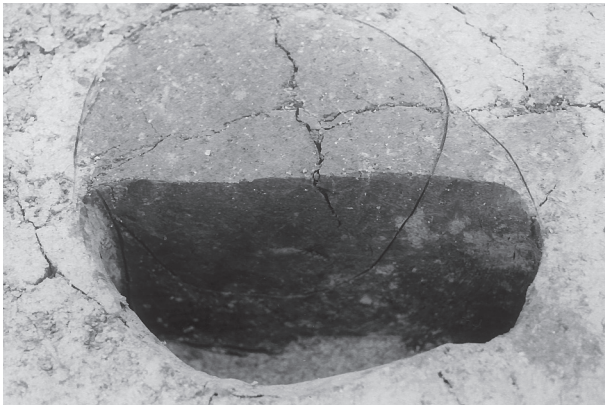
2. 第2調査区遺構面全景（北から）



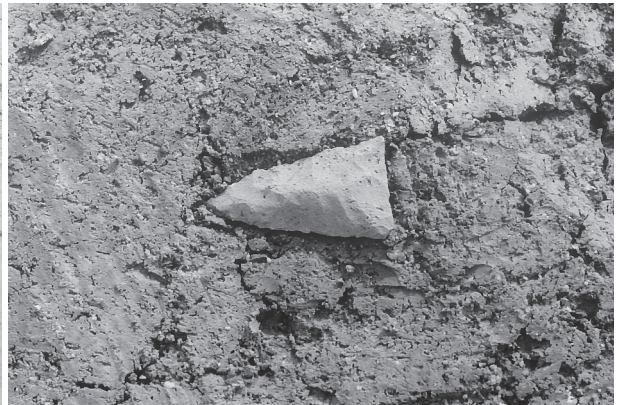
1. 土坑 136 断割り状況



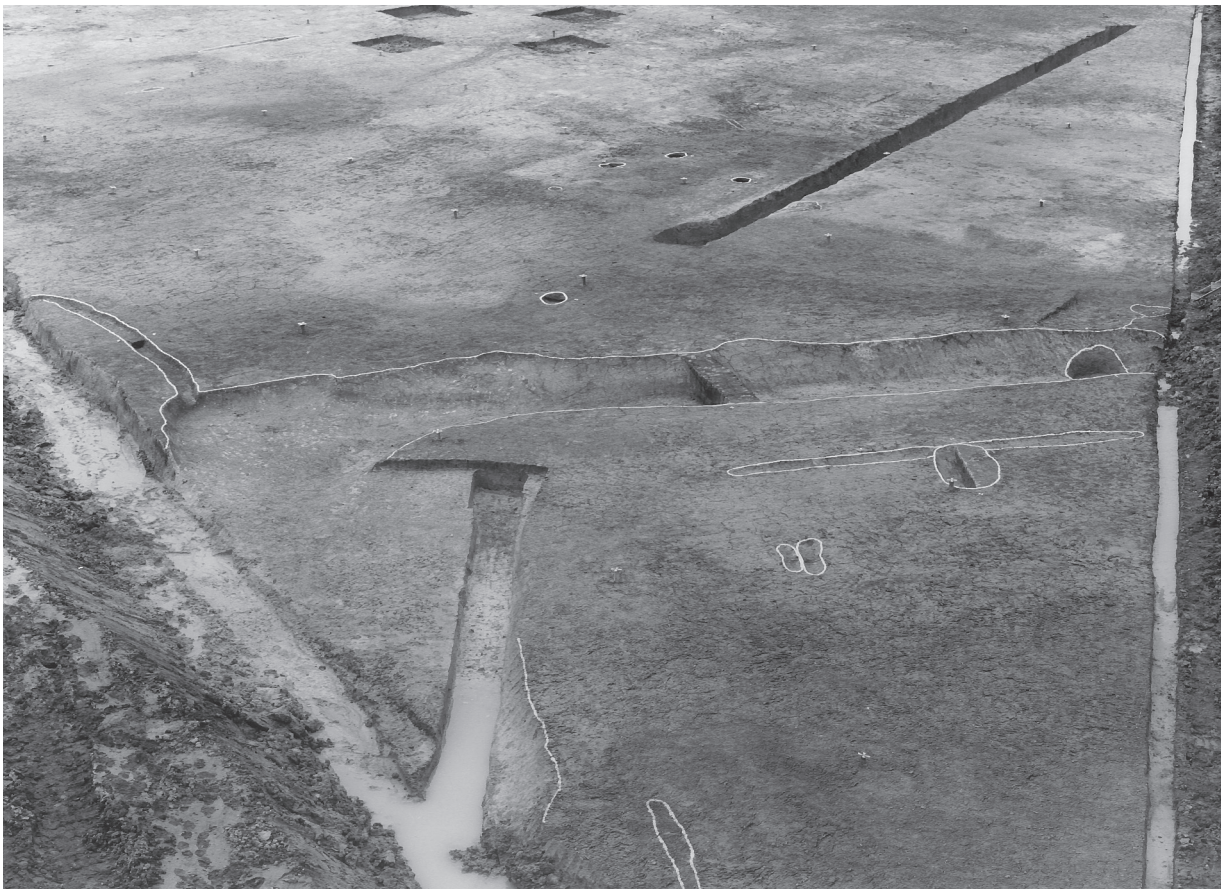
2. 井戸 78 編籠出土状況



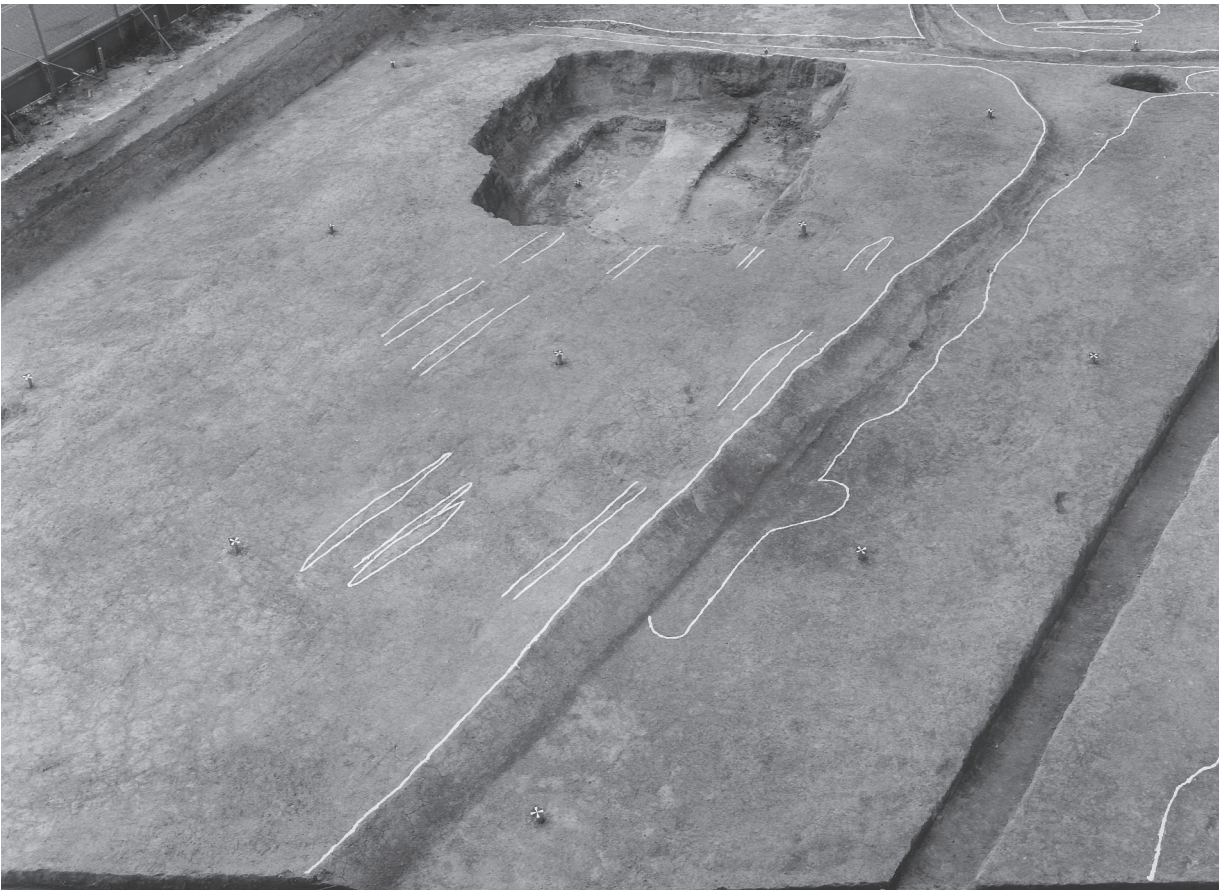
3. ピット 148 断割り状況



4. 石鏃 (34) 出土状況



5. 第3調査区遺構面全景 (南東から)



1. 第4調査区遺構面全景（南から）



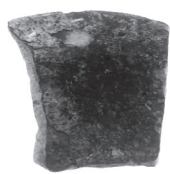
2. 第5調査区遺構面全景（南から）



1. 第5調査区遺構面全景（北から）



2. 第5調査区落込み 102 完掘状況（北から）



13



12



8



6



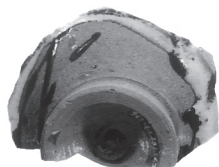
11



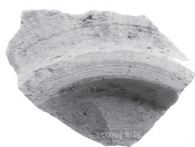
4



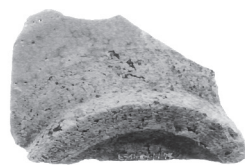
9



17

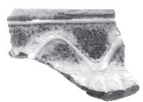


20

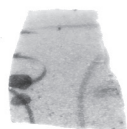


15

1. 遺構内出土遺物 (溝 6・溝 10)



30



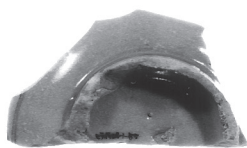
26



25



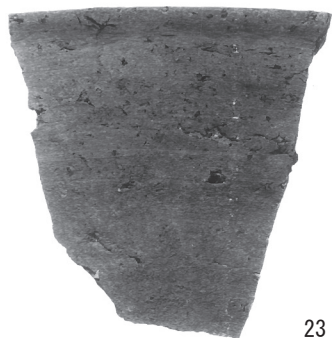
28



27



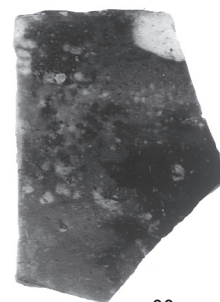
29



23



24

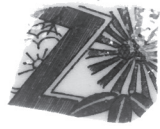


22

2. 遺構内出土遺物 (溝 100・土坑 77・落込み 102)



198



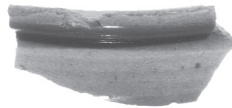
196



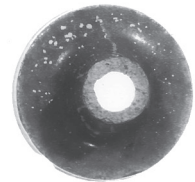
195



205



199



201



203



202

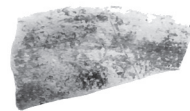
1. 遺構内出土遺物 (井戸 78)



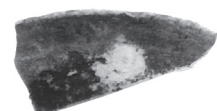
58



70



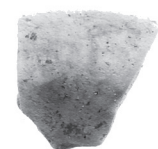
74



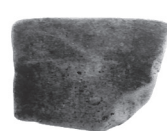
71



64



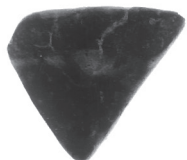
73



67



63



66



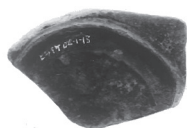
72



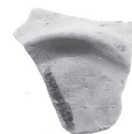
65



69



61



62

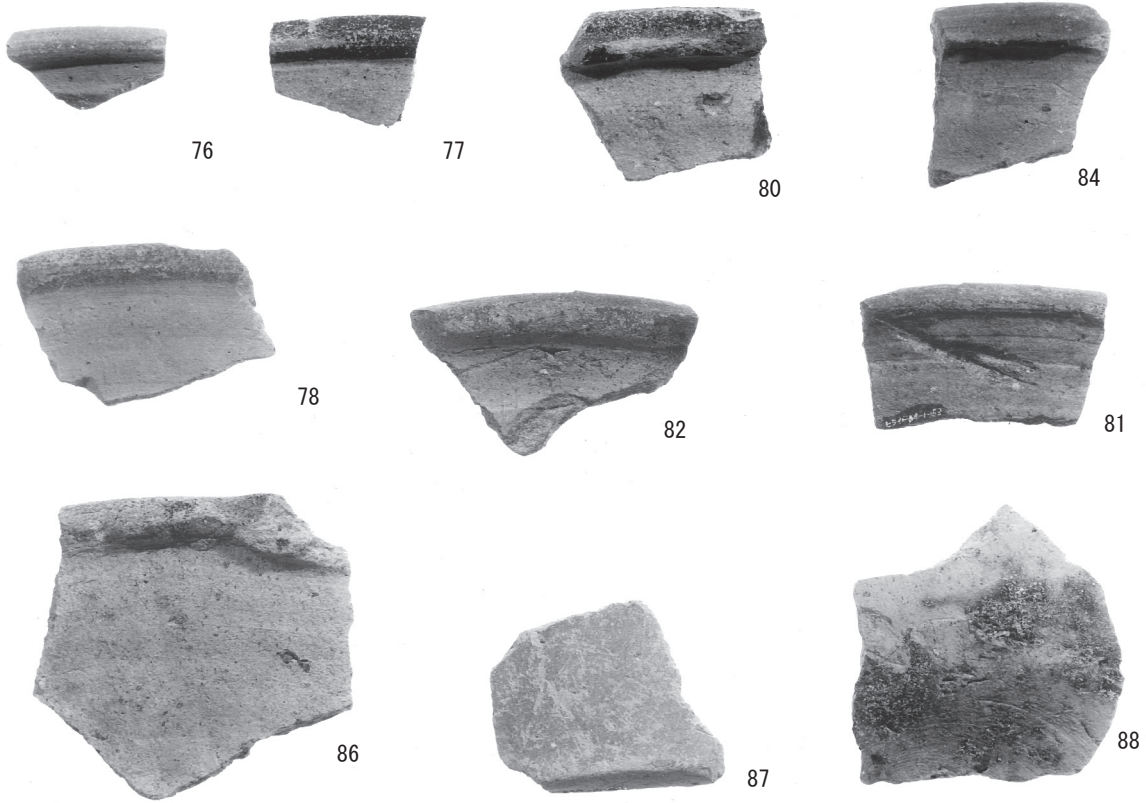


57

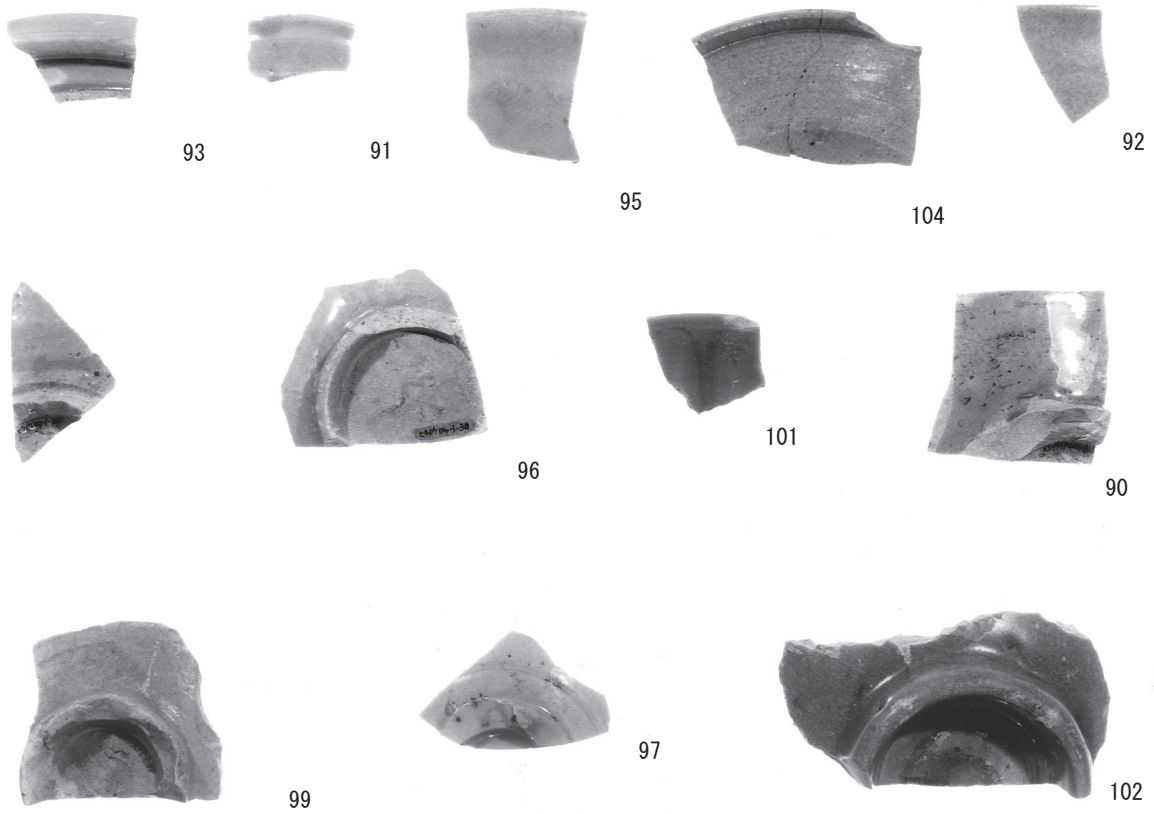


60

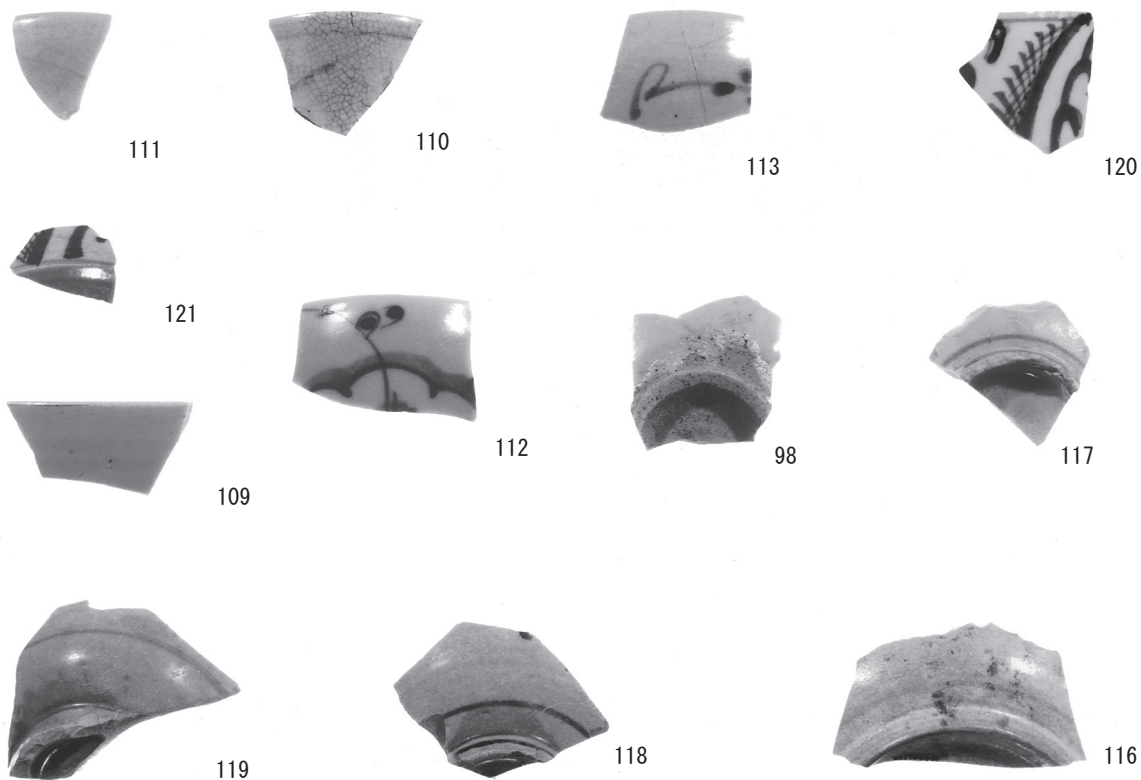
2. 包含層出土遺物



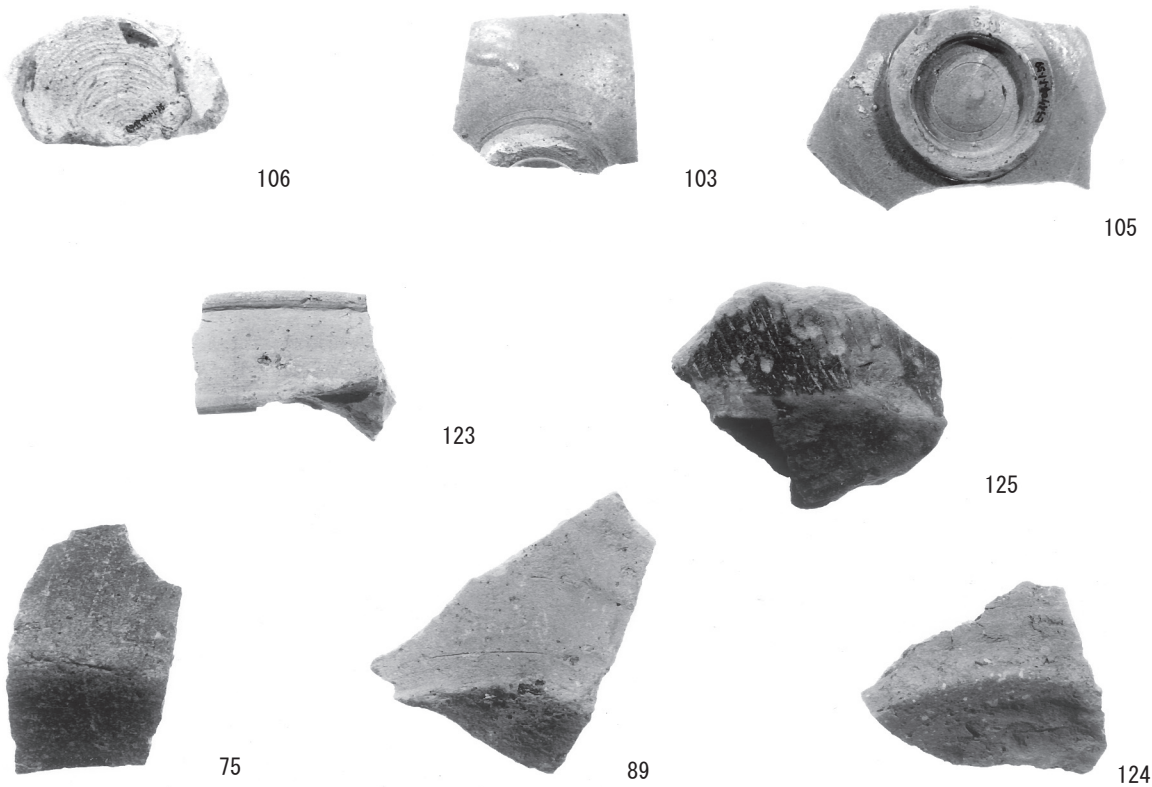
1. 包含層出土遺物



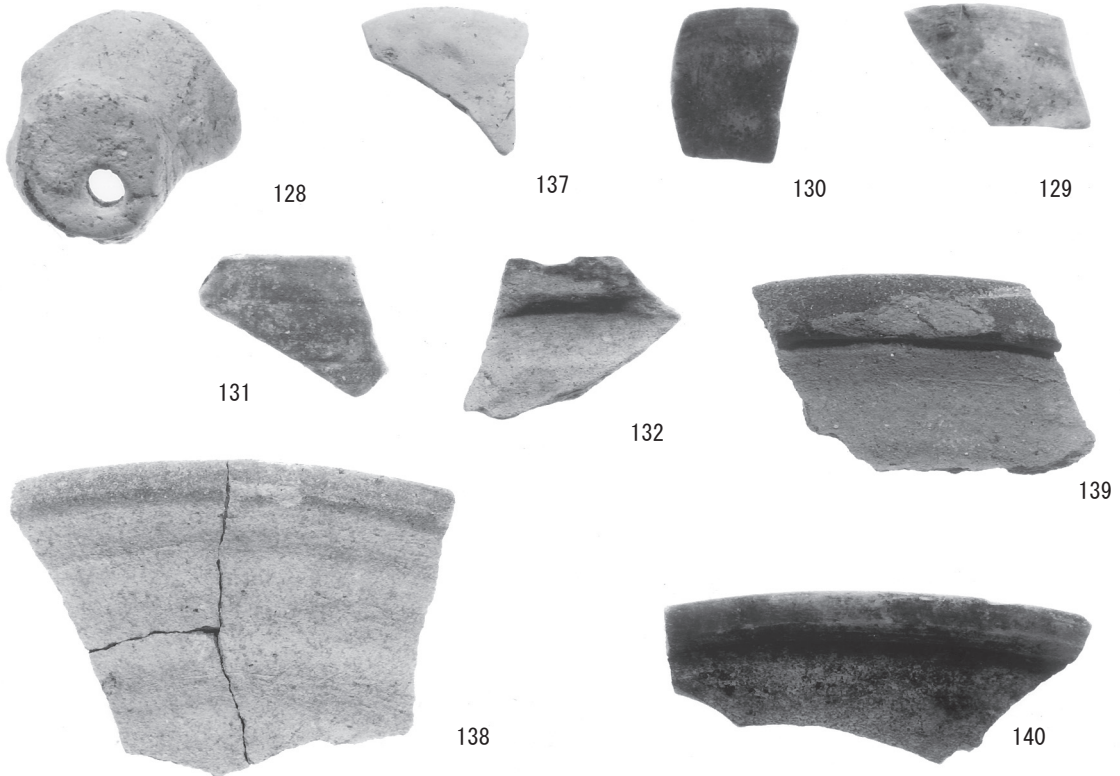
2. 包含層出土遺物



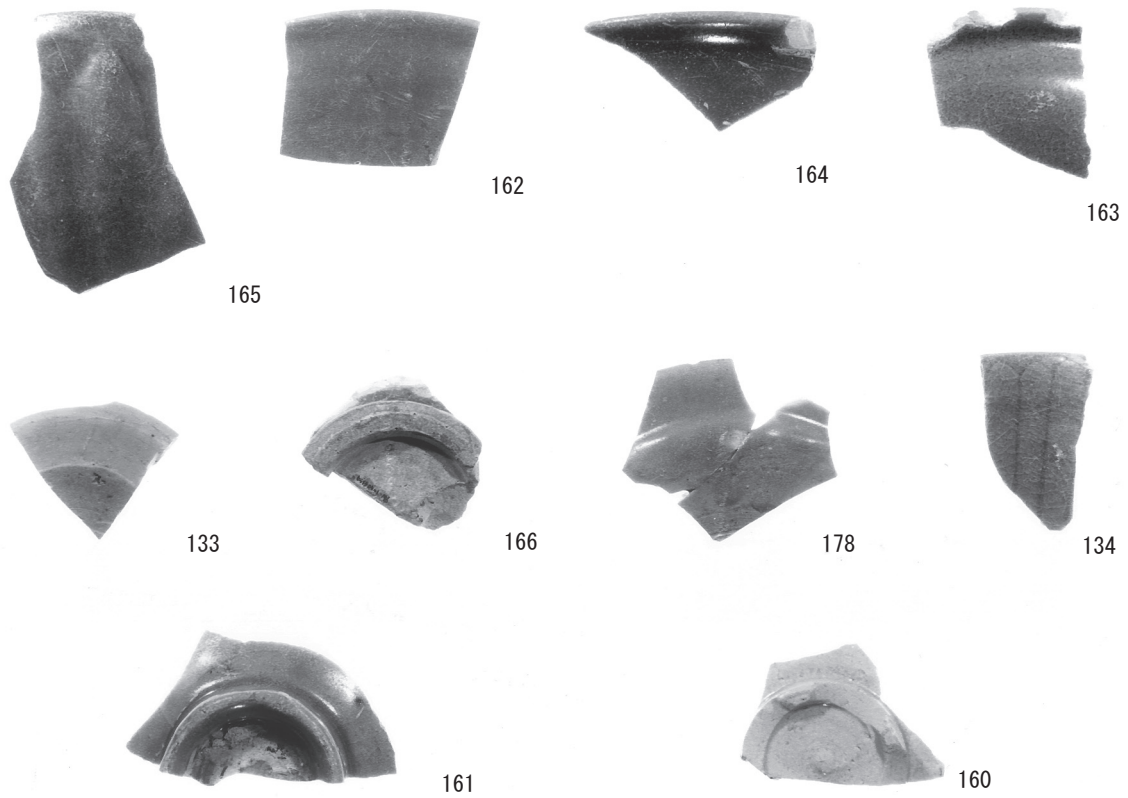
1. 包含層出土遺物



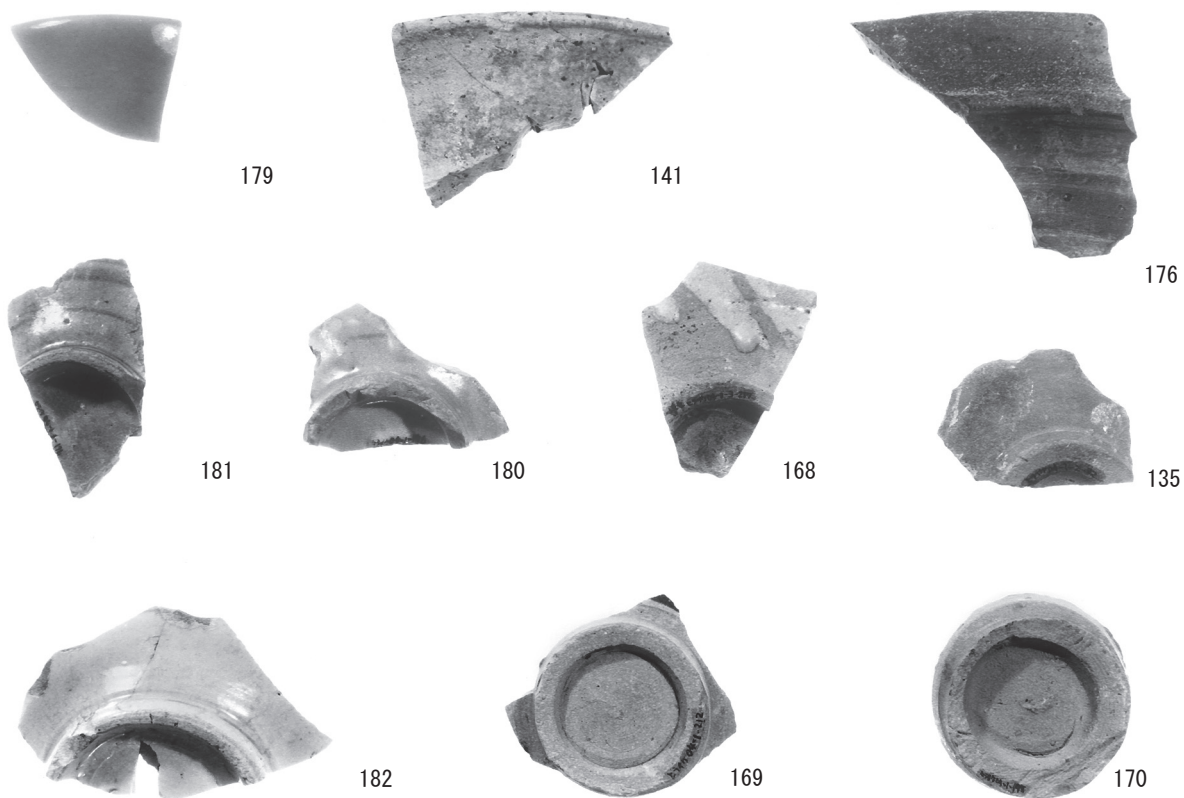
2. 包含層出土遺物



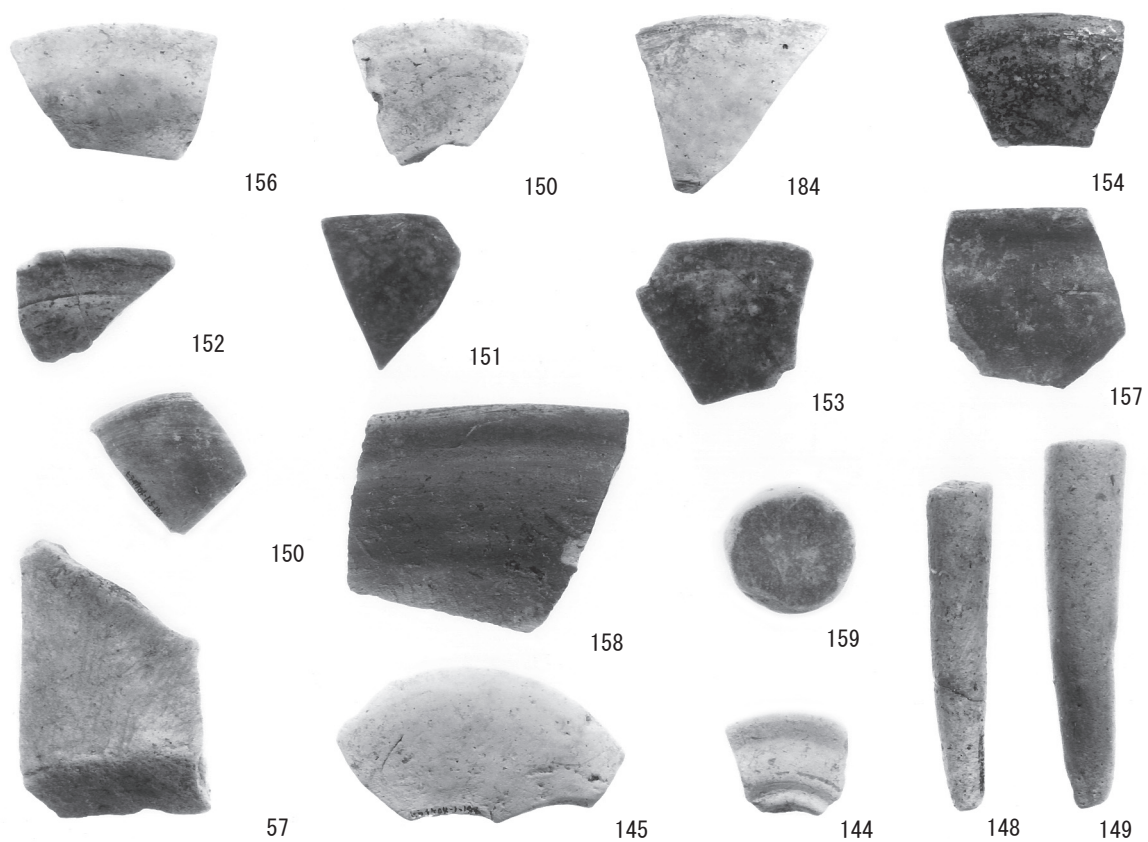
1. 包含層出土遺物



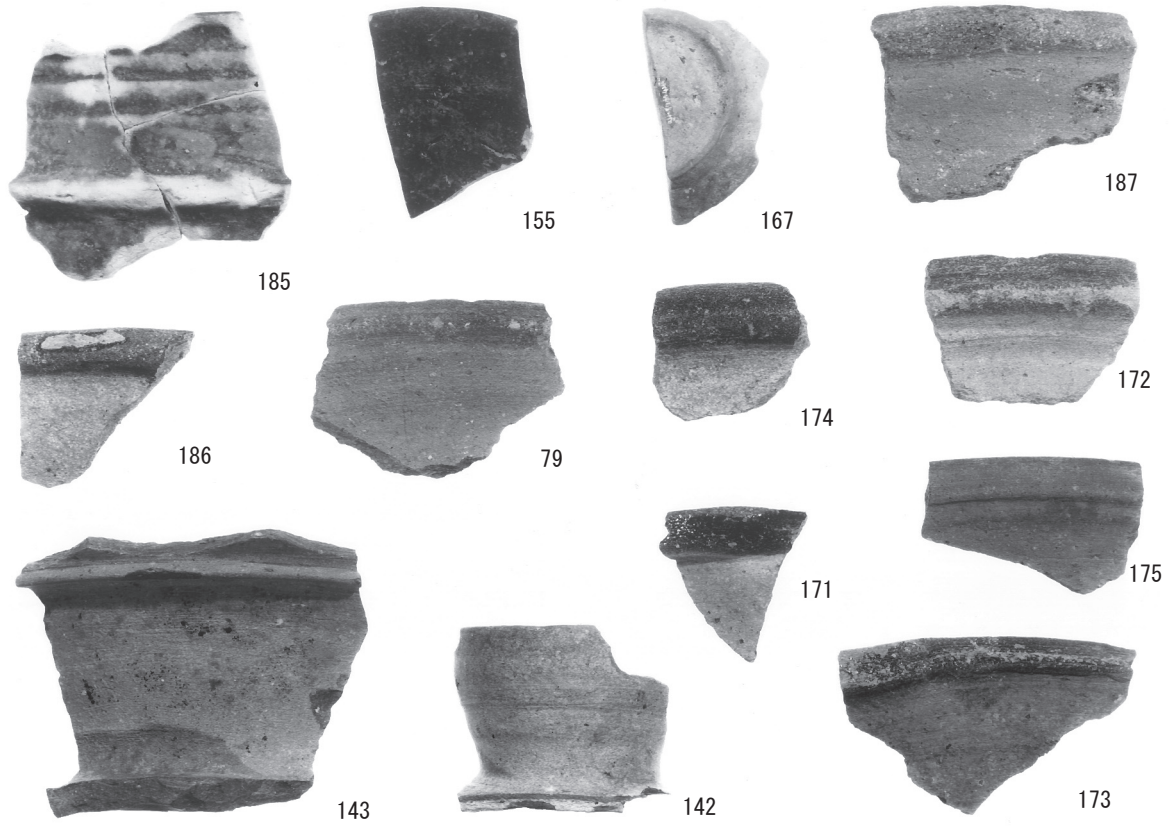
2. 包含層出土遺物



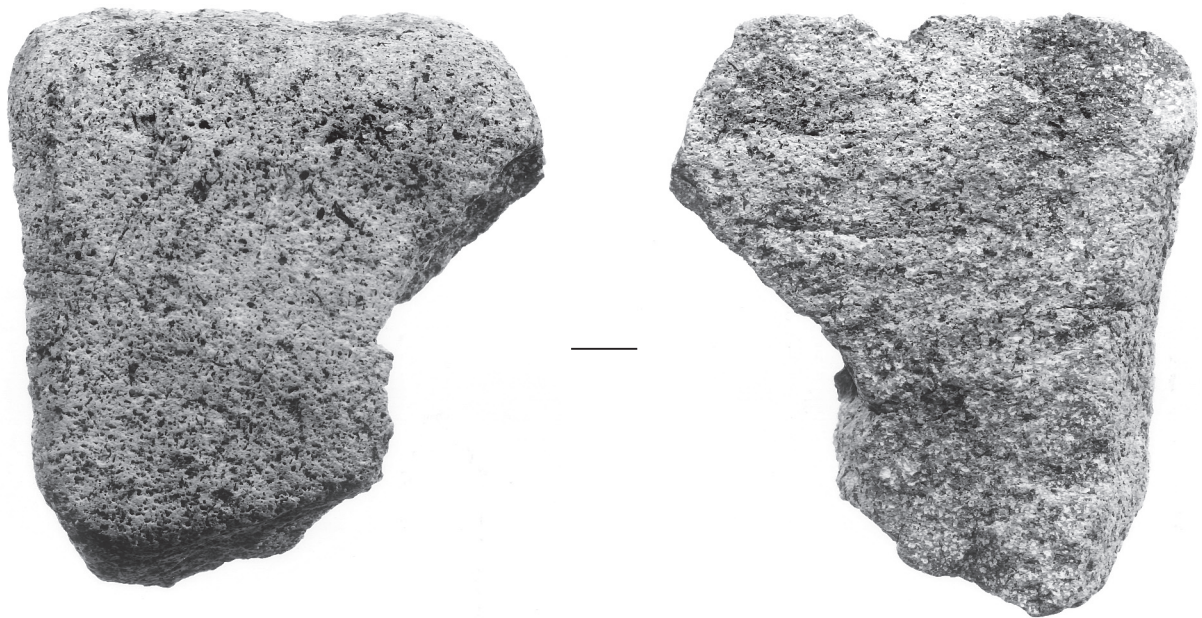
1. 包含層出土遺物



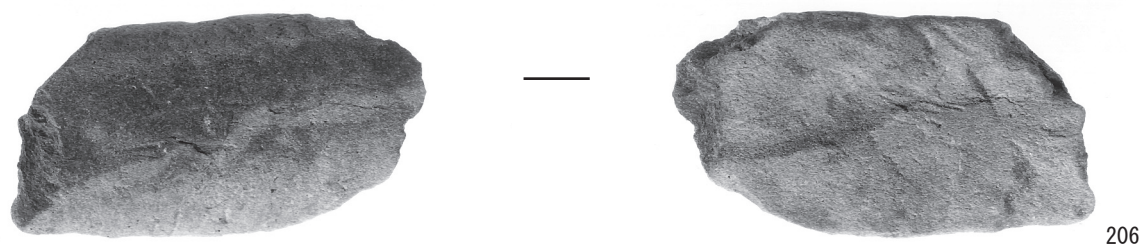
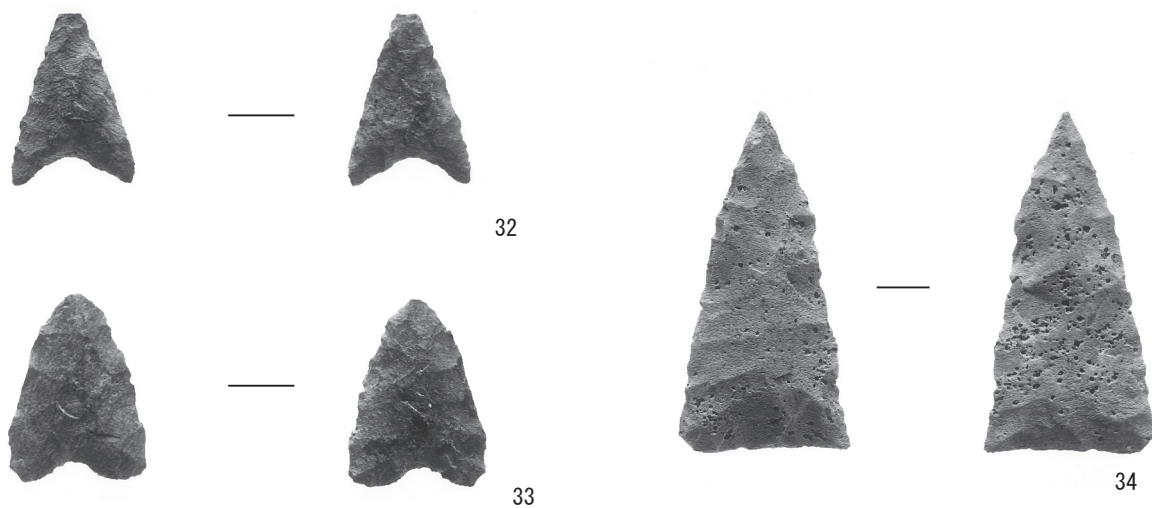
2. 包含層出土遺物



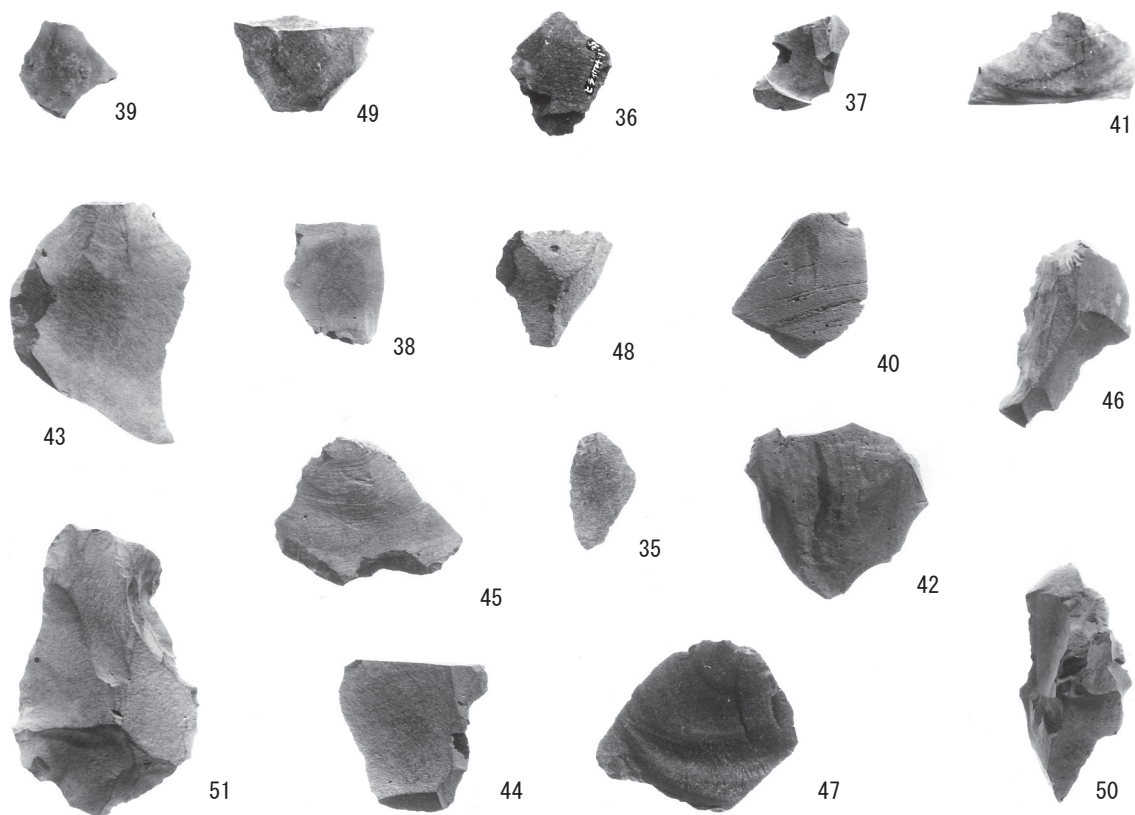
1. 包含層出土遺物



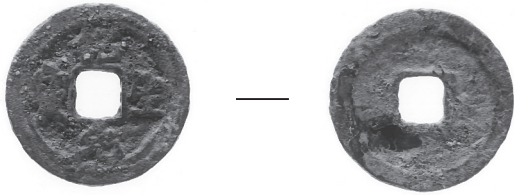
2. 遺構内出土遺物（石製品）



1. 包含層出土遺物（石器）

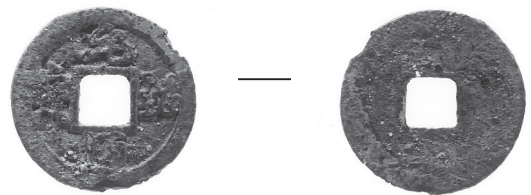


2. 包含層出土遺物（サヌカイト切片・剥片）



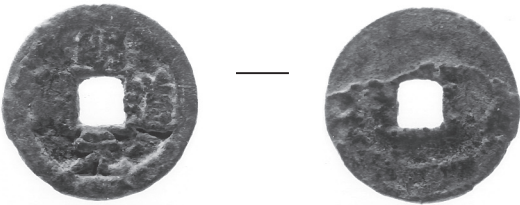
191

1. 出土遺物 錢貨「紹聖元寶」



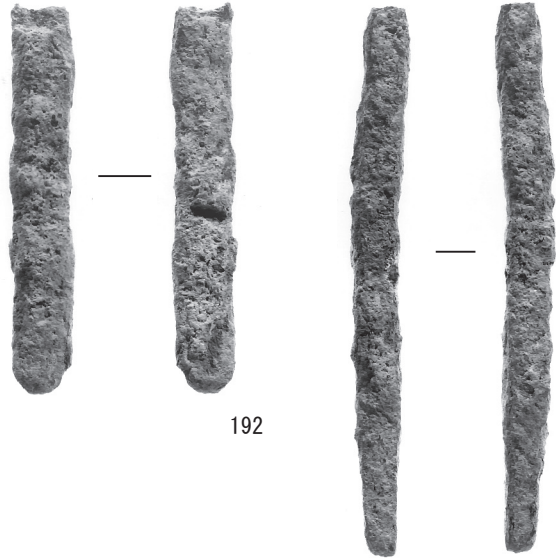
190

2. 出土遺物 錢貨「元祐通寶」



189

3. 出土遺物 錢貨「開元通寶」



192

193

5. 出土遺物 鉄製品（釘・鏝）

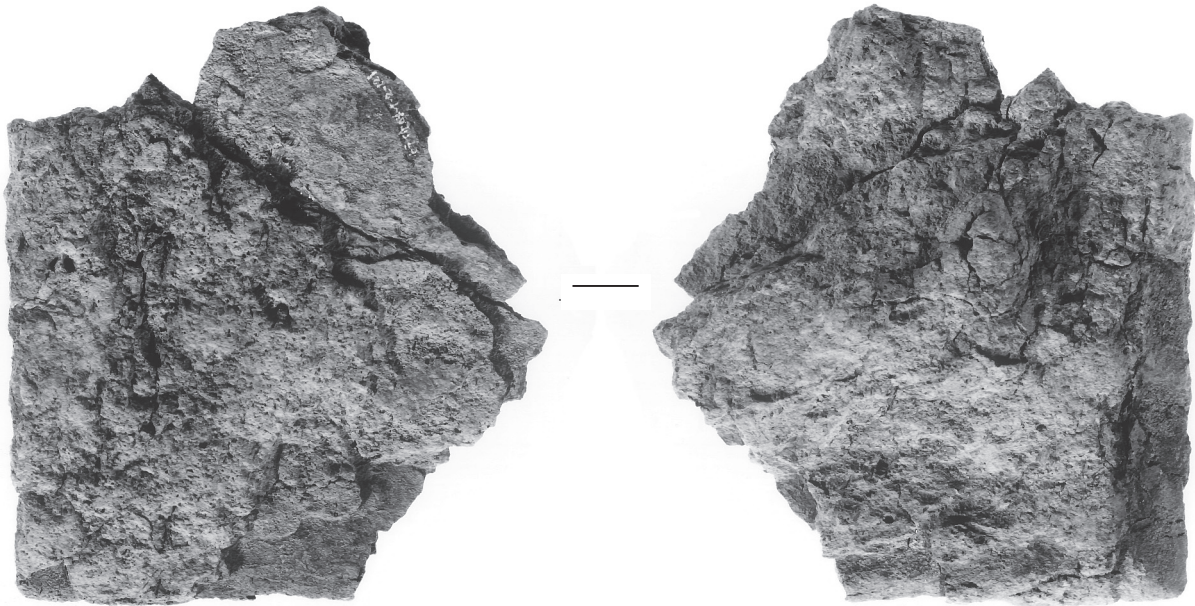


147

59

146

4. 出土遺物 土製品（土錘）



194

6. 出土遺物 鉄製品（鍬）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひらいけいせき							
書 名	平池遺跡							
副書名	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書							
シリーズ番号	第149集							
編著者名	三浦基行・黒須亜希子							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号							
発行年月日	2006年12月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ひらいけいせき 平池遺跡	かたのしほしだきた 交野市星田北 9ちょうめちさき 9丁目地先	27230	66	34° 46'17" ～ 46'22"	135° 39'96" ～ 40'02"	平成16年6月9日 ～ 平成17年3月18日	9,790 m ²	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
所収遺跡名	遺跡種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
平池遺跡	生産	縄文時代				石鏃・ サヌカイト切片		
		古墳時代後期		溝		須恵器・土師器		
		中世		ピット群・区画溝・ 水田・落込み・ 井戸		瓦器・土師器・ 陶器・磁器・瓦・ 墨書土器・ 須恵器・石製品		
要 約	縄文時代に製作された石器が出土した。 古墳時代後期に掘削された区画溝を検出した。 中世に営まれた水田と、これに伴う井戸などの施設を検出した。							

財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第149集

平池遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

発行年月日：2006年12月25日

編集・発行：財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 堺市南区竹城台3丁目21番4号

TEL 072-299-8791 FAX 072-299-8905

印刷・製本：株式会社 明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

TEL 0742-63-0661 FAX 0742-63-0660